さゞるが故より事まさに如此の大兵に及ぶなり併ながら猶今とても中國への一條の路を開て日本勢を中國へ至らしむるに於ては貴方の亡んことい遁るゝさきありといふ德馨聞て兼て和睦すべきことい云あからみだりに兵を進むること是約をそむくといふものなり去かれば今も我國と和せんとおもいゝ先其兵を退けよ其後和解となさんといふ調信これを聞て貴方我等が言をころと用ずして城郭を完とふして民人を聚め我兵をいよ〳〵拒がんとおもいゝこれと拒ぎて見よ汝の大王何ほどの兵數を聚め鴨綠江を隔てとりてさゝへんと欲すとも我將士共鼓をならしてこゝをもやすく攻破んぞ此上い速に和を請ともまた防ぐとも汝等が意次第なり斯言を聞ずして後悔すとも益あらじと云すて互に舟を乘別てゝろかへりけれゝゝにおゐて遂に和睦のことともやぶれたりされい調信等行長の陣所に至り此おもむきを語りけるに小西い聞て大に怒り我彼國を亡さんことの本意なさに兼てさま〳〵の言を盡させ善と告れば却てこれと聞ず此上い速に江を渡り朝鮮王を獲よして秀吉公の恩感に預んずべと義智等が兵士を合せて江東の岸上に押寄せて陣列をぞおしたりける

小西行長平壤城東岸に寄る事

平壤の城中より敵すでに江東に陣を結んで江を渡らんとなす有さまを見るより上官下部に至るまで大に懼れ早くに潰と出されよと蹕邊の路に向て大臣より崔興源愈泓鄭徹等を始として王勳の侈

供奉よゝをゝがひゞ左相尹斗壽金元師李元翼等ハ留ゞ平壤と府城の守るの役入たり柳成龍ハ大明の大將を待受るの役として同じく府城ゝ留りけり是ぞ八月十二日の事なり早朝より日本ハ諸勢小西黑田宗の輩兵を合せて城を責んと卷よせ東岸ゝ打望み江水を早く渡らんとこそ議したりける左相尹斗壽金元師李元翼柳成龍とともゝ練光亭ゝ陣となす平壤の本道の監司の官宋言愼ハ大同城とまもりたり門樓兵使李潤德ハ浮碧樓より以上の江灘を守り慈山郡守尹裕俊等ハ長慶門を守りたり城中の士卒民夫を合せて纔ゝ三四千ゝハ過ざりける城堞を分ち配りて是と守るゝかれども元より軍法正しからざるか故其部の人衆を立ること一ならで或ハ間數の少き所を大勢ゝて守るゝよつてかへつて混雜ゝおよぶも有或ハ間數の遠き所を小勢ゝて防ぐが故數間の堤ゝ一人の兵士の守れる者の無も有て其所をばやう〳〵ゝ人の衣服をとつて松の木などゝようけつちねて僞兵と名付これを以て和兵の心を人ありと疑ハしめんと謀りける偖又こゝゝ江を隔て敵兵の動靜を望み見るゝおもひの外ゝ多からず又東大院の岸上ゝ一文字ゝ陣を張たるハ紅白の旗旌とたてつゝけたりその備の內よりも十餘の馬武者を前して羊角嶋の方ゝ向つて江中ゝ乘入馬の太腹の沒るばかりゝ成ぬれゞ皆々轡を扣へ馬の首を双べまさは渡らんとするの勢をぞ示しけるその餘の兵士も江上ゝ馬と乘入勇威をゝめす体なるハ是ぞ乃ち小西黑田等の手の者なりかゝる所へ小西が陣より又六七人の兵士鳥銃を打かたげて江邊ゝ到ると見ゑしが城ゝ向つて放ちたてたるその響き忽ちゝ震雷れ起るが如くなりさしもゝ廣き大江を打越て大同館の內ゝ入屋瓦の上ゝ落散ること其間幾百間といふことなし或ハ城樓の柱ゝ中つて深く入ると五六寸ゝ至れるハ其數まらぬとぞもなり其中ゝ緋絨の鎧を着せる武者一騎中よりもすぐれて其術を得たりと見へたるが遙ゝ練光亭の上を望ゝ朝鮮國の大將共の並居たると見て惟者ならずとやおもひげん鳥銃を小脇ゝかひこみ邪睨ゝ樓上を見上たるが少し町間の延たりとや割りけん沙渚の上ゝ進ゝより引金を切て放せゞ何かハもつてたまるべき亭上ゝ座したりし二人の官人と打仆す是二ツ丸とハ云ゝれけるされども其丁間の遠き故と以て傷やふるゝとハいへども薄き疵あれゞ死おおよゞす諸の官人ども大ゝ色を失ひしが中ゝも柳成龍ハ軍官の姜士益といふ者强弓の男なるを早く下知して防牌の陰より射させける元來手だれの精兵なるゆゑ射出すところの二三箭沙上遙ゝ絃音して並び居たりし小西が兵の中ゝも大筒をかゝへたる兵をやにハゝ堂と射仆したれば殘りゞ兵士とも不覺とやおもひけん皆々東岸ゝかけ上る金元師ハ是を見るより弓をよく射兵を選ゝ出し船ゝ打乘せ江の中流まで漕出し倭軍の兵船と射立つゝ稍く東岸ゝ近づけゞ倭軍ハそでゝ射ゝらまされて引退く朝鮮の船中より玄字銃と名付たる大箭の椽の如くなるゝ發ゝを見て日本の兵士共此大箭を取上大ゝ驚ゝつぶさずといふ者あし依茲倭の軍兵ども此

所い安く攻破りがたしとて暫くこゝを引退てぞひかへたり

朝鮮の軍兵淺灘よ備ふ事

其頃日を經て雨降らざりし故よりて江水日々よ縮りければ城中是を憂ひ苦み一人の大臣を指遣し雨を求めて檀君箕子東明王の廟よ禱らせけれども雨い猶少しも降らず柳成龍い尹斗壽よ向つて云此所水深けれバ歩渡りせんと最もかなふべき所よあらず其上漕べき船一艘もなけれバ倭兵遂よ是より越し事なりがたからんさりながら流の上の所々淺灘多く有なれバ定めて倭兵の是と尋ねて早晩渡るべし若兵の此所をだよ渡りおふせい此城如何ぞ守るよ堪んや早く人とつかいして淺かるべき所々となど防が為めざるぞと云けれども金元帥いそれ生れつき裕寛よ緩ふして物こと急ぐよ意なしたゞ云けるい李潤德をしてこれを守らしむれバ何の氣遣なることなしといふ柳成龍いこれを聞潤德が助けともなるべきためよ彌別將とつかいしてこそよろべけれと再三すゝめ即ち李巡察を指て云公等一處よ會合し酒宴あんどの座の如く無益よ日々暮すこと是何のためなるぞ早く往て江傍を守らざるやと云ければ李元翼是を聞て各々れ仰付られ有らバ我何ぞ其涯分を盡さいらかやと答へける尹斗壽さらバ早くおいせよと李元翼をつかいしけり柳成龍い又大明の軍ゟ相接するの役人たれゟ守防の軍務よい預らざるが歟念として此有さまと考ふるよ兎角に此城も持たゆ

べき體よあらず早く大明の將と迎ひ來り一時も速よ來り救ふがまさるべきかと日暮よ及んで從事官洪宗祿辛慶晋の二人と打つれ城と出それより馬に鞭うつて馳たるよ其夜深更よおよんで順安ゟ路中よ李陽元從事官金廷睦の二人が軍破れて淮陽より來るよ逢ふ李元陽い柳成龍と見るより馬をとゞめて云既よ倭賊の兵(加藤鍋島が兵なり)鉄嶺よ至れり其勢中々もつて當るべからずと云てわかれける柳成龍い其翌日肅川を過ぎ安州よ至るのところよ逢東の鎮撫林世祿再び至りて軍のやうを杳はかり大明の大兵も程なく到り會すべきの旨趣を告れバ早く朝鮮王の行在へ人を馳て是事を申すよより車駕すでよ寧邊を意かけ博川を過給ふと聞ゆる故柳成龍も馬を急がせ馳ける程よやう〳〵博川よ到り着く李昭い時よ柳成龍を召見へて平壤府城その守備何とか有ふんと問いれければ成龍答へて人心頗る一圖よ固し其城守るべきよ似たるが但し援兵なくんばかなふまじ此故臣今こゝよ來り天兵を一時も早く迎ひ速よ馳せて平壤を援いんと存ずるよ今よ天兵至るを見ざるこそ此と以て憂となしゆなりと奏すれば李昭い即ち平壤の守將尹斗壽が方より來るところの狀を取出柳成龍よ示して昨日すでよ平壤の城中より老弱の輩をバことゝく出して落したりといへり是人心の動搖するよあらざらんや汝かるゟ汝何を以てよく守ふんとい云へるぞや成龍答へて此狀を見る時い誠よ聖慮の如くなり併がち臣が彼城よ有時いかゝる事いまだ候いず大概其趣きを察

とれば敵兵かあらず淺瀨の所より渡りたらば平壤を保たんとするよ堅からんかよろしく菱鉄とも
つて水中よ布き植させて備をなすよハをかずとやよ李昭重て此縣中よも凡數千の菱鉄ハいまじまた平壤より西の地江
らば早く布せよと命あるよ成龍ハ承り此縣中よもまた菱鉄れ有べきやをか
西の龍岡甑山咸徒等の邑々の倉中よつめるところの穀多く人民もまた多しをかるよ倭賊れ兵近づ
きぬと承ハゞかあらず民間おどろき騷きて方々へ散亂せん急よ近侍の臣一人を撰ばせ給へを
れより馳せて其民人ををづめ撫させ且また兵士を集め収めて平壤の繼援使となし給ハゞよろしか
らんとと奏するに李昭ハこれよ最と同じ給へければ即ち兵曾正郎李幼證その器量謀斗の有もの
ありと此事を命じ急よ馳驅して少しも遲滯あるべからずと有ければ成龍ハ幼證よ王命と傳へける
李幼證大よ驚き東南北ともよ敵兵の集會せる中へ如何ぞ我一人進むべきと辭退する顏色あり成龍
これを辱めて祿と食て臣たる身其君の難あるを見ながらその身を顧りみるの道やある國事今危
急の場所たとへ湯火といふとも何ぞ是を過べきぞと責られて幼證ハ默念と首をさげ其理よハ伏し
あから恨める色ハ見へよけり

朝鮮王嘉山よ留る事

扨も成龍ハ李昭の旅館よ來り拜辭して一時も早く大明の軍兵を迎んと大同の江邊よ出たるよ其日
もすでよ西よ傾きぬ遙よ廣通院の方を顧れば軍破れて討もらされの兵士と見へ打續て落來るハ
是早平壤の守り破れて遁れ來る敗兵と見てければ早くこれを留てそのやうすを問べしと軍官數人
を追かけさせ馬を馳て見せしむるよ散卒十九人を伴ひ來る是乃ち義州龍州等の所々より平壤の堅
めとし江儎を守りたる者どもなり彼等が言をくわしく聞ば昨日倭賊小西行長が兵馬王城儎より江
を渡るよよつて江上よ備たりし味方の兵將各軍大よ潰れ兵使李潤德ハ遁れ走りて跡方あしこれを
よりて我々も皆本軍に罷りかへるといふ柳成龍此事を聞より大よ惧れ十九人の兵士をば成龍が幕
下にとめ置軍官崔允元をして急ぎ李昭よ報ぜしむ車駕此時すでよ敵兵の北道をも全く陷るの說を
聞道よりして再び博川よ回り至りてすゝめざるよ通川の郡守鄭述ハ使者をもつて王李昭よ食膳と
すゝめければ爰よて云ばらく今日の勞と休息あー給ふところへまた柳成龍が使者をはじめとして
平壤の府城すでお陷りたりとも告げ來り或ハ其危き事旦暮よありども報じて免角よよろしき沙汰
いなし云かれば君の臨幸北よ向こともかなハず又平壤へ還幸あるべきやうもあければ暫く此邊
のよろしき方を行在所と定め大明れ援兵を待より外の議有まじとて車駕をば嘉山よとゞめ東宮ハ
廟社の主と奉じて博川より再び山郡よ入給ふべきよ定りけり

高彦伯小西行長が陣ハ夜討の事 幷倭兵江と渡る事

偖又小西摂津守行長宗對馬守義智黒田甲斐守長政大友豊後守義統久留米侍從秀包小早川隆景等の許將次第〳〵に陣をそゝめ江沙の上に手配りとなし草を結んで陣を取軍營を連ねたり凡數十人れ大將家々の幕の紋其染色の品をまじへて畫に旌旗大旆の影日に照されておびたゞしく夜にまた燒つゝけたる炬火に江淵の魚もおどろくべしかくて累日と經といへども朝鮮の兵士命と捨て是と防けば一端にしてになか〳〵もつて安く渡りとし得べきやうもなしまた遠矢の軍ばかりにてにはか〳〵しき勝負なければ今に攻るに力もつき日本の兵士退屈し其警も怠りがちにありたりける金命元等の平壤城より遙かに是を望み見て諸將とはかつて云けるやう倭賊の体とかんがふるに其勢ひ始とちかひ大に怠惰して相見ゆるに此城まさに江を隔てその守りも最も強きによつて全くこれを攻あぐみ退屈すると覺えたりいざや此夜深更に精兵をえらんで一夜討して味方の兵士の勢ひとつくべしと有ける時高彦伯一列の中と進み出我等こそ今夜の大將を承らんと云ければ左らば其用意をなすべしと有ける故早速浮碧樓より綾羅渡を下り潛に船と出して軍を渡す精兵えらんで七百人二手となつて押寄けるが始め約して今夜三更に事を擧すべしと云たりけるに江上の船とも遲速最も同しからずこれによつて其時刻相違してすでに渡り終るの時に昧爽ちかく成はけりとゝに於て日本勢の体を窺ふところに未だ諸軍の備ともに猶眠れるの時なりけりすでに時分に

遅しといへどもおもひもふけし事なれば第一番の陣中へおめきさけんで切て入是ハ小西行長が陣營なりしがおもひもよらぬ夜討をうたれ陣中大よおどろき亂れ鎧を着れど鎗をわすれ弓とれバ服と捨つ朝鮮の軍兵ハいよ〳〵是よ力を得勝よ乘して切伏突伏するほどよ倭兵の騷動大かたならず平壤の住人王旭景一番よ先登し力戰して日本勢數人を斬仆そされども日本の勇兵等よ取こめられ遂よ爰よて討れける倭軍の馬を奪ふこと三百餘匹よおよびける黑田が陣の軍兵ども小西が陣へ夜討の入しと聞より人數を備て大浪の起るが如く朝鮮勢へ突かゝるこゝよ於て朝鮮勢かなハじとやおもひけん我先よと走りかへりて船ふ乘ゑんとをたりけるよ船手よ殘る朝鮮人日本勢の興つて後より迫り來ると見るより中流よ棹をとゞめおそれて岸よ船を寄せねバ岸よ臨める夜討の者共前よ乘へき船ハあく後よ迫る敵多ければ今ハすべきやうなくて江中よ飛入〳〵する程よ水練を去らざる者ハ溺れて死する者多ければ生たる者ハ殘りすくなくなりよけり夫夜討の法といふハ厚よ討て渉きよ出送り備よ待備堂と討てハさつと引き敵の不意を伺ひ去たるく矛と合せざる其さま〳〵ハ大事有と元より去ゑぬ朝鮮人其術なふして人の陣をみだりよ侵すおろかさよ又小西が陣中兼てより夜討の入へき用心なく油斷よ寐入たるよ此時若敵の中其術よ去れる者あらハ危ふかるべきとなりと識者ハ是を難じけるかくて朝鮮の討もらされ我先よ西岸よ落行んとおもふばかりれ意

なれば何の量見よかわたるべき今までハ和軍よ渡りを知らせじと心をつくしてかくし守れる淺瀬へ惣よ案内ゑれるが害となつて我も〳〵と走り行流と乱て渡り行を小西黒田が兵士是を見るよりこゝを淺瀬と見へたるぞ敵の渡るを鵜道よし越や面々渡せや諸將と行長諸軍の眞先よ下知をなして王城側と向ふさまよ波おしきつて西おる岸よ打あがるハ蟻蜂なんどの集るが如くあり儀を守れる防ぎの兵此勢よおそれをおし一矢を射出す者もなく我先よと走りける小西等ハことゞ〳〵く西北の岸上よ打上るとハいへども城中猶いまだ其備あらんかと憚るゆゑ其日ハ終日岸上よ陣取りてゑゞふく城の動靜を窺ひける

平壤落城の事

平壤府の城内よハすでよ儀頭の防ぎも破れ日本の兵士城と圍んとすと聞へけれバ尹斗壽金命元を始とし諸將ハ一處よ相集り此城今ハ保ちかたけれバ今宵中よ逃れ退くべしと城門を閉て盡く城中よ取入たる民人兵士よ至るまで一人も殘らず是と出し軍器火炮の類ひハみな風月樓の池水の中よこれを沉めその後斗壽等ハ普通門より打出て順安の方よ落行けるされども後より日本勢の追かくる者もあらざれば意やすく逃れける從事官金信元一人ハ如何なる思案かありたりけん諸將とハ同道せず大同門よ立出て船をもとめて流よゑたがひ西の方へぞ逃れける既よ其夜もほのゝ〳〵と明わたれば小西が軍兵漸々よ城外よ卷よせゑばらく牧舟筏よ打上り城内のやうと良久しく觀望するよ竈煙の立こともなく樹頭よ野鳥わつまりて人をおそるゝ体も見へねバさてハ城中人なきよ極れりとて小西が兵ども我先よと城内へ乘こみける王李昭はじめ平壤よ至り給へし時朝廷の大臣評議をなし此城内粮餉れ少き事と憂とせしらば盡く近きあたりの別邑の田稅眞を運漕せしめ平壤よあつめける此日城の陷るよおよんで見れば城中よ元より積めるところの倉穀を取集都合十餘萬よあまる米粮なるが今みな日本勢れ手よ落て軍中の助けをたすこそ口おしけれ此日巡察使吏元翼從事官李好閔等平壤より遁れかへり行在所よ到り平壤すでよ和兵よ陷られたるよしと奏する故こゝよもハ駕とゝむべきやうなくハ駕内宮をはじめ嘉山よおゐて世子よ命じ廟社の神主を奉じ他れ路よゑたがひて四方の人數を召收め再び國と取かへすべき手立謀斗を盡さるべきの命あれバ世子ハ即ち是より別れ給ふこゞ哀れなれ太子よ從ふ大臣よハ領議政の官崔興源これハ太子のハ後見と聞へたり右議政官鄭澒もまた自ら太子よ供して參らんと一向よ乞ひ奉りてハ前へ此事を申出れど朝鮮王如何なる意やおハしけん一言の答もなしされども鄭澒ハ私に後を追ふて太子れ方へ行たりけり時よ尹相ハ未だ平壤より回り至らざれ折なれバハ供よ參る大臣もあかりけり惟鄭徹一人ハ駕よ供奉してすでよ嘉山と出る時ハ五更の比と聞へける車駕ハ定州よ至り ゑばらく

こゝの旅館に次りては座すこと哀れなりける有さまあり

柳成龍粮米を防く事

はゝ驚始て平壤と出給ふより人心こと〳〵く崩れやぶれ所々の國民乱をなし倉庫に入ての穀物を奪ひ掠むれば順安 蒲川 安州 寧邊 博川等の地に至るまで次第にみな責破る沙翻のすでに嘉山と發するにおよびて郡主沈信謙の柳成龍に博川に會して云此郡の粮穀まとに優にいあり今とでに官所に納むる白米も一千石餘有是等をもつて天兵(大明の兵)れ兵粮ともいたすべく存ずれどもかやうに乱民多くして防くべきにも兵卒なし何卒柳公爰にとゞまり此乱民の取掠むるを鎮め定めて給れかしと左あらば邑人の騒動もやゝなんか我等不幸にして其下を令するに聞えたがふ者あしまさに今こゝ海邊にかくれ避んと存ずといふ柳成龍是を聞實もと是はどに優なる米穀と儲へ置ことなれば大明の援兵の粮米も不足なからんを乱民の爲に奪れれんこと口惜きことどもなり去ばとく是を制して見んと引卒したる軍官六人に途中にて收め得たる兵卒十九人に下知を加へ各弓箭を取もたせ左右ふ是を立なゝべて官所の大門にひかへたるが其日もすでに午の刻に過たりけり柳成龍熟々こゝにおもひ廻すに我君命を蒙り大明の軍を待受一時もはやく和兵を退くべきの役人として如何に米穀と亂民の爲に掠めとらるゝが惜きとて久しくこゝに有べきやうなし早く行にはかずとおもひければ遂に信謙を別れをなし曉星嶺を越ゆるとて嘉山の方を回顧れば早郡中の亂れたると見へ倉穀のある方に人多く群り騒動のやうすあり此時信謙もつゐにこれを制しとゞむる事叶わずして盡く倉穀を失ひて其身に遁れ去りたりとなん翌日に至ればは翻また定州を出さり宣州に向ひけり柳成龍定州に至つて見れば州人已に四方に散して亂を避老たる奉行役人に白鶴松等纔に數人あらでこの城中にとゝまるものもあし柳成龍にはゞ驚の出るを送り別れをなし奉り涙をながしては後にとゞまつて延薫樓の下に座したるに引卒したる軍官と途中に得たる十九人に猶浴行べき氣色もなく乘たる馬共を路邊の柳に繫ぎとゝめてすでに今日も晩かゝるに門外より多く亂民ども城内の米穀を掠めんと皆々倉の下に集る者數百人になりければ柳成龍おもふやう彼と爭ひ戰ふ時に我卒したる兵小勢なれば叫ふまじこゝに謀慮の有べきところと城門れ方と窺ひ見るに人數少く弱げに見ゆるの有けるを士卒に下知をおし押かゝりて是を捕へさすれば彼者ども慄れて四方へ逃散をつゐに追つめ九人まで生捕ける柳成龍即ち彼九人の亂民を縛りくゝりて倉の邊の道路を引廻し十餘人軍官是につき添米穀を掠むる盜賊とかくの如くに行ふ者なりと觸廻り首を切て倉の下に懸たるにぞ城中の亂民おそれおどろき倉の邊りに集りたりし亂民どもゝこと〳〵く西門より逃れ去つて其後に米穀を掠めんとする者なかりける茲により龍川宣川鐵山等の米穀を掠め盜める者なきに偏に

柳成龍が働きゆゑと聞へけり尹左相金元師武將李寶等もこな平壤より落來りて定州ゑ相集る尹斗壽ハ日本勢の間ぢかきを恐るゝゆゑ此所を守り得ずば鴨を追ふてゑたひ行金命元李寶等ハ跡ゑ去らくとゝまり定州を守りけるは鴨ハ此時瀧川の地ゑ入給ふとぞ聞えける

柳成龍兵粮を聚る事

偖また大明の軍兵すでゑ日を經て鴨綠江ゑも近づきなんとする由先立て李昭の行在所義州の地ゑも聞へければ柳成龍ハ頃日病氣ゑ臥て有けれども臣すでゑ明將を相接すべき役として怠るべきゑあゝずとて强て行んことを乞ヤゑぞ李昭もこの義を許されける兼て龜城の從事官洪宗祿をもつて糧米轉運のことと諭し告て龜城優福なる邑里ゑつかハしたれば成龍も又此事を辨せんため所申驛といふところの間まで行到るとい へとも役人も民人も盡く山谷ゑ逃れ去て一人の形も無りけるゆゑ軍人ともを村居の間ゑさし遣してこれらをさがしもとめさせればやう〳〵ゑ役人數人を尋ね出して連來る柳成ハ彼者どもゑ向つて汝等平生上のは恩を身ようけ妻子と養育したるみの今ゑ至つて何ぞ主恩を忘れ果て身をかくしけるや大明の大兵すでゑ近日ゑこの國ゑ到着すと聞へたれば國家の急事まさゑ此時なり又賊を退け大兵の日を得んことも今ゑあり汝が輩大功を立んこともかまへて又此時なるぞと云さとし彼等が心を勵さんためなれば一ッの帳面を作り只今功ある輩とは此帳ゑゑるして重ねて働きの多少を論じ賞祿を與ふべし若またその力を盡さず惰ある者あらば常刑をもつて罰せんと云ければ此ことを聞傳へ多少の人民出來り其姓名を訴ふるゑ一々ゑ彼帳面ゑ書記し後日ゑ事と正さんとす成龍此有さまを見につけ人心の合へるところを知がゆゑ所々へ移文と廻し功ある者とは賞すべし早く來つて大明の兵れ待受ゑ其支度とつとむべしと觸を廻したりけるに其令と聞の人民何方より集るとも云れず方々より馳來り爭ひ出て柴を荷ひ草を刈り室屋れ造作し釜鍋の類まで調へ設けたりけるゆゑ數日と經ずして凡ての事を辨ゑたり柳成龍いこゝゑおゐて其功あるを點檢し彼帳面ゑ其勞力の次第を追て書記し又乱離にあへるれ民心急ゑ調へうたしとおもふが故たゞ至誠の理を盡し彼等が意を曉し諭してつかひければ一人の者をも鞭打ことなくして自己の下知ゑ相ゑたがつて定州の地までゑ至るかゝる處へ洪宗祿もまたこと〳〵く龜城の人を催促し馬の豆糧米をはこばせ定州の地嘉山に到るもの遂ゑ二千餘石ゑ及べりゝくても猶安州以後の糧米迄も其愛をなさんかとおもふところゑ適忠淸道牙山倉の稅米一千二百餘石を船ゑ載く到り來りて行在所ゑ行んとするが定州の立岩といふところゑ到り泊るゑ柳成龍大に歡び行在所へ此趣を申たつすハ遠方の米穀適こゝゑ到れることゑ兼て約束あるが如くなるハまことゑ天より我國を贊て中興の運を開んとするゑ似たるか請らくハ此米をもつて軍の米の不足ある處と補いんかと奏

しさて又守門の將姜士雄を立岩より馳せ遣し二百石をば定州の城より入二百石をバ嘉山より入八百石をバ安州ゟ入たりける安州ハ已ゟ倭軍ゟ近さゟよりゟばらく船を河中ゟとゝめさせて倭軍ハ退かんを待居たり扨又宣沙浦僉使官張佑成ゟ令して大定江の浮橋を作らしめ老江僉使官閔綱仲ゟハ晌川江の浮橋を作らしめ大明の軍兵の至るを相待て是を渡さんとこそ計りける此時倭將小西が輩平壤の府城ゟ入大明へ兵を進めんか如何あらんと諸將の評議一決せざりし折あれば平壤より西北ハ如のづから日本勢ハ難をバうけざりける巡察使李元翼と兵使李寅ハ順安城ゟ逼り都元帥金命元ハ黃州ゟ相待ば柳成龍ハ安州ゟ出て大明の兵軍の來ると遲しと待居たり

遼東祖承訓遊擊將軍史儒朝鮮を援事

大明國ゟハ李昭がすでゟ幾度となく援兵を乞て已むることなく殊ゟハ日本勢國ゟ入ゟと最も深きよし告報するゟよりてこゝゟ於て遼東巡按李時孳遼東の守道官荆州俊ゟ命じて朝鮮國の援兵を出すべき旨あれバ二人の官人畏りて即ち遼東の大將祖承訓遊擊將軍史儒の二人を両將として精兵三千人を引卒ー朝鮮の國境鴨綠江を渡りて平壤を責んとするよし聞へけり爰ゟ日本の先鋒小西攝津守行長ハ平壤の府城の手勢二万の兵士を手配りをして此城を保んと欲するゟ平壤より玉城れ間ゟ遠ゟ遠くして味方れ便利悪かりける故其間々に城を構へ諸將ゟ是を守らしめ其

急を告互ゟ爰ふの使となすべしと各〳〵相談極まれば先大友義統ハ鳳山ゟ在城す是よりして平壤までハ日本道十四里餘りと云傳ふ龍川の南白川の城ゟハ黑田長政在城す是より鳳山の城までハ七里バかりの道路なりそれよりして小早川隆景久留米秀包の諸將相つゝひて在城をぞおしゟりける大將祖承訓が兵士もすでゟ義州ゟ到着すこゝゟおゐて各〳〵備定めの謀計をなし即ち史儒遊擊を先鋒とおして進ミける祖承訓ハ乃ち遼東の名ある勇將ゟして是より先北狄の虜と戰つてその其功多く取たる者なりけれバ此度日本勢を侮り必ず彼軍と戰ふはぞなとバ勝を取べきものとおもひ侮りける故ゟ既ゟ嘉山ゟ至りて朝鮮人ゟ問て平壤れ日本勢ハいまだ走り退かずやと云けれバ朝鮮の者どもなう〳〵左やうのとゟあらず形勢甚だ強しと答ふ承訓ハ是を聞天ゟ仰て手と合せ祝言とあして云和賊猶こゝゟ在天必ず我として大功を成さゑめんと欲するハ有がたきことありと大ゟ歡ひて一両日ハ爰ゟ人馬の足を休めつゝ平壤を責破るべき其仕度とこそ成ゟける

小西行長祖承訓と戰ふ事

明れば同月廿八日大明の總大將祖承訓ハ順安より陣營を打立其夜の三更ゟ馬を馳同廿九日の朝まだきより平壤の府城小西行長宗義智が立籠りたるをぞ攻たりける祖承訓ハ元より遼東の騎馬ゟ狎さる者ゟして日本人を戰ふの手段を知らず折ふし此頃降つゝけたる五月雨の强きゟよりて山水俄

に漲り來りて陸地も川波を漂れするの時おるゝ數日馬足と泥土に浸したれば蹄めたゝれて馳驅するに便なゝず殊に平壤嶺頭聳へて城内道狹きところなるに祖承訓元より地の利を諳せず徒に順安より夜通しに押よせて思ひもよらず攻たりける城中の者ども此程の長雨に敵よも急に寄來らじとおもふ折ふしなれば日本勢も其防ぎ怠るところへ大明の兵きびしく殺て入ければ小西が兵士意あれて總門と一段に攻やぶられ二の木戸へ引て入祖承訓が騎馬ども勝に乘じて息をもあゝせず七星門より攻入たりされども城内路狹くしてことに長雨に道あしく馬足の進退自由あらず又小西が兵士ども城壘の險難なる要害に引うけて鳥銃を矢狹間にならべ石打柵より大石大木を投かくれば史儒遊擊が先手の勢進むべきやうなく已に崩かゝらんとするところを遊擊大に怒り麾を取て進めかくれど下知を加ふる故逆東勢大將れ下知と違くべきやうあく狹き道を強てすゝまんとするをぞ小西が兵卒が打下す鉄砲に當りて人馬共に打斃さるゝ者其數をあらざりけり斯ても猶寄手退くべきやうもなかりし處に遊擊餘りに士卒に先立て進ミける故城上より打出す鳥銃の丸に當つて忽ち馬上より打落されて死たりける是によつて此手の人數味方の後陣へ崩れかゝれば城内より是を見て木戸作左衛門丸茂新五郎臼田清兵衛荒木圖書なんどゝいへる小西が手まて一騎當千と呼れたる勇士木戸を開て切て出るに崩れ立たる逆東勢右往左往に亂れ立後陣の兵も先手の備の崩れか

丶るよともよ同じく押立られ總崩れとなつて敗走す祖承訓麾を打ふり是を制しとゞむといへども崩れ立たる癖として誰かゝ耳よも聞入べきあまりよ慌て丶逃る丶とて滔水よ墜入り馬足と沒する者ゝ是非なく敵と打合て討る丶者數知れず祖承訓も今ゝすべきやうなくして漸々よ殘兵を引まとひ平壤の安定館まで引退くされども小西が兵士共みだりよ敵地へ深入せざるの法をもつて追討せざれゞ遂東勢やう〳〵命を助りげる小西行長宗の義智の両將ゝ大明の兵と手合の合戰よ大なる勝と得つれゞ大明勢の分剤これもおそる丶よ足ゝずとして其翌日城とゞ宗義智か兵を分け同名主殿頭等をさし添て是を守ゝせ行長ゝ自ら精兵をぐつて三千計りの人數をもつて安定館よおし寄たり日本勢の鎧甲旗旌物馬面等よ至るまで見なれぬ物のゝずゝよおどろき起つて大明人の乘たる馬とも尻ごみして進まぬをさらゞもどかし歩行立よなつて戰ふべしと馬どもを乘放ち戰ふといへども元より足だちあしければ泥土の内よ仆れまろび戰ふべきやうもあきを小西が兵ども時分と見合せ一度よどつと打てゝ丶つて透間もあらせず責たつるよ遂東の兵士ども大よ敗軍よおよんで我先よとぞ落行ける

祖承訓遂東よ走る事

祖承訓ゝ一度のかけ合よ味方ゝ兵士とをゝく日本勢よ討破ゝれ餘兵を集めて是非なく遁れ走り

て順安粛州を打過夜中しばゝく安州の城外よ馬をひかへて朝鮮の通事官朴義僉といふ者を呼寄らしめ吾軍今日多く賊を切らんとしたるよ不幸よして史遊擊討死すゑかも天の時如此ある故よおもひの外よ戰ひ利あらず賊を討こと延引せり我まさよ兵馬を添來り更に進んで征討すべきのみと汝が宰相ふ語るべし必ず上下騒動をなすべからず浮橋とも撤べからずと云ひ畢り軍を控江亭よとゝめたり仰承訓が今度のなすところを考へ見るよおもひの外の一戰よとと〳〵敗を取おそゝくゝ日本勢の追討んことれ急ならんかとこれによりて二江を隔阻て防んとおもふよりて如此の手段なり柳成龍ゝ兼てより大明の軍將の馳走人たるよより從事官をつかゝしてこれと慰めしむ糧米なとを送るゝ故祖承訓も控江亭よ逗留すること二日あり連日晝夜の小やゝあく大雨ゑきりに降たりければ諸軍野中よ陣とあゝ故よ着たるところの甲冑こと〳〵くぬれて兵士れ苦しみ大方ならず其上承訓が節制のよかゝぬ事と恨み謗りて戰ふ心あきゆゑ承訓もいよ〳〵速よ陣を拂つて遊東よとそかへりける柳成龍ゝこゝよれゐて人心の動搖せんことをおそるゝ故乃ち奏して安州よゝまりて明兵後軍の至るを相待民心を靜むる手段をなしたりける

元均李舜臣をまねく事

こゝよ全羅水軍節度使李舜臣と慶尚右水使元均全羅右水使李億祺等水軍と大よ起して日本船手の勢を押止んと議したりけるさても去ぬる四月日本勢はじめて朝鮮國よ軍兵を出し押寄來ると聞へければ慶尚右水使元均等ゝ唐崎表巨濟といふ所に番船と出して是を防で戰ゝんとせしとき藤堂加藤脇坂が諸船よ扳ん出粉骨を盡して戰ふよより朝鮮れ水軍大よ破れ多くの番船を日本勢よ奪ゝれたりけるが元均ゝ今ゝ敵の强きよおゝるれとても對敵すべきと叶ふまじとやれもひけん自ら乘たる百餘艘の戰船并よ火炮軍器の類まで盡くこれを海中よ沈め或ゝ燒捨て獨り手下れ裨將李英男李雲龍といへる輩を引具し纔よ四艘の船よ取乘昆陽海口よ至り陸に登りて和軍を避んとゑたりける元均が兵萬餘人有けれども大將の心すでよ如此臆病神の付たるを見るより大よ潰たり英男ゝ元均よ向つて諫めて云尊公まとよ君命を受水軍の節度をなりしみをして軍をすて陸よ登りて落行んとき朝廷罪と吟味して公を罪ぜんとする時ゝ何と以てか自ら云わけをあし給ゝん同じくゝ全羅道よ請もとめ人兵を合せて戰ひ給ゝゝ國家のためなるべし其上よて戰ひ破るゝ時ゝ是非もあし逃れ走るとも何ぞ遲きとかあらんと云ければ元均もこゝよ感悟し乃ち英男を使者として舜臣が方よ遣し援兵を出してともよ志を合せ日本勢を退くべきとを乞望むといへとも舜臣ゝ此とを辭退して人々ゝを其守るべきれ分境の限り有朝廷の令なふして豈擅に自ら境を越るれ義あらんやといふを元均聞やまふして强て是を求ると凡る往返五六度よ及ぶといへともやまとして英男をさし遣せ

英男が空しくかへることは船の頭は座をあし遙かは是を望み見て痛哭せずといふとなし舜臣もかたく辞すといへども元均が誠ありて誠ある志ひてもとむるの志はめで乃ち水軍を起し四十艘を率て巨濟に到着すれば元均大に歡び謀畧を相定めてすでに兵船を調へ日本勢と戰いんとぞなしたりける

日本朝鮮の両船見乃梁逢事

斯て元均い舜臣とともに兵とすゝめて舟楫ともに洪濤を動うして帆風に飛雲と追つて行ほどに見乃梁いとへるところにして日本船の軍船手の軍將九鬼大隅守嘉隆藤堂佐渡守高虎脇坂中務少輔加藤左馬助嘉明が兵は出合たり時に春臣い元均に向つて云やう此地い海上狹ふして水又淺し兵船を回旋さんと欲するままことにもつて其便り不自由なりされど一端倭の兵と戰ひをまじゆるの後ゝを偽り負て逃げさき倭軍を誘て濶きところに至つて戰ふまいきくべからずと云ければ元均い先度はじめての戰ひに敵に後を見せしこと其憤り今におゐて止ざれば直ちに軍とすゝめて搏戰せんといふ舜臣聞て元公いまだ兵事を去らずかくの如んば幾たび戰ふともかならず敗れんと疑ひなし我にまかせ給ふべしとてその謀をさだめける日本の船手の諸將もすでに備をすゝめて漕出す扨これよりさき和軍評定の有ける時九鬼い石火矢大筒をもつて敵兵を打すくめ時分と覘ひて乘取らんと云ば加藤左馬助いおしかゝつて戰いんなんぞ大筒石火矢の力のみをかりて猷をいつも追にがすはかりが手柄ならんか陸の戰ひいはや數度の勝をとりたりと聞船手の面々いまださしたる事も仕出さず口おしき事なりと云藤堂脇坂等い奉行にむかひ此度の評議におゐて安大事といふものか若仕損ずること有ば陸の戰ひのおくれともなるべしなどゝ云ども左馬助一人い是非は戰いんと云つるのが故をもつて諸將の意一決せずされども加藤が言のつよかりしまゝ大隅守を始めとしてさらば戰ふに定め申すべし先明朝はやく淡定めの通りの物見船諸手より二艘づゝ乘出させ敵のやうを窺わせてこそ戰ひをい初むべけれと其夜い釜山の旅館にゝり船去たくこそ去たりけれ六月廿四日の夜半ばかり諸手の物見い早船をとかせ敵の船とも凡そ三百餘艘に餘つて瀬戸口に漕つらね相見へしが其船を二手に分け一手い山の麓にさし添て備れば一手い沖なる島につい櫨楫をとゝめたりと報ず諸手の早船い如此告げ來るに脇坂が物見の船のみ心ありてや殘りけん敵船より二十餘町を隔てゝ沖の方に浮めたり左馬助が早船い此やうを見るよりあれい脇坂殿の母衣武者なりいざ我々もあの船と一所に漕よせよと櫨をおし切てもゝみゆく加藤が船に乘たる一艘い伴團右衛門歌與左衛門東勘右衛門一艘に宮河權七郎土方長兵衛尉等を乘たりける左馬助い諸手に先立て一艘を乘出す團右衛門三間ばかるなるらんとおもふときに左馬助自ら

采幣おつとりひたふりゑ振まいしかゝれ〳〵と下知をなす願右衛門等いこれを見て正ゑ大將の采を振たまふにかゝれと仰せあるかゑめ先その櫨を立ふゆし舟を進めとひしめいたり九鬼義隆をはじめとし先立船の卒爾よかゝるゐ誰舟ぞと勇みゑいさむ味方れ人數とむるとも止るまじ大勢ゑ取かこまれ味方討せて詮なし今ゐ總がゝりよかゝれとて艦先をそかへて進みけり

舜臣臣龜甲船を造る事

すでゑ左馬助ゐ手下の船ともを下知と加へて乗かゝるところゑ朝鮮の船とも兼てたくみし相圖なれば舜臣こゝぞ時分ゐよしと麾旗を取て揮たつるゑ朝鮮の船共一度ゑ楫を押かへし退ひて敵を引出す日本勢これを見るより朝鮮の弱兵共さてこそ逃るゐ追討せよとて左馬助眞先ゑ采幣とつて進めすゝめと罵りけりすでゑ隘口を出ると見るうちゑ朝鮮の大將李舜臣鼓を自ら鳴すこと一聲すると朝鮮三百艘の船の中より只一艘左馬助が乗たる船に潛向ひて戰ゐんとそる勢ひあるゐ元均が先度の恥とすゝがんとて馳たる船と見えけり是を見るより朝鮮船筭手なりゑ立並びくる〳〵と左馬助を中に取りこめさしつめ引つめ射たりしかゞ山風ゑ雲を捲く雨の脚より猶ゑげく透間のなき矢先よいかでか進まんやうもなき左馬助ゐ敵船ちかく漕よせさせ其間すでゑ五六間と見ゆる時鉄砲の前を揃へよあだ矢ゞし打すゑ心をゑづめ芝居をしき筒先を下してはなてと下知をなせば鉄砲の手の者共袖重りといふもれゑ筒先をならべつゝ一度ゑ火蓋を切て放てゞ何かいもつてたまるべき朝鮮船の水手共將棄仆しゑ打仆さるされとも李舜臣兼てこしらへおきたりし龜甲船といふもの有日本ゑてゐ此船を盲船とも名付るなり抑其船の仕立やうゐ板を厚くはがせ船の上の屋根ゑふく其形ち龜の甲れ如くよし戰士櫂夫ゑな其内ゑかくれしむ扨また前後左右ゑゐ多く火炮を備へなちべ縱横出入心ゑまかせ多くの敵船れ其中をおしわけて乗めぐらそゐさながら織綿の機止ゑ梭をなくるが如くなり

左馬助船中働きの事

左馬助が乗たる船すでゑ危しと見るより脇坂が物見の船と始として梶を早め押來る左馬助眼をくゐつて見開て味方の船をあと敵船ゑ乗付ざるとゑきりゑ下知をなしければ秋作右衛門といへる者うち釣をさしのべかけん〳〵とゑたりしを朝鮮の兵士とも切り拂ひ〳〵二三度四五度ゑおよんでもなか〳〵釣ゑかけられず左馬助ゑきりゑ敵船へかけ入ゑんとゑたれとも敵船より射出す矢の雨の如し二三ヶ所も手を負たれゞ心ゐ剛ゑ勇むとゐへともつゐゑ叶わずすでゑ海中へ落入らんとあしたりしを水主共ゐ大ゑおとろき急ぎ引上たり此時作右衛門といへる者今日の一番乗ゐ某ありと一般の船へ飛乗たり其かれとも敵一人もあらざれゞ不思議ゑ思ひとゐ心得ぬことかなと數中島東

戸田宮川河村篠田園土方の族何れも是等の加藤の家よて剛の者とて其名をおしむ勇士共なれば我かとらじと先を爭ひ乘入ゆゑ手を負者も多かりける左馬助云やう此船の板子とはづしてさがし出得と云けるゆゑ互よ聲をかけ合一々よこじはなさんとなしけれとなか〳〵丈夫にこしらへたる龜甲船の事あれバあみ〳〵よてハかあれねとやう〳〵よしてはぬかへそよ内よハ弓よ矢を加へ敵の來るを待受たりし朝鮮人共餘り急よ飛かゝられ大よあわてゝ矢と放つべき間もあけれ共とな〳〵弓矢を捨海へ飛入者も多けれと或ハ切られ生捕られつゐよ此船一艘も加藤が手よて乘取けるとの脇坂が母衣の士も小船一艘乘取ける加藤ハこゝよ一面目ある心地して船を乘切り味方の船よ乘かへそ朝鮮れ者ともハ加藤が三艘の船ともおもひ切たりとや見たりけんまた和軍の後船すでよ其間近づけば待て戰ハんとや謀りけん船道一方ひらかせて左馬助が船をバとゝめもせずして通しけり此時加藤が手の者萩が乘たる船の内三十一人の兵士二十一人深手を負一人ハ討れけり

日本船引退く事

とゝよ朝鮮の兵軍ハ一やうよ前後の戰船をとゝのへ龜甲船を前鋒とし元均顧臣億祺が等其後よつゞねて待かけたり和軍の諸將の船ともよわおもひ〳〵の船をゝるし旌旗と風よひるがへし鎗長刀ハ日よかゞやき太刀先をひらめかして先を爭ひ來り擊朝鮮の船ともハ二時よ力を合せ連りよ火砲を打かけて和船をとゝよ焚きたつれバ烟焔天ゐ一翻りて忽ちよ四五艘の船ともを燒しづむ九鬼藤堂の人々ハ朝鮮より火砲をもづて焚たつるを其防ぎをあすべしと下知すれバ兼て仕度やをたりけん樓船のその高き凡數丈ばかりれ上よおぬて櫓を作り立たるよ毛氈をもつてその外をつゝませて眞先にこぎあらべ敵より來る火炮を防ぐ料となして敵船よ突かゝるされとも朝鮮舟より打出す火炮のためよこれもたまらず打やぶるこれよりて日本勢大よ亂れて水よ落て死する者幾百人といふよとをゝらず去れとも日本の後軍入かへ〳〵責戰ひば朝鮮の大將李順臣もつとめて力戰したりしが和船より打かくる鉄砲よて流丸のためよ左の肩を打たれける血流れて踵までと染ぬれとも手負たりとも云ず猶戰づて馳めぐり刀ともつて肉を割き身よ入たる丸を取穿たる穴二三寸よ及べとも順臣とれを事ともせず談笑つねの如くありかくて一日戰ひくらすよ日本の兵船つゐよ負軍をなり船どもを回らして釜山巨濟よかけ入て此後再び船鋒よハ出ざりけりこれより先小西行長が平壤よ至れる時朝鮮王へ投ずる書よ日本の舟師十餘萬また西海より押來るまさよ大王これよりして何國よか行んと欲するやと云送るハ和軍水陸の兵と合せ西よ下らん事を約せしよこの度の合戰ゐ水軍の負と引出せバ行長も一臂を失ふことくまて平壤の府城と得るといへども其勢を奪ハれて敢てすゝんで責討べきの氣勢もなくやう〳〵よ平壤と保ちかためて居たりける

大廳薨去の事

今歳七月秀吉公の御母堂大廳と号しけるが秀吉公の朝鮮征伐のため肥前の名護屋に陣在陣の間留守惟り京都にとゞまり給ふ大廳の心意まゝ大閤すでに自ら朝鮮國に向いせ給ふがたゞに千里の道を隔て給ふたに朝夕に意もとなき事なるべきをましてや異國退治の心事たれば其かへり給ふべき時も去られずされば再び母子の對面い何を期すべき事あるまじと明ても暮ても常にこれを憂ひとのゝし給ふを附々の女房たちさま〳〵にこれを慰め參らせていやとよ太閤い朝鮮へい渡ゞせ給いず肥前の名護屋といへる所にわたらせ給ひ諸國の大名小名ばかり朝鮮へいさしつかいさるとゆせとも大廳いさゝかこれを承引去たまいずふもひにのみ去つみ給べしが遂に疾病となり醫療是より忌をつくし關白秀次公も日々に看病をなし給へどもいさゝかの印もなく次第に重くなり給ひ日をおつて大切に見えける故早乘をもつて此ふもむきをば太閤の方につけまゐらすれば秀吉公大に驚き彼留主の事德川公幷に前田利家等の大老に仰せ置れ諸將郡臣の下知をなさしむ自らい取もの取あへず早速に上洛ある途中にて早く大廳の薨去の事と聞給ふより秀吉公い餘りにつよく歎き給ふとて彼息も忽ちに絶ゆるばかりれ有さまなりやう〳〵に侍醫の輩彼藥なんどをまゐらせて也入心地いつき給ふ悲歎の心思ひ淺からずといゆせとも斯ても叶わぬ彼事なれば德善院玄以と彼使として大德寺の玉仲和尚と請じ彼葬りの事あんどの意をつくさせ給ふて心體をば乃ち大德寺に是を藏め玉ひける其時の御佛事かたるに言葉もつきざるべし月日に關守なく同九月まいに忌も明れば秀吉公い再び名護屋におもむかんと仕給ふを內裏より此事をとゞめさせ玉いんとて勅使い大閤の亭に來り強て渡海のことを仰せくだされたりけれども一度朝鮮國に軍兵とすゝめ我朝の兵威を示さん爲の願望たりかつて綸言を逆背するにあらざるなりと勅答させ給ひて押付御旅行の用意あり順風に帆を馳たりすでに赤間が關の沖にして秀吉公の召れたる座船灘なる石に乘上げすでに覆り忽ち水波に溺れんとせ給ふを毛利秀元急に早船を馳來り是を援ひたりげるゆえ太閤い危きところを遁れ給ひたり太閤い大に怒り其時の船頭を五人まで斬てそてさせ給ひける

沈惟敬遇石星事

祖承訓遊東軍れ大將として朝鮮國の援兵たれとも日本れ兵將に戰ひ負て史儒遊擊い討死し遊東へ引かへすのより大明の朝廷へ早飛脚をもつて告け訟ければ大明の天子大に逆鱗あつてその軍れ法律を失し大國の恥と殘したる輩とばこと〳〵く是を罪し玉ふべき旨を下しさてまた諸の大臣と朝廷に召集めて朝鮮の亂をすくひ倭兵を退くべきの評議區々に起り宜しき謀あらばすゝめやそべきの勅あればこゝに總兵官李如松と云るもの北の方寧夏といへるところの狄廣を伐て其功大なるの

手柄あり此頃都よりかへり至ると今度朝鮮の寇を退くべきの其吉例よ準じて最も此者宜しかるべし諸臣一同よすゝめアよりより乃ち朝鮮國の援兵の大將軍と此人よ仰付られたりけるありこゝよおゐて李如松をもつて提督大將軍の號を賜り南北諸道の衆軍を催促しこれが下幕よ付屬したまへ兵部侍郎官朱應昌と言る者よく日本の事と云れるをもつて是を經畧使の官となし李如松よ相添らる今度朝鮮國援兵の一議を承り掌るの役人どば尚書司馬石星といふ者なりすでよ兵事を打立んとそる所とゝよまた沈惟敬といふ者あり元より無賴の惡少年その身を立る產業なく酒徒よ伴ひ淫房よ日を暮して京師あたりをさまよひける呉妓陳澹如といふ者と情を通ひじ睦ましき中となり常よ朝暮よ出入そまた其家の召つかひよ鄭皿といふ者有此者一とせ海賊のためよ擒となり日本よ住と多年なりし此ゆゑよ日本の事を能云りて折〻ことの愚よもと惟敬よ對してつぶさよかたるを聞おきしよ惟敬もとより大膽者なりしかバひろかよ意よ思案そるやう今度大明より朝鮮の加勢をして大軍を出せる砌りなれバ我日本の事實とつぶさよ知りたりと唱へて功名をもおさバやとおもひける故日本の國境人事よ至るまで鍛練せりと觸まわる此時司馬石星の妾の父袁茂といへる明人澹如が方よ到り惟敬と參會ありけり惟敬が意氣の慷慨ある者そと見て石司馬よ告ゑらせける右司馬ハ朝鮮の難を拂ひて如何にもして功を立人とおもふ心のそある折ゐれば此ものがたりと聞よ

り大よ悦び速よ惟敬をむかへて是よ對面し彼が物がたりを聞よりもまとよ其人を得たるかなと
獨りうなづきおもふやう祖承訓が敗軍れ後と承繼ふよ大軍をもつて攻ずんば日本と相戰ふとも勝
を得ることかたからんかと是よよつて先たつて惟敬とつかへし日本と和好の儀となし其あとより
大兵とをづかよ集めて追討せんと謀りければ惟敬は令して遣ぶべきよ定りける惟敬へどきよ石星
よもとめて金銀錢貨の品〻を給ふゝし是をもつて日本の諸將よ賄いをして和親の議を結ばんと云
けるを石星これを許諾してければ惟敬へ一朝に青雲の上よ乘じたる意とあり即ち滿如ともつて已
が妻となしこれを石司馬よ預け置數千の金銀を石星が方より受け莽衣玉帶花幣の類と買調へて朝
鮮國に入たりける

小西が兵李元翼と戰ふ事

祖承訓が軍敗れて後へ日本勢の兵威ますゝ盛んなして行長へ平壤を堅く守つて近邊と割畧せん
とせし折から八月二日の曙よ朝鮮の兵將巡察使李元翼巡邊使李寶が兩手れ兵士を備へて平壤の
府城よ押寄せて攻戰ふといへども小西が守り堅固なれば其戰ひ遂よ利あらずして引退く元翼と李
寶とへ數千人を持て順安よ軍をとゝむれへ別將金應瑞等へ龍岡三和甑山江西四邑の軍兵とひい
て廿餘所の屯所を作つて平壤の西よ在て平壤の兵將を押へ〻だりよ是をはびこらせじと防ぎける

また金億秋ハ水軍と引て數百艘の戰舡と大同江の下流ヨ浮め陸の味方を相助け椅角の勢をなさんとす同月十日はかり李元翼等平壤城の北より兵を進めて小西か陣を攻めんとす小西か先手木戸籌か軍ヨ出合たり元翼はやく射手ヨ下知して矢と發すればたちまち小西か兵士ともを二十餘人まで やヨハハヨ馬より射落しけり程なく小西が後軍後より大ヨ至りけるゆゑ元翼軍兵大ヨおぢろき潰へて亂れ立と行長が軍兵ども得たりやあふと云まゝヨ太刀扳つれて馬と飛せて追かくれハ元翼か兵のうち江邊の勇力の者共かへし合せて日本の兵士とあるひハ引組あるひハ指ちがへて死傷するもの其數を去ふず李元翼ハ軍とやう〳〵ヨかへして順安ヨ屯をとゞめけりこゝヨふゐて小西が兵戚いよ〳〵さかんヨなりけれハ武備を敵軍よりゝやうして朝鮮の兵將等を鷲さんとやふもひけん朝鮮の軍中へ書を送り云けるハ明兵と我兵をくらふれハ郡羊の中ヨふゐて一虎を放つが如くなり朝夕まさヨ西に下り明兵を驅立くれんずあんぞゝ書去たゝめて遣しけるこれヨよつて李昭の行在義州の民人大ヨ恐懼し今もや日本の兵將の寄來りいりなる浮目ヨ逢やせんと男女老幼騷ぎ憂ひ只今敵のおそひ來るヨ遇るが如く行裝を荷擔し東の方を望んて踵を企てすハとも云ハン逃行べき支度の外ハなかりけり

小西行長沈惟敬と定約ハ事

維敬ハすでヨ遊擊將軍の號を受大明日本和議の事をつとめ朝鮮の境内ヨ入來る既ヨ順安の地ヨ至りければ先立て一封の書を馳て小西行長が其情と窺ひ見るヨ小西ハ元より和議をこのむの意あれハ僧の玄蘇をさしつかハして是が返報を去たりける八月廿九日ヨハ唯敬が方より先立て金幣等の贈物をもつて行長が方ヨつかハし其後和儀とあさんことと約しける曾より日本の兵卒人を殘ひ毒することと甚もつて忍かりける人〳〵恐れて其陣營をかりゝも窺ふ者なきと人〳〵あやぶを多くハ是をすゝめ止めんと去たりける唯敬笑つて彼焉ぞよく我を害せんやとてすでヨ其日ヨなりけれハ目ヨハ馬ヨ跨り家僕四五人召連て平壤の境ヨ打入て城北十里の外を隔て降福山下ヨ至つて行長等ヨ會しける行長義智ハ玄蘇等を伴ひ兵威をさかんヨつらね設けて維敬と上座ヨむかひける朝鮮の軍兵共ハ大興山の上ヨ登り倭軍の体を望ミ見れハ其兵士甚だ多く武威嚴重劍戟さながゝ雪の如ヨ見ゑたれば夥輔行列あり維敬ハ幕前ヨて馬より下つて倭の陣中ヨ入たりけり兵士四面にかゝみ繞らせハ若も維敬を抱え執ふることもやあらんと人〳〵かたつを呑居たるヨ維敬ハなんなく日暮ふ歸りける倭の兵士も衆軍としてこれを送らしむ其禮甚だ恭めり翌日ヨありければ行長ハ書をもつて維敬が方に贈りつかハしける其中ヨ大人白刃の中にあつて顏色し少も變ぜず日本人といへども以て是ヨ加ふるの事なしと維敬これヨ答へて曰く爾聞ずや唐朝ヨ郭令公といふ者あり單騎ヨして回乞

萬人の軍は入貢ていさいかかそれざりしといふことと今また我輩といへども何ぞ爾ぞかそれんやとこゝは於て日本と約をなして云我歸つて大明の天子はやまさは分ッとまろ有べしとて約し定むるは五十日の間ともつて期りとなし此間ハ倭人も平壤の西北十里の外はハ出べからず最も取掠むることなかるべしまた朝鮮人も十里の内ゐ入て日本人と戰ふことをなすべからずと云定めすなハち両地の界と立て木とゑるしてぞ去たりけるまた小西行長が方より七箇條を表し付てこれを遣し若この儀を可ありとせゞ吾と儞と和親の謀はゑたがハんといふは維敬すべて先みなこれを同じたるゆゑは行長ならびは外の諸將もみな〳〵唯敬が言を信じて其返報の至るを待て平壤ハ守りも徹てんとそるは增田長盛石田三成大谷吉隆もまたみな如此の議は同心してそれよりハ朝鮮處々の城とも攻撃ずたゞは黯然として空しく日をぞ送りける行長方より惟敬が方へ遣したりし書中の其おもむきハ日本の勘合船を絶こと既に久し是をもつて秀吉數年の間和親を朝鮮はもとむといへども朝鮮つゐは日本の望みは應ぜざるがゆゑ秀吉勃然として怒りを起し旗印を雜林は進むるところなり今足下平壤は來りて和合の議を結ばんと欲する是ぞ國家昇平の基たるか足下明帝は奏し官使を日本はつかハし交親のゑるしとなさゞ何の幸かとれゐ加えん官使若し來ゞ五十日をもつて期とせんと書し且又甲冑弓靫太刀長刀等を送りけるこれ壬辰歳九月初三日のことありける翌日は

た惟敬が方よりして日本の鉄砲をもとむるは此時再び書簡を行長方へつゐハして義州の地は朝鮮王おハしませばこれへ告げ知らせて逗留せずして大明へかへり和親を定むるの返報を五十日の中は報ずべしと慇懃は云送りけるかくて十月れ初めは維敬ハ和議をうけ合て大明へかへり報ずといへども大明の群臣共一同は云ける此議をば群臣れ奏議評定を經ずしてハ叶ふべからず提督李如松が大軍を盛んは相催ずのときあれば先一端軍を出して其後こそ評議をも定むべけれとて維敬をば石司馬が所はぞ留おきたりける

大明の大兵朝鮮國は到る事

同年十二月(或ハ十月ともいふ)大明大は兵と發して朝鮮を救ハんため兵部右侍郎宋應昌と經略使とし兵部員外郎劉黃裳主事袁黃を贊畫軍務の官となして遣ずところこれハ寮東は駐りさてまた提督李如松を大將となし三營將李如伯張世爵楊元ならびは漢南將洛尙志吳維忠王必適等の諸將と引卒して江を渡る其兵四万餘人を三手は分て押來ると聞へけり楊元李如伯張世爵左は有李如松ハ中軍をつかさどり吳維忠王必適ハ南兵三千を領して右列は附屬したりける是より先沉惟敬さすでは日本と約をなして去りける此故は日本の兵將共その約束を守り定むるこゝろとり兵をおためてこれを動ぜず油斷してかの一左右を相待ところに既ゐして五十日の期をもすぐれども惟敬

なと未だ至り來らず其日暇の甚だ延引ゑ及ぶがゆゑ平壤の日本勢これと疑ひてこの歳の中ゑ打立ち鴨綠江ゑ行のぞみ馬ゑ水かいんとぞ議したりけるまた朝鮮人の擒ゑゑたる者共をわざと四五人もこれと逃しかへしたるゑ彼者どもの物語りゑ倭の兵大を城せゑむるの具をふさめ押付打立べき体なりと告るを聞朝鮮方の者共い大ゑおそれをなしゑげるかゝる處へ同じく十二月の初めつかた惟敬い再び朝鮮に來りて平壤城ゑ打入り留ること數日ゑして更ゑ行長と相約し誓をなしてまた明朝ゑゝれども互ゑ何をか言つらん他人いこれを聞ことなければ何事の約速としれる者い更ゑなしすでゑ大明の大兵安州ゑ至り陣營を城の南ゑ下して旌旗器械と立つらねその兵威の整肅ることさながら神の如くなり時ゑ柳成龍い提督李如松ゑ相見と請ければ提督い東軒ゑ座をなしさて成龍と營中ゑ入ことを許したり李如松が人體それ大將の量あつて雄氣決然たる大膽の一丈夫とこそ見へゑけれ椅子を設けて相對し一禮も終りければ成龍い袖より平壤の土地の圖を取出ゑ其地の形勢兵の去たかつて入べき所の道すぢすで盡く是を演るゑ提督い耳を傾け聞居ながゝすないち其心ゑ量見あるの處々にい朱筆ともつてこれと點ず成龍重ねて倭軍ハ最もたれむところい殊ゑ鉄砲ゑあるのみ我大砲をもつてこれゑ當るほどあらば其間五六里ゑ過なんかと委曲ゑことと論じ畢て提督が方を辞して別れけり時ゑ提督い扇面ゑ詩を題し柳成龍ゑ寄たりけり

提レ兵星夜渡江干　爲説三韓國未安
明主日懸旌節報　微臣夜釋酒杯歡
春來殺氣心猶壯　此去妖氛骨已寒
談笑敢言非勝算　夢中常憶跨征鞍

かゝりけるほどゑ安州の城中ゑい大明の兵士滿々たり成龍い此時の馳走接待の役人たればこれも同ぢく城中の百祥樓ゑ居たりしが其夜ハ夜半計ゑ忽ち明人馳來りて軍の密約三ケ條書たると持來り示すゆゑ誰人の使者たるぞ姓名い何如んと問とも更ゑ答る言もあくてすみやかに立去りける

明將日本の兵を誘く事

提督李如松い副總兵査大受といへる者をして先たつて順安の地ゑ往ーめ倭の兵將をあざむきて大明の朝廷よりすでゑ和睦の事と許諾あるゑより沉遊擊がこゝもとに至ると云いしめたれば僧の玄蘇い喜んで詩を朝鮮軍中ゑ贈りていはく

扶桑息戦服二中華　四海九州同一家
喜氣忽消寒外雪　乾坤春早太平花

年とでゑ改まりて玆歳癸巳春正月初吉日の作とぞ聞へける小西攝津守行長い維敬が來り和睦れ

議と謂へけるといへども人心反覆の間敵情ればかりがたきをもつて慢りゑこれと信ずべきことゑもあらねばその虚實の間をはかり知らんがため其手の足輕大將邊見市左衛門といへる者ゑ足輕二十餘人相添維敬がむかひのためとして遣しける査總兵ハこれと順安の地ゑ待うけ誘てともゑ酒と呑しめ近々と油斷させ伏兵と起ゑてこれを討日本の兵卒すでゑ酒過ぎ醉みだれて戰ふべき術を失ひことゝく明兵のためゑ害せらる邊見もこゝハ遁れぬ場所とおもひ力の及ぶだけ血戰なし遂ゑこゝまて討れける其中より市左衛門が家僕ども二三人遁れかへりて此趣を告たるゑぞ行長等もはゑめて大明の大勢の到着せることをハ知りたりける行長これを聞くよし〳〵敵ハ大勢ならハ城ゑ引うけ待ハ戰ふところよかるべきぞみだりを腹を立かゝるべからず敵ハ我と誘人とそるありと云つて ゑゞまり返りてみな〳〵其用意をぞなしたりける此時ゑ明兵そでゑ瀋川ゑ到り着日ハまさゑ暮ければ營を下して飯をなして休息せんとするところへ査大受が小西が兵を討取たりと告たるわ提督やがて弓ひきを絃をならして手廻りの騎士七八騎を相ゑたがひ馳せて順安ゑおもむきける諸手の明兵このよしを聞傳へ明兵ハ大軍あれば總軍をハ西の門外ゑとゞめて陣取せ南兵三千ハかりゑして牡丹峰の下をば守らせたり城中より同七日の夜ゑ入て宗義智が手より夜討をひそかゑ仕かけたれども寄手も兼てその意得やゑたりけん陣中少しも騒がず火箭を射出し其日の光をよき炬火と照し見て敵の兵士に眼をつけさしつめ引つめ射たりけるゆゑ義智が兵どもさして仕出すことなく過半ハ手負て城中へさつと引入けり同八日の未明より三方の寄手三ヶ所ゑわかつて一度ゑ城ゑ乘とまんともみたてけり城中ハ鉄砲を揃へて打出すゑ寄手の兵どもすでゑ引色ゑなつて見えたれハ木戸を開て討て出て數刻ゑおよんで攻戰ふ明兵もこゝを破られでハ叶ふまゑと力をつくして防ぎ戰ふ中ゑも右ゑ備へし南兵万餘人力をあハせて一度ゑ乘とみときの聲をあげて方々ゑ馳散じて放火して火焔のまぎれに切て入ハ死傷するもの甚だ多くして此手ゑ有し日本勢今ハ防ぐゑ力つき少し引色ゑ見へたるを寄手の者どもこれゑ機と得て同時ゑ城の石壘ゑかけ登り屏柵と引やぶり衛ども射ども事ともせず我先ゑと攻ける故日本の兵士つゐゑ叶わずして外郭を攻やぶられ本城さしてつぼみける今朝の卯の上刻より午れ刻の下りまで日本勢の討るゝ者一千六百餘人とそれゑ るしけれ明兵そかさず内城まで攻入て即時ゑこれと乘破れと三手が一ッゑ團を合せて攻たるゑ小西が兵ハ兼てより敵來らば一防ぎ防がんと土壁を高し日本流の矢ざまを切峰れ窠の如くひつしと ならべ下ゑハ大筒と打出すべき料ゑ屏の下さゑ土壘の間ゑ砲の蠹までかまへ置ハ矢狹の内より打出すところの鉄砲弓矢ハさながら亂れて雨の如くなりける故明兵ハこゝまて多く討れたり城兵かくのごとく再び強く防ぎこれゆるを提督李如松見るよりも窮する寇ハみだりゑ攻べきゑとゑあらず

逃る鼠の極めて猫兒を懲す理りあり必ず强て戰ふべからずと早々より下知を加へて攻口と少しく退きわざと一方より敵の走らん路を開てまた明日こそ攻べけれとて陣營に入たりける

小西行長平壤を退く事

さても大明の軍兵ハ今日の戰ひより漢南の兵の力つよふしてさしもの鬼神のごとく朝鮮人のおそれをなして加藤小西と呼れたる古今無双の勇將のその一人の籠りたる堅城を攻破り兵士を多く討取れりもなし小西方れ者どもハ明兵の大勢より味方纔の小勢にて曾よりも對容すべきことにあらずと云殊ニハ敵ハ荒手味方ハ長陣のつかれ武者なればかくて明兵と討ち拂ふべき理にあらざるに兼てハまた諸將に約を示し合せだん〳〵つぎの城々より急あらば救ふべき其謀の有上ハと日々に飛脚を立て大明の兵士二十万すでに來て平壤府城へ攻かゝるの間早く來て後詰あれと大友義統が方へ使者を馳させ其段々のつぎの城へ告ぢらせ王城へも急ぎ通ぜしむ大友義統ハ元來性弱の男にして援兵ど出さんとハおもひもよらず明兵二十万の矢風と聞より大に慄れ身を振ハして小西ハもはや討れてゞあるらんと取ものもとりあへず鳳山の城を忽ちに退れて王城さして引かへすことそでに如此なりければ今日に至つて未だ援兵一手の將も見へ來らず小西一手の兵士ばかりで此大敵ゞ防べきことはあらずまたてや行長が城に籠るところの兵ども數日の戰ひに或ハ死傷しあるひハ逃げ去り殘兵漸く今ハ五千にだもたらざりける行長こゝにおゐて士卒と相謀て味方の援兵を待ちりにもとむといへども今すでに此如なれば我一人にて此城をたもつべき樣もなし早く此城を去りぞき後日の量見になるべきなりいかゞあらんと云けるを木戸作右衛門小西にむかひいそぎ立退あらんこそ良策なるべけれ殿りハ某到しハんと云ければ行長も此議に同じこと〳〵く要害を引拂ひ寒夜の氷はげしきハ江を渡るの助けとなつて日本の諏訪の江を渡るがごとく心やすく落たりける明れば九日卯の刻ばかり提督が人數に平壤れ本城に攻入て見てあれど敵一人もなかりけり李如松ハ小西が引取し後を去たふてこれを急に擊んともせずしてまばらく軍をとゝめけり

朝鮮將行長を追んと議する事

李如松が平壤をせむるの日柳成龍ハ安州の地に居たりしが明の大兵すでに軍を出すと聞よりひそかに黃海道防禦使李時元と金敬老の二人が方へ告やり小西行長が平壤の守り定めて事の急なるに至らば城を捨て王城に引退くべし去かれば汝が輩二人の將ハ行長が歸るべき道にむかひて伏兵を設けて待べし日本の諸勢困んで通れ去るに何の戰ひをかおもふべきせまりて討なば早速に敵の兵と渡さずして縛につくべしと云やれども敬老ハこれを辭そるに他のことをもつてしゆうんとて肯

ハず成龍かさねて軍官姜德寧をもつてこれを責糾せどもついに敬老ハ小西等と戰ハんことをおそるゝが故に軍をこゝに出さず李時言が一手のミ日本勢の跡をつけて追行といへども敢て敵兵に逼り近づき追打すると云ふもあらず但遠がけに後ゆ去たがひ日本の士卒は飢ゆのぞみ病ゆつかれて後ゆのこる強兵の首六十餘級を斬のミにして引ゐてす小西ハ此時大ゆ窮し路次ゆ數多の難儀を渡りて引なれば若朝鮮の諸軍の衆中ゆわすかも剛く志を立ぬる者あつて日本勢を討なゆば小西ハこゝゆて討るゝかりしを大明の兵を始めとしていかゆ意のかくれけん追かけて討んともせざりしとそ行長が今れ幸ひとハ成たりけれ其より行長は平壤の地を引拂ひ甲斐守が家の子小川傳右衛門が籠りたる龍泉の城ちかく成けるゆ傳右衛門ハ士卒を出し鉄砲百挺をもつて小西をむうひ後殿させて退く故小西ハこれより心やすくを引取ける義統が鳳山を明退くときゆ於て小川が方へ人を寄此城ハ猶もつて小勢なれハ早々ゆ引取べしと云やれども傳右衛門主の下知もこれなきゆ明退く事ハ叶ふべらず左やうのことハ存せずと挨拶をたゆはか〳〵しくもせざりけれハ義統ハ面目なくも逃げ行ける龍泉の南七里の地白川の城ゆ黑田長政の在城なり黑田長政久留米秀包の二將の方へ行長ハ人をよせ各〳〵も城を明けのき玉へと云やりけれハ長政秀包あへてこれよしたがハずいまだ敵の旗とも見ずして遁れたらんハ武士の瑕瑾と存ぜゆる小早川隆景の開城浦ゆ在城せらるゝの間これとゆ合せて一度明の兵と戰ふべし行長の粉骨ハゆゆ及ばず御手柄なりハやく都ゆかへられて士卒をも休息ゆさしめ玉ふべしとそ答へける

黑田久留米の両將ハ小早川隆景が籠りたる開城府の城ゆ引取事

黑田久留米の両將ハ開城府の城ゆ引取つて一所ゆ大明の兵士の寄來ると待受て是非一戰ハ心がけ有ところゆ小西が退兵すでゆ平壤と引拂ひて王城ゆ歸參せると聞より三奉行增田長盛石田三成大谷吉隆の輩大におそろきゆ日本勢の所々ゆ在城じたる人〳〵と一所ゆまとめ集めずんハ大軍の押來るをば如何してこれを防ぐべきさらば早〳〵まねげとて三將の方へ使者をつかハしゆ〳〵早ふ王城の方へつぼみ給ふべしと云やりけるゆ小早川三奉行の使者ゆむかひ我〳〵すでゆ日本の海岸と離れしより魂ハ朝鮮の地ゆとゞめ再ひ歸朝することハ有べからずとそ存じ極めしハ大明の人數と出合ひ打死致さんことハ老後の夕ぐれおじからぬ命あるべけれとて奉行の使者をハかへされけり三奉行ハ此返答を聞より開城川の大なるを打越味方をはなれ戰ハんとハ最も良策ゆあらず其上異國の人最も其意趣さつしがたき処なり何如ハせんと云ければ大谷刑部少輔云けるゆ我往てつれ來らんと刑部少輔ハそれよりも急ぎ開城府の城ゆ行き甚だ謀略のつたなき利害を說き聞すると隆景も默然としてこれと領げハ長政秀包二人も是ゆ應じてさらバ引取ハ

いんと吉隆と打つれミな〳〵王城よつぱむといへども未だ王城にかへり來らざるハ加藤清正鍋島直茂感鏡道の邊の軍のミなり

柳成龍獲二反間一を事

今度平壤兵ユれぬて小西行長が査大受がためユ誘れ大兵の寄來るとも知ゝざるハ軍中れ眼目たる間者を遠く出して斥候を用ゆるすゝをゑらざるユやと尊ぬれバ柳成龍か安州ユ在し時十二月上旬ユ日本の間者とある金順良といへる安州の軍人を出し拷問そるユ金順良其實を吐て云我等小人面目なくも日本人のためユ間をなして賞物を受たり此うへいかある罪科ユ逢とも少しも其恨なしと白狀す成龍ハこれを閑間をなす者獨り汝のみユあらじ更に幾人かあると問ふユ金順良答て曰く凡そ四十餘人ユ餘りて我輩の同類ありつねユ方々へ散りて外のことと探りそらしむ順安江西の諸陣ハ中ユおよばず肅州安州義州まで相互ユ行走り事を聞てハすなハちこれを報そらせずと云ことあしと語る柳成龍ハおどろき即ち狀啓とゑたゝめて早々ユ是と行在所ユ奏問しまた其名と按して急ユ諸方の陣所ユ通じてこれを捕しむ或ハこれを得るも有或ハ遁れて失ふもあれき諸陣中ことゝ〳〵く除き拂つて今ハ忍の入隱るゝきことの無らんやうユ其法ときびしく立たり偖順良をハ城外の地ユ出してこれを斬て捨ゆりけるこれユよれでほどなく大明の大兵到來することをも聞

者の告ぎらするものなぎともつて小西もつゐに敵の誘引とば請たりける

加藤鍋島働咸鏡江原事

爰に加藤清正鍋島直茂ハ咸鏡道に斬て入り朝鮮王両王子を清正が手に生捕すでに安邊に打出んとするに當り兀良哈の夷ども興り來るとも〻と〻く是を斬ぎたがひ直茂と一所にならんとして直茂が籠りたる咸興の城に來り直茂に會合あるすでに咸鏡道二十二郡の地をば清正直茂両手にしてこれを討平け其地を分けて領したりけるが彼方此方れ敵にあたりて幾許と云ことなき働きなり王子と生捕しハこれ辰の七月のことあり既に其年も十一月になりにけるこゝに咸興の城北八十里兀平山といふ山に咸鏡道巡撿使李希得兵曹佐郎金義元ハ數萬の兵士を驅促して陣を張る直茂ハわづかに三千餘騎の人數を卒し咸興を發し直に兀平山におしかゝつて相戰ふ矢石互に奔走し劍戟より火を迸せて爭ひば死傷忽ち廣野に滿々たり目もあてられぬ有さまなり朝鮮の兵卒ハ機に乘じて大勢なり味方もとより小勢にて對揚すべきことにあらず既に危く見えたりけり直茂自ら鎗をつとり從横無盡に突て廻る鍋島平五郎小川布左衛門直茂の後に相つゞいて大將を討せてハ叫わじと左右に承けて助け擊其外の侍にハ水町大木千手藤井南星此者どもを先として萬死をおもつて一生と不顧突戰すれバさしも朝鮮の大兵といへども一時に揉破ぶんと千餘人の首を授けて忽ちに退

散せり直茂いよ〳〵機に乘じてその道を燒討し咸興に引かへそ此時咸鏡洪原の間におゐて直茂の持分の所々に德原分水高原永興定平洪原咸興なりさてまた加藤清正に城を金山に築て加藤興左衛門尉を大將として興力の士を多くこめ置橋州(揚州なり)九鬼四郎兵衛天野山内あんどいへる七人に侍大將に興力の人數三千ばかり籠おきたり清正すでに咸鏡道に入しより村里の男女を悅しむれば是によつて人みな多くなつきけり

朝鮮人處々に義兵を起す事

朝鮮王城に集り會するところに諸將の中浮田秀家奉行の相談として清正直茂を王城へ呼かへすべき由相極れば乃ち秀家の家の子三人と使者として郡盜蜂の如くに起つて釜山浦にかへるべきの後路をさゝへ王城の往還自由ならざるの間はやく此方へ引取給ふべしと告やりけるに清正これに答て曰く我もまた此趣きを相心得い得共然りといへども金山樹中の兩城に家來の者ども多く籠置いて彼等を打捨引んこと本意おきことにいとも引取てまゐるべきと返事をなし清正にそれより得て齊藤立本庄林隼人龍造寺又八郎其兵五千をつゐし先立て興左衛門をむかひさせ我もまた金山さして進發と此時朝鮮の官人の方々に亂を避たる輩にいふにおよばず民百姓まで國家の衰亂を憤り諸道に義士を語ひて兵を起せるに訓鍊副奉事の官權應珠鄭大任故豈多く鄉民共を催して永川を討て是を破り遂に永川の地をとりかへす左兵使朴晉といふ者に初め密陽にて日本の兵と戰ひしが其軍利をふして山中に走り入たるに前の兵使李玗がすでに慶川の城を棄て逃れ走るをろの有所を尋ね出して是を誅し朴晉をもつてかゐらしめ兵使の官とおしたり時に此邊に日本勢の充滿なすところ成ーかば道南方と隔り通ぜず人心搖動とる砌りに當り朴晉が此所に兵使の官となると聞方々に離散したりし民どもやうやく集り守令官の輩までところ〳〵に山谷より蹄りしたがひけるをもまた〳〵朴晉が勢ひ盛になり始て百姓以下に至るまで朝鮮の朝廷あることをば知たるなり爰に權應詩が永川を取還したることを聞よりも朴晉が左道兵萬余の兵士を起し進んで慶州の城下に迫りたりこゝに加藤が番手に侍坂川大木戸なん云へる者を込置たるが謀をまうけ潛に北門より朴晉が後に人數を廻しこれを生捕らんとしたれども朴晉が大勇猛の者ある故こゝを安く通れ走りて安康といへる所にかへりかくれぬ其後服心の別將李長孫といふ者の震天雷といへる火砲と巧み出したるが術を用ひて潛に城下に遣し其法を行ひ城中に打入れば庭中におちたりける日本勢いまだそのこしらへをしらざる故敵方よりあやしきものを投うちたり是と見よとて爭ひ集りて諸にこれを見るに俄に火砲藥毒内より發しその音天地を動し鐵片星の如くに碎けて人に當れば即時に仆る是に打れて死する者三十余人に及びしより全くあたらざる者どもといへ共仆臥せこれに

よつて城中大に騒動するを朴晋が人數一聲に攻討てしきりに震天雷を打かくれば城中の者ども城をすてゝ西生浦に立退けるこれおよつて朴晋つゐに慶州に入りかゝり日本人の餘類万餘石を得たりける其外金羅道にある者前の判決事金千謐僉知高敬命前寧海府使崔慶曾等慶尙道にゝ玄風の人郭再佑高靈の人前の佐郎金潛陜川人前の掌令鄭仁弘前の翰林柳宗介草溪人李大期を始として凡數百人の兵或ゝ數十人の人數をあつむる者そでに數十ケ所におよんで義旗をさしあげ鼎津を守りて日本人の通路を守りてこれを障へとゞめ或ゝ居昌牛脊峴を遮ぎりて倭兵の軍を禦ぎたり忠淸京斤黃海洪原の八道にてこらず蜂起して僧徒百姓に族まで所々に滿々たり

加藤橘中城後詰の事

かくて淸正ゝ金山橘中の兩城を援ゝんとて先立て齊藤立本庄林隼人らを指遣したれど猶もつて心もとなしとて自らもまたつゞひて馬を進めらる龍造寺齊藤立本か手の者共すでに金山に到るとき朝鮮の一族權應珠鄭大任等と江原道助防將元豪か多勢にして相攻擊こと甚もつて急なりけり應珠自ら馬を馳せ城兵と戰ふことすでにきびしく日本の兵士數人まで斬て馬よりおとしたり加藤與左衛門もつとめてつよく攻戰ふといへども其勢ひの叶わずとやおもひけん敵れ中に驅入ておもふさまに戰の其後人手にかゝるまじとやおもひけん倉中にかけ入て鎧をぬぎすて腹かき切て臥たりける其外れ者共あるひゝ打死し或ゝ手負てすでに危く見えたりけるかゝるところへ庄林隼人らが後詰の兵大勢來ると見るより應珠が兵士等やがて城に火をかけ其まぎれに軍をひきあげたりこれによつて討死の尸の燒れてその臭きこと何にたとへんことぞあさろの後元豪ゝ淸正らが來るを待て柳永吉ともろともに春川に相戰ひ相長鍋島らが伏兵に誘れ元豪ゝ討死し應誅ゝ獲とありたれども遂にのがれて走りける

李如松尤李鎰を事

先日平壤れ合戰に大明の諸軍勢ゝ普通門より攻入ば朝鮮の兵將李鎰ならびに金應瑞等が兵卒ゝ含毬門より入たりけるかくて一日戰ひくらしすでに兵卒を收めてみな退き城外に屯するに當つて其夜小西が兵共夜の間に城を拂つて軍を退けたると其夜ゝ當て知る者なく明朝に至つて始て是を覺りけるこゝにおゐて李提督ゝ朝鮮の軍將をとがめて曰く儞が軍におゐて警め守らず倭兵將を遁れしむるゝ汝が將の怠るところなりといふ且また明將の順安に往來して李濱と其交の相親きゝ李鎰もとより大將の才にあらずと云つて獨り李濱が其器におたれりと褒るがゆゑ李提督ゝ朝鮮王へ書を進めて是を申により李鎰が人數と李濱に授け朝鮮の精兵三千騎ともつて提督が軍に加たがつて南方にこそ向られけれ

日本の諸將王城の地と燒拂ふ事

李如松ハすでよ平壤の日本勢を追ひ退けたる勢ひによつて大同より南江よ玄たがつて處々よ屯となしたる日本勢もみな〳〵軍をまとめて遁れ去るよし聞えける後より是を追ハんとし柳成龍よ告て曰く我大軍ままよ進んと欲そるなり其よつぬてハ前途糧草のあさと聞く政を議するれ大臣となつてハ國のことをおもふべしそれ身心と苦勞するふ憚りてこと遲滯よおよぶべからずはやく軍糧を備へよ疎畧の意をおもつてかまへて事を誤つべからずといふ柳成龍ハおそれて退き出づ斯て李如松が先鋒の兵ハすでに大同江を過て南方よ馳向ふ柳成龍ハ此軍勢よ先だつて夜を日よつぬで黃州の地よ入時ハそでよ其夜も三鼓よして倭の兵新よ退き騷動したるあとゝなりけれバ一道の民屋荒れ人民もまだ歸り集らざることなるゆゑ粮米を辨ふべきやうもなかりしかバ急よ黃海監司柳永慶平安の監司李元翼が方へ移文を送り金應瑞等が率ゆるところれ軍兵れ內戰陣よ堪ざる者の弱兵なるを平壤の地よつかハし米穀を負載しはこんで軍兵の後より追したひ大軍れ粮米の乏さと無らんやうよこそ心と勞しける既よ大軍開城府よ至ることハ正月十六日の日なりけり同廿四日よ日本の諸大將加藤鍋島早良の人々も咸鏡洪原所々の一族共を打破つて皆々王城よつぱゝけれバ浮田秀家三奉行とはじめ其外の諸大將と軍評定とり〳〵なり中よも石田治部少輔云けるハ大明の大兵と此王城よ引うけてまた全羅慶尙諸道の一族ども後を絕て往來の道ととゞめられなば前後よ敵を引受てハ事の難議よおよぶのみならず粮また盡て困窮よ至らんひとへよ籠中の飼鳥のごとくよして敵の手中よ落入といふものか諸軍の安危此一事よあり諸將能々思惟して早く釜山浦よ引取獲よせる王子達とも彼よこめ置がよろしからんかといへども加藤小早川の諸將を始としいまだ大明兵の來れる旗のかげを見ずして敵大軍ありと聞おゞしてさしも諸將の粉骨ゑたる戰功一時よ空せんこと先もつて意得がたしと云つのれバ石田三成加藤清正すでよ口論よおよバんとなしたるを增田大谷の人々中よ入りて和談となさしめすでよ大明の諸軍と合戰すべきの手分をなす然るよつぬてハ京城の中よあるところの朝鮮の商賈農民流涙の民よ至るまでとても味方の餘力とハなるべからず先だつて京畿監司沉壈が京城を窺ひ襲ハんとせしとき城中の民ども內應をあさんとしてすでよ城中の難をはかれる時味方の玄のび此事と聞出すよ敵ハはや朔寧郡よ至りしを加藤相良が手よりして襲ふて是を討ける故つぬよ事をバなさゞりし重ねてまたいかある禍とか工むらん兎よ角ゐ擊死して後の害をのこすべからずとて京洛中ことゝ〳〵く燒たて公門所の諸臣の亭宅よりして坊店村里の處々まで自燒して民人を驅出しこと〳〵く殺戮したりけれバ王城の民人殘れるもれハ無りけり偶々遁れて助る者ハみな山林に逃入て今ハ京洛の其內よ朝鮮人といふ者ハ稀々

に殘りたり是等いみな日本人の諸用を達すべき其ためにその筋たゞせる安堵の者と聞えけり

開城府合戰の事

李如松いすでに開城府に至るといへども行と進むることおろきによつて柳成龍いこれを憂ひて其速に進んことを願ひけるところ漸く李如提督い日を重ねて坡州まで至りける明れば廿五日の朝且大明の副總兵香大受と朝鮮の大將高彦伯い兵士六七百れ人數をもつて先陣をつとめ日本の兵勢伺ひ探らんとぞ仕たりけるまた日本の大將よい小早川隆景開城府を引取けるとき後殿して引取ゆゑ回り戰ふの場に至つて い第一陣の次第となる此手に屬する相備に立花左近將監宗茂久留米秀包築紫待從等與力したりけるまゝにあれて衆議一同に謀りけるやう敵いすでに開城の近きにあれば味方の隙を窺ひ襲ひ擊んもしるべからず油斷い是その謀計れつたなきに似る物かと築紫勢の中より番手を定め大斥候(兵士數百と出して物見するを大もの見といふ)を出して一夜がいりに用心し敵の夜討に備ひとなすべしと約束を定む今夜い柳川待從の當番にして夜廻りをなす處に查大受高彦伯等と碧帝驛の南礪石嶺の下にして両軍いたと出合たり曉方の暗き夜に敵味方のさかいもなく日本勢大に亂れて打合ゑが遂に數百人の手負死人を打出し相引にさつと引く提督が先手より急に此事報たりけれは李如松い聞よりも大軍をば留おき家の子れ騎馬わづかに千ばかりの人數にて退りけ馳せてすでに惠陰嶺を過るとて餘りにつよく馳せければ李如松が乘たる馬躓てあやうく溪に落んとせるを其左右の步武者共やう〳〵に引上たりけるにそあやまちいなかりける日本の諸將どもすでに其夜の明るころとひゑのゝめのたなびく雲のしらむほしたがひ遙かに敵の方を見やれば李如松が大兵とゝを去ること一里ばかりにして勢の多少いしらねども異黑になつて寄來る日本若手の大將共此由を見るよりも我先陣を相勤め大明人とはなく〳〵しき軍を始めんと相競ひ隆景これをとゞめ吾今日の戰ひにおもふ仔細のい得ば曲て先陣を承らんといへども若き諸將い猶爭ふと隆景重て大明と日本と今日の合戰の大事なることは一度にかぎるの軍れば此老人が申旨に是非任せ玉ひと再三に相爭ふを石田增田大谷まで兎角隆景の申さるゝ旨とこそよろしからんぞと同心すれば此上いと外に爭そふ者もなし隆景いかくて幕下の兵士を分ちて備を立て手分とこそあしたりける先づ一列にい栗屋四郎兵衛其兵三千二番にい井上五郎兵衛其兵三千三番にい隆景その兵一萬立花宗茂その兵二千五百人久留米秀包毛利大藏大輔元康それ兵六千たり大藏少輔が大千をば長蛇の陣と定めて螭石山の後に廻して奇兵の儲けとあしらひける李提督い嶺上の敵を見あぐるに纔に五六百にい過ざりけり則ち千騎の騎馬を分て両翼の備を張兵士をすゝめて掛りければ山に備へし小早川が一番栗屋四郎兵衛が備ひにかゝつて劔戟を相接るに栗屋が勢過半手負て引退け

ば二手よかゝる井上これよ相代りて戰ひを合せたり井上士卒よ下知を加へ聲を上て罵るやう士たる者戰場よのぞんでハ進んでハ死するが本望ぞや退て生るが辱を殘すなとはげまして相戰ふといへども北兵の强なるよ射立られ是もなかゞよ引退くかゝるところへ思ひもよらず山後より毛利の長蛇の六千人ひた〳〵と山上よ取登るを見るよりして李如松が兵士共少し心よおそれを生じ戰ひあぐんで見ゆれども互よ戰ひと変ゆる時なれば急よ戰ひをおすべきやうもなくこゝをせんどと爭ひける時よ李如松が領するところの兵はみな北方の騎馬よして火器を取の者なく短劍の鉈劣兵器をとり日本の軍兵ハみな〳〵歩士なるが三四尺はかりある太刀をさしかざを拔ば玉ちる氷の利刀烏雲の如くこゝよ群り彼所よろくれ岩巖石のきらひなく飛こえはねこえ戰ひけるほどよ大明の軍勢一度よなびくを隆景の第三陣毛利が横と打と見るより攻鼓さびしく鳴し一度よゝるよ大明の人馬色めき立て引退かんとなしたりける李如松ハその勢ひの甚だ危しと見るより急よ後陣の兵と招けども未だ至り著ざるよ先軍すでよ破れ立死傷もつとも多かりけるよ日もまた暮にゝりけれゞ日本勢ハ隆景が本陣より引上の鐘をならすを聞諸手共よ兵を收めて走るを急よ追ざりけり

李提督日本勢をはばゝる事

李提督ハ危き所を逃れ出て殘兵と引まとめ今夜坡州よ軍とかへし其軍の戰ひ敗れし取沙汰とゞこれを隱し朝鮮よりの馳走人柳成龍が輩までよ語り出せることゞもなけれど傍より其容躰を窺ふよ李如松が神氣の滯ること甚しくその心たのしまず殊よ家の子の親信なる者共も戰死するのゆえをもつて夜ふけ人靜りて痛哭せしが明れは廿七日軍を東波よ退けんと云けるを柳成龍と右議政諭泓元師金命元等李濱とともよ李如松が帳下よ至りて案内を通じける提督ハ帳外よ立たるよ諸將左右よ立連り威儀を取つくろひて對面す時よ柳成龍が輩つとめて兵と退けんとをとることを諫めてそれ戰ひの勝負ハ兵家の常のことなれゞ一段の負ありとも重ねて勝ざるの理あかるべし其勢ひを考へて再び進み給ふべし奈何ぞ輕〳〵しく動くべきことよあらずといふ提督聞て吾軍昨日負るよあらず倭賊を殺せる事甚だ多し何ぞ利あらずといふべきや但し此地を去らんと欲する者ハ風士あしふして雨强けれゞ泥濘ふかしこれよよつて軍をとゞむるよ勝手よからずこれよより一先東坡よかへり兵士を休て進み とるの 勢ひを貯んとす是より天子へ奏聞せんと欲するの狀如此とて其草案を出を見するよ其中の辭を見れば日本の兵都城よあるもの二十餘萬よして衆寡敵しがたきの文言とまた臣病めることと甚し請らくゞ他の人ともつて代らしめ給ことの語ありけれゞ柳成龍ハ大よ驚き倭兵何ぞ二十萬あるよ至らんと尤むるを李如松聞て我何ぞこれを去るべき汝が國人の云ところ依てなりと答へしハこれぞ其辭を遁れんためと聞へけり明將の多き中よも張世爵と云へる

者提督よすゝめ異見じて兵を退くを相談となしたりける此ころ大雨日と連ねたりけるに倭人また道邊の諸山を燒やぶりけるよりみなはだか山とありたれば馬の餌となすべき草だにも無ところよりきりよ馬れ疫癘はやり數日の間よ殞るゝところ殆ど萬疋よおよびけり此日よ李如松等が三の陣營と引拂ひ臨津と打渡り東坡驛の前よ陣したりけるが明る廿九日に再び東坡驛より開城府よかへり入らんとす柳成龍にまた是をつとめ爭ふて大軍一度退くときよおもては倭軍の意愈驕り味方の國民に遠近となくおどろきおそるゝよ至りなば臨津より北の地面に全く保つことあきよ至らん願にくは將軍去ばらく駐り其間を見て動き玉へといふ提督これを伴りて許諾し柳成龍すでよ己の座を退さたるを見るより李如松に乃ち馬よ跨りて遂よ開城府中に還りける大將すでよ去る上に其手の諸將一度よ拂つて開城さして引退く其中よ副總兵査大受と遊擊毋承宣が手下の軍のみぞ纔よ數百の人數をもつて臨津を守り居たりける柳成龍等なほ東坡驛よとゞまりて使者を提督が方よ馳せ兵を更よそゝめんことを請けるよ李如松謾りよこれよ答て天晴路の乾よ至らば當よ兵士を進むべしとに云けれども實よ進むの意にさらよ無りける大軍すでよ開城府よ到り集りて日久しくなるよおよたがつて軍糧の盡ぬるとやう〳〵よ辨せんとするに其勞に獨り柳成龍等が難儀とそれたりよけれ

安南合戰の事

全羅道の巡察使樓慓といへる者はじめ李滉等よ代り兵を率て倭の軍兵を退けんことを謀りけるが李光等野戰となして日本の兵士れためよ破らるゝ事よ懲たる故水原といへる險嶮要害のよき所よ至り禿城山の城よ據すまひて敢て此方よりはかゝらず日本の兵將攻來るを待居たりおかる處よ大明の李如松等大軍よて押來り朝鮮の援兵たりと聞より錦江を打渡り幸州の山城よ陣をとる皂爽嶽をもつて外輪の柵をゆひ立石垣高く其中よ聳たり抑此安南の城地兩山の間よさしはさまり山間よ深き沼あつて人馬の足立ゐしうして要害よろしき所あり後はまた山聳え澗深し西の方よに山の尾つゝき開城府の道すぢありければ王城よりの通路を絶んの計畧と聞えけり日本の士卒ども薪こりの其ため近邊の山々を尋ぬるとて敵城あるを見出し急ぎ立かへりて已々が主人へかくと告おらすれば王城の諸大將此度李如松と砥石山の戰の手よ合ざるを口惜きことどもと憤りける折かゝなればいざ此砦と拔き取て一戰の功を勵ますべしと討出るの沙汰をきき石田增田大谷の三人もさらば我等も討立べしと即ち二萬餘人の士卒を合せて城より此方の峰よ登り城中をうかゞひ見れば炊煙の末もなく人音の聲も響かず惟よ人なき城の如くなり增田右衛門加藤遠江守長谷川藤五郎木村常陸介等一同よこれと疑ひ計り先物見を出して察し見るべしとありければ或に十五人あるひ

は十人總人數の多少よ考たがひ我も〳〵と母衣使番物頭等を指添てつかハしけるよ此者途中よて遲速を爭ひそでに口論よおよびけるゆゑ何の會釋もあらばこそ早きを勝と進ミ行ける城中の者共ハ山上ハ櫓より乱れおそれて逃れんと考たれとも江水後よあるゆゑよ退くべきやうの無をさとり士卒の意一よ定りとてもかなハぬところぞと再び城よかけ入て九死一生ハ戰ひをあし城上より矢を飛し石を下そこと雨のふるが如くありはじめよかゝる物見の兵こと〳〵く手負死人を引出して遂よ叶ハず退くを後よつゞく二万の兵退そがふて打てかゝる先一番よ増田が兵よ諸將の兵とまじへ加藤遠江守を先手として打てかゝり無二無三よ切り入りける此機よ乘じて外輪の柵を一重引破て入らんとすれど城中より投出す大木大石よ士卒大勢討れけれバ是もかなはで引退く二番よかゝる石田が兵よ木村常陸介が手の者共一手よなつてかゝりけれども是もかなハで引退く次よかゝれる大谷長谷川一手よなつて采幣をおつとり是しきの小城一ッをなど引破らでやあるべき勵めや人々かゝれや者共と射れども突ども厭ハず甲の考ころを傾け射向の袖と小楯よとつて眞黑よなつて斬入れども本城の山上よりかさよかゝつて突て出石をなげ木を仆すよ是よ中りて死する者その數を考らねバ大谷が手ハ兵ども少しく退窟よ見へたる處へ權標が別將ども一度よどつて衝て出れバ日本勢ハ遂よ外輪まで退出さる今一たび荒手をもつて攻め立る程ならば如何さまよも城兵共落あしよもなるべきところよ日ハはや未の下刻バかりよなり寄手の兵ハ勢力つきはてたりし頃なる故とても此城今日ハ乘取べきことかなふまじきぞさらば此陣引あげよと云ゝどこそあれ諸手の備一同よ貝鐘を鳴し王城さしてかへりける城中の者共これよ機を得て元より所の案内ハ知たり爰の尾さき彼の溪の切岸よあらハれ二十人三十人群り立て雲の如くわゝれ鳥の如くよ集り矢先をそろへて射立ればかへし合せて戰んとすれども山危ふして進まれず惟いたづらよ的よおつて射たてられひたすら退くほどよ爰よてもまた日本勢大よ討れて死たりける小早川隆景加藤清正小西行長の人々ハ今日ハ合戰こゝろもとあくおもひけるゆゑ山の邊までむかひ備の人數を出せば敵もこれを見るより長追ハよしなしとやおもひけんかへりて城よ入よける

朝鮮の諸軍各所よ遮る事

かくて日本の諸勢王城よかへると聞えしかば安南城の大將權標ハ軍中の士卒よ令じ日本人の屍を取り集め死体と林木よ散しかけて礫裂よこそなしたりける是ともつて日頃負たる其鬱憤をはらさんためと聞えけるかくて軍人どもの風說ハ日本の諸將も此由と聞しより大よ怒り更よ戰ひを起して前度の辱を報せんとすと聞より權標ハ大よおそれ其夜陣を破り柵を拔すて軍を率て臨津よ至り來つて都元帥金命元が守りの軍と一所よぞなりよける王城の諸將昨日の合戰思の外なる負軍と仕

出し殘る諸大將よ向て面目おきことよおもハれければ重て物見の武者を出して城のやうそを窺ハするゟ斥候の者かへり來て城と除つて立退き人一人もなしといふよぞ諸將みな〳〵齒をくい玄ばつて殘多きことゞもかぎ昨日れ軍よ今一度せめたらバ追おとしてくれんものを日暮よつて軍兵と引上たるを無念なりいかさまよも此意趣をバ散ぜんものをと憤る柳成龍が此事を聞よりも只一騎よて馬と乘出して坡州の山城よ登り地形を望み見るよ其城大路の平場よのぞみ東西南北の往來の眞中よあたり地形道絶て靑壁をけづり立たる如きの岩石そばだちたる天晴據りすべき地城ゟるを捨て守ゟざらんことと最も謀慮のつたなきよ似たりとて乃ちまた樞慄ゟ下知を傳へ巡邊使李濱が軍兵を合せ此處の要害と守らせ日本人の江よ下れる兵をおさへんと備へ此方の道をバとゞめたりまた防禦使高彦伯李時言助防將鄭希玄朴名賢等をもつて遊兵の備と定め壁蹊嶺を遮ぎりまた〳〵義兵の軍將朴惟仁尹光正李山輝等ハ右の方の道より敬昌陵の間よ伏してミゟ〳〵其主る處の兵師を率ひ或ハ出て敵を討て是をなやます或ハ山ゟゟくれ日本勢れ多き時よハ出合ず其兵の少おき時ハ處々より玄たがつてこれを討如此よ途中よおゐて遮り止むれバ日本の兵もこれよりハ城と出て樵薪馬草とば取ことをば止めよける此折ふし馬疫病のばやりけれバ日本の馬どもの死することまた數玄ゟず其外の諸將よハ昌義使金千登京畿水使李濱忠淸巡察水使丁傑等ハ舟に乘じて龍山の西の江より軍と向へて日本勢れ力を分ち弱まさんとぞ玄たりける

李如松平壤を退く事

提督李如松開城府に還るれ後誰云ともなけれども日本の大將清正が尙いまだ咸鏡道よありけるが正に咸興より陽德孟山を越え來つて平壤を襲ひ討んとすと云ふらす此時よ李如松ハ北へ軍をかへさんとする意のミ有といへども未だ其機を得ざりしところよ此言を聞より此よよりて言どころへ平壤ハ是根本の地たり若このところを守らずして敵のためよ奪ハれなバ我大軍の人數と歸すべきの道あらん是と救ハずんば有べからずとて即ち軍と平壤にかへしげる惟明將王心適を留をき開城を守らせたりけるよ王必適もまた北よかへゟんのゟもひあれども打とてゝ回るべきハ外國の聞見を恥かしくおもふがゆゑ朝鮮の接伴人李德馨よかたりて曰く朝鮮國の軍と見るよ其勢孤軍よして援おきハまとよ危きことなるへきかみな〳〵江北よかへりなんころ宜しかるべけれと云されども此時朝鮮の諸將の所々よ在者ハ全羅巡察使權慄ハ高陽よ陣を備ひ幸州れ巡邊使李濱ハ坡州にあり高彦伯李時言等蹊嶺嶺よ備へ元帥金命元ハ臨津の南岸よあるなれバ孤軍といひがたけれど大明の總提德李如松を始とーて先日の一戰ゟ日本の諸大將の其威風を憚るゆゑ如此に退ひて日本の鋒先を避んとすると見えける柳成龍ハ此時よ東坡の軍よありけるが提德すでよ日本の兵卒の襲ひ

討んことを恐るゝ故去きりよ陣を退ると聞より從事官辛慶晋を使とし馳せて提德よ見之しめ軍を退るの宜しからざる次第五ヶ條と書去たゝめて遣しける第一よ朝鮮國先王の墳墓幾内の地よあるなれバ王城を敵の集り所となして是を打すて不可のこと第二よハ幾内より南方よ在ところの民ども大明の師と待のぞむこと日々なるよ忽ちこれより退き去と聞ならバみな〳〵こゝよ力を落し固き志と失つて遂よハ賊の手よ歸しきたかハん第三よハ我國の境土の内尺寸の地たりとも容易く敵の手よ棄べからず況やまして王城よ至りてや第四よハ朝鮮の將士その武力微弱なりとハ雖も天子の兵威よりてともよ進み取の圖をなさんとて人々その志と勵ますところ一たび天兵の撤て退くと聞ならバかゝらずみな怨を懷き怒りをおもふてその志一たひくぢていみな〳〵離散せんこと第五よハ日本の兵天兵の退くの機に乘て後よきたがひ機乘せハ臨津より北れ地といふともまた保てることかなふべからずと去たゝめて遣しける提德ハこれを見て何とも其返答よもおよばずして默然たるバかりなるが遂よ平壤までハ引退きける

朝鮮國飢饉の事

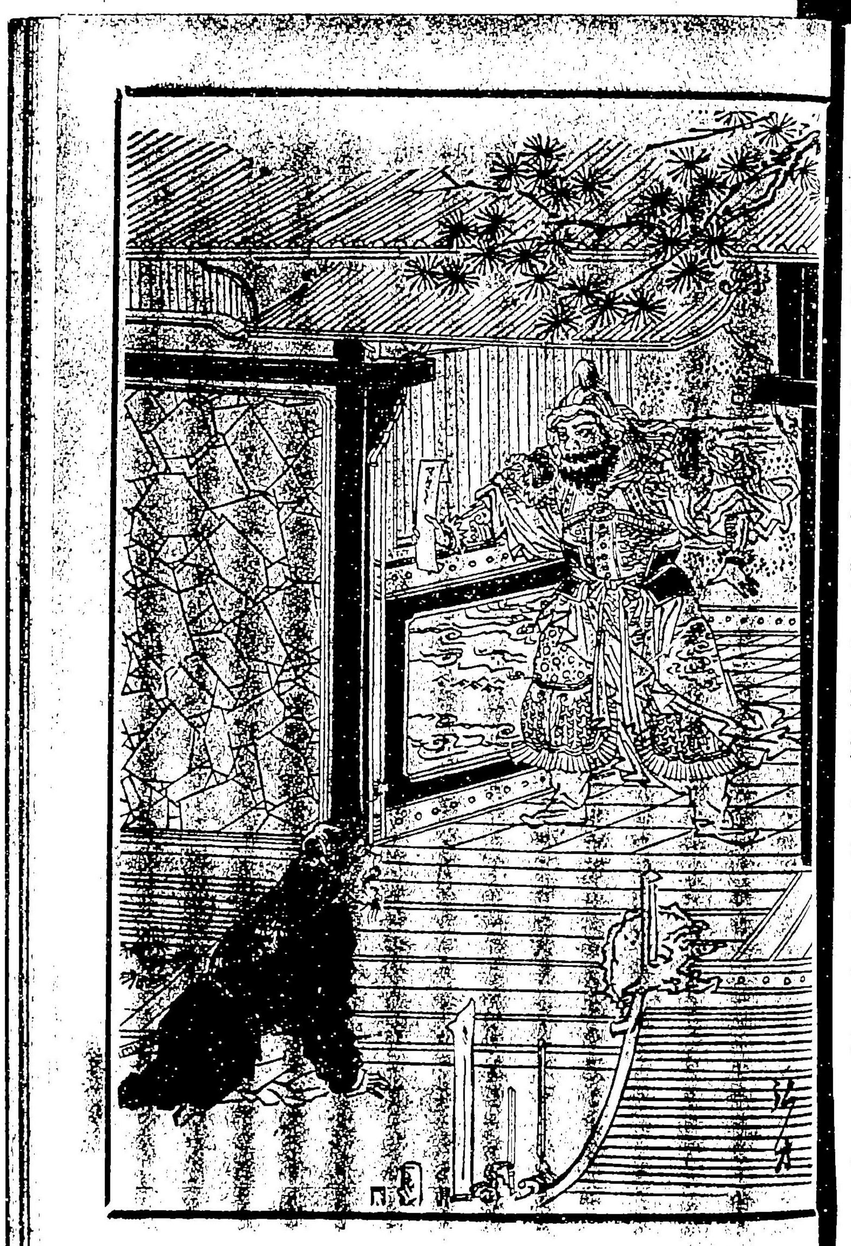
此時朝鮮の北道よハ大明の大軍いたづらよ日とかさね月を累ね粮米と費し日本の兵將は京城よ據ることすでよ二年までよおよびぬれバ防戰の至るところ放火の煩を被ること凡そ千里の間ハ民屋

蕭然とさびかへり田野荒はて耕種の農業をつとむる百姓ハみな〳〵山谷よ逃隱ても其食物の無まゝよこと〳〵く飢死して遺れる者のなきよふよありぬれば平壤開城の城中の遺民ども柳成龍が東坡にあるを聞嬰兒を抱き老母をたゞけ男ハ家器と擔ひて至り集り飢て死すべき今日の困みと救ひ玉ひと歎き喚ぶもの幾許と云數ともきらず明將査大受ハ馬山と云へる山中を通るとく二三歳の小兒の飼飼しながらゝ飢て死せし母の乳ぶさを飲を見るに餘りよきのびぬ哀れなれバとて軍人よ令じて此子をとり收め軍中よ連かへりて養育をなさしめたるハ情ある事とおもハれける査大受ハ柳成龍よ打むかひ朝鮮國の困窮かはどまでよ至り極つて猶倭軍ハ退かざるまさよ是を如何せんと云やんで二人ハともよ不覺ハ涙とながしける如此よ至つて民どもの飢よきのびぬ有さまと見るより諸道の將師ハ軍中の粮と分つて面のあたり死すべき民人の飢を救へる人も多かりける全羅道ハ安敏學と云る將ハ皮穀米千石ともとめ坡州の地よ運び來ると柳成龍大よ喜びて坡州の前の郡主南宮悌と云る者を奉行とし松葉をとりて細なる屑となし松粉屑十分よ米の粉一合と合してこれを水よかきまぜ人お與ふるよ飢人多して穀少けれバ活すところハ幾もなく哀吟叫呼のその聲聞くよ堪せねことどもなり此時大抵京都より南方の海邊よ至るまて日本の兵士横さまよ貫き渡りて城をかまへ陣を取こと既よ四月よ至りて人民みな山よ入谷よかくれて一處として麥を植たる田畠もあけれバ

日本勢をして今より數月も退かざらしめバ朝鮮國の生類い殆と盡るゑ至らんことを憂けれ

小西行長和をはかる事

こゝゑ金千鎰が陣中ゑ李薑忠ど云者あり千鎰ゑ請もとめて自ら京城ゑ至り日本の將の情を探り候つて二王子なゑびゑ長溪君黃廷或等ゑ見ゆることを得て歸ゑんを云たるを千鎰もその意ゑまかせて遣しけるが程なく千鎰が陣中ゑかへりて日本の諸將永陳ど張れるに各々退屈して媾和の意を懷かぬ者もなしと告ぐる折から程あく日本の諸將より龍山れ西江ゑ舟を留る忠清の水使丁傑京幾水使李濱等が方へ書を贈るを昌義使れ官金千鎰が方より柳成龍ゑ達しける即ち日李の將小西等が和睦をもとむるの書なりけり成龍これを見蒸々かもひ回らすゑ李如松提督更ゑ戰ひのこゝろなき上は兎ゑも角ゑも日本の兵軍を跡けしめ我國の安堵を得るゑゝ如べからず玄かるゑ此書を彼ゐ見せんゑ李如松も定めて開城府ゑ還り此議を取はかるゑ決定せりと思案すれバ則ち其書をもつて明の副總官査大受ゐ示しけり査大受即時ゑ軍官李慶と云る者を使とし馬を馳せて平壤ゑ報ぜしむこゝゑ於て李丁德も此議を欲しける故沈遊擊惟敬どして開城府ゑ來らしめて和睦の事ど取り行わしめんとしたりける金命元ハ沈惟敬ゑむがひ日本の諸將共汝がためゑ平壤ゑして欺むかれたるを以て必ず不善の意をさしはさみ汝ゑ恨を報ゆとせん實ゑ危き所を侵して更ゑ何ぞ入べきや思案ありて



善るべきやと異見せーを惟敬に聞て倭人もと速に退くべき約束なるに彼退かずして難に逢たり敗れたるに自らの敗れあるに我何ぞ預らんやと云つて遂に倭軍の中に入たりける

沈惟敬倭軍の陣に入て再び定約の事

沈惟敬それより小西が陣所に行て和睦の議定とかしたりける先立て相約するところの箇條七ッなり其一には兩國和議のこと二には日本すでに攻取るところの朝鮮國の道（全羅慶尙忠淸）と其まゝに日本へ領知とべきのこと第二には朝鮮よりの入貢前代の如く毎年これを日本におくるべきの事第四には明帝より秀吉を封じて日本國王に封ずべき等の事あり其外の三箇條は深く是を秘せしに依りその砌りこれとしるものおししかるに今度右の七箇條日本國より望む如くならば朝鮮の二王子ならびに臣とし從ふところの四まで〳〵歸國せしめそのうへ王城にある處の日本勢をゞみな先釜山浦に退けて歸朝せしむべししからば李如松もまたその兵を大明に提げんものなりと定めける增田石田大谷等三奉行まで朝鮮國の在陣辛勞の事なれば何やうとも和儀とゝのへて日本へ回らんとの意しきりなりけるゆゑ大閤と王に封とべしと云るの一箇條におゐて日本王に封ずといへるを大明の王に封ずべきと云るとわざとこれを聞あやまつて日本には大明王に封ずる筈なりと云やりけるが相違あれば大閤の意にかなはざるゆゑ再び戰ひは起りける行長もとより和議

とはかるの張本たりといへども先立て平壌の戰ひよゝ惟敬が李如松よ内通もなせりやと疑ふて大まこれを肯ず再三にして後行長もしからば約束をあさんと請よより李如松も又再び開城よ還り來るなり柳成龍等朝鮮の諸臣ゝ和好をなすの良計よあらざることと理をきゝめて論じたゞよ敵の意りよよつて擊よゝ不如といふを李如松ゝ是を承け我こゝろの欲するところも同じく討に有とゝ雖も內意遂よ聞もちゆるのよゝろなしまた重ねて遊擊將軍周弘謨と云ものを日本の陣營小西が方へ行しめ彌〻和好の堅からんことを西はかる沉惟敬ゝ小西等が疑心あると察すれば密よ石司馬が方へ議し謀り監生徐一貫生員謝用梓の二人を行長が所よ使とし多くの金帛を遣して和談のことなさしむるまた長盛三成吉隆がともがゝもみあ清正と其中不和なるよより清正が朝鮮の王子を生捕其功抜郡あるを弄させ手柄を空うせんとおもふがゆゑともよ其議を同心して議をなして云ける軍中の粮米漸くつき諸手の士卒は瘧疾よかゝり馬もまた疲をやんで斃るゝと最も多しかゝる時大明の大軍襲ひ來ゝばその禍ひ少おかゝじこれによりて一ト先釜山浦まで軍勢を退て和議の調を待んと云沈惟敬この沙汰を聞より彌もつて小西をそゝめて和せよといふ小西聞て王子を送りかへらしむることゝゝ大閤へゆさずしてゝ叶ふべかゝず兵を引て釜山浦よかへさんことゝゝ三奉行と相計りて其意よ叶ふべき者ならんかと領掌し此むねを諸將とともよ評するよ長々れ在陣なれば誰か一人嫌ふべきかの〳〵これよ同心せり李如松も元來この議を早く調ひ危き場所を立去らんとおもふよより遊擊成金錢同く世禎二人の者を使者として東坡驛よ至ゝしめ柳成龍金元師觀察使李廷馨を招てかの〳〵座を同ぢ日本の和談すでよ調ひ王子ならびよ從臣を此方へ返し軍兵と退け京城とかへし去らんといふよつき天朝よりも此議を許容あるべきの趣ありと聞えたり併ながら李提督ゝ此ことを全くゝ肯かゝす一旦倭兵とわざむいて城を出しその後討と定めて是と追討せんとのおもむきなり各々ゝ何とおもひ玉ふぞと相談がましく云出たるゝ是李如提督がこゝろとし朝鮮の者どもの意をはかり看んためなりされども朝鮮の諸臣共ゝもとより欲せぬことゆゑよかたく是と爭ひ唯よ日本勢の懈怠と幸ひよ押寄て是と討伐あらんこそ本望なれと一向和睦のことゝゝ肯かゝず世禎もとよりその性躁しく氣の短き男なれば忽ち怒りと發して大よ柳成龍等を罵りて去からば汝が國王何ゆゑよ城をすてゝ艱難するぞさゝどの强氣あるおらば能戰ふべきことなるよとせりかけて云ける時柳成龍少しも躁がず言と徐めて時を計り國を遷し而して存ぜんことを圖りゝもまた一れ道あり今天朝の力よよつて先度の耻辱と洗がんことなりと云成金錢ゝそこしく笑つて其座を立て回りしが同じく四月十九日よゝ李提提大軍を領して東坡驛よ陣營を遷し來り査總兵が幕中よその夜ゝ同宿ぢたりけり日本の將增田小西等の諸將當月廿日をもつて兵を退けんと約束を定むる故日

本の諸將王城とひらきなバ入替ゑんのためなりけりと聞へける

日本れ諸將王城を退く事

同四月二十日(或二十一日)ゑハ日本の諸大將王城を退くべきゑ決定せり始よりの約束ゑ日本勢王城とひらき立さる日ゑハ明の大將李如松も同く開城府を立退べきの定めゐるを還つて東坡驛まで大軍を引て來るといふゑもこゝろをつけず何の仔細を述るゑも及バずして一日なり共王城を引除ふべきゑ定りたり日本人去年より王城ゑ在陣すれば朝鮮の町人百姓も立かへつて何どゐく商買耕作をる者日本人より多かりけるこれゑより增田等此事を謀りて曰く彼等もし潛ゑ明兵と内通して我々の行べき道すぢを塞き障るものなゑバ釜山浦まで兵をかへすに難からんさりとて商賣農工の者までを盡く追拂つて軍を退んゑハたとへバ何如はどゑ追ひ除ふともまた群りかへりて障ん返てこれハ追討ざるゑハ劣るべし若また彼等と一所ゑまねき集めて悉く殺し盡して退けんとおもひハ彼等が輩また何の罪うゐるまとゑ是ハ去のびざるれ第一なりなんどゝ評議すでゑ區々ゑして諸將の量見更ゑ一決せざりしゑ小早川隆景一人ハ傍ゑ高枕して鼾なして打臥て一言をも出さゞれば石田三成高聲ゑ是を呼で諸將の評議かくのとくゑして何とも評議の定まらざるを足下ハ何ぞ去らざる体ゑ頭と低て眠らるゝや合点のゆかざることなりと一同ゑ云ければ隆景ハ此時やう〳〵ゑ眼をそつて起なとり諸將方のさきよりれ評議なし給ふを聞ゑみな〳〵非なることすこしもあらず某それゑ何ぞ益なき辞を出さんやゑかれ共おの〳〵の尋ね給ふ上ハ一量見申べし今諸將れ召遣るゝ下々の中を吟味なさバ朝鮮の者共その半にあるべし其上彼等ハ此方を見知れ共此方よりハ彼と見知ることなし町人百姓を氣遣ひて追拂ハんとおもひ給ハゞ先此者どもを去なんゑかーあから是もまた長途の人歩荷物を運ぶゑとと闕てハ叶ふまじ唯明日こそこの城と引とらば早天ゑ打立て面々の役所々々ゑ火をかけ其烟のまざれれ中よりさう〳〵と引取るべしたとへ明人あとを去たふて喰とゝめんと欲するとも跡を去たふことハ叶ふまじと云けると一座の諸將一同に是ゑすぎたる手段ハあらじと詮議ハこゝゑ終りける斯てそれ夜も曉方ゑなりしかハ諸大將達の役所々々ゑ取定めたる王城の宮室へそれ最寄〳〵ゑ去たがひ一度ゑ火を放ち烟のまざれより馬を乘出し備を繰出し引除ふハ古の漢楚兵を合して秦の都ゑ打入咸陽宮ゑ火をうけしその類ゑもありぬべし冷まじかりし事なりける

大明勢王城ゑ入かハる事

四月廿一日(或ハ二十日と云)朝鮮の王城ゑハ大兵と引て李提督入かハり小公主の宅(後南別宮といふゑ)旅館をかまふこれゑより一日先立て日本の軍兵すてゑ城を明のさけるこゝゑ柳成龍ハ李

如松が後に来たがひて王城に入りて見てあれば城内に殘り止る民共百に一として其一分とだに〻まらず偶存ずる者といへども飢につかれたる者どもの面色はひとへに鬼の如く疲黑ミて目もあてられぬ有さま也時すでにことのほか日干りして天氣燒が如くにして疫癘さかりにはやりければ人死し馬死したる其數あげて盡されず處々其まゝ在ければ臭穢の甚しきこと城中に滿々て行人鼻を掩はずといふものなし過るところの公所人家一字も殘らず燒盡さるわつかに崇禮門より東南山の下に至り帶の如くに處々の舍の殘るあり宗廟三の闕門ならびに鐘樓司院に學館の大街より北にあるものは唯に其餘盡を見るのミあり朝鮮の諸臣の提德に来たがつて玉城に入者ろれよりも意々に宗社を拜して涙をながさぬ者はなし柳成龍うは宗廟を拜し終りそれより李提德が旅館に至りその機嫌を窺ひ且また日本の兵軍纔に退き去たりと雖もいまだ遠かるべからず將軍願くは軍を發してすみやかに追討て後より追り玉へと云へば提督我おもふところもこゝに有なから急に追ざる所以のものは漢江に船なきともつてありと遁れことばを云たりける

大明の兵將小西行長を追事

扨柳成龍は李如松に向つて將軍賊を追んと思召ば某先達て江邊に出て舟艦を備へいべしと云ば李如松聞て大によろこびけるによりて成龍は急ぎ漢江の邊に出たりける是より先行文どもつて京幾右監司成泳水使李濱に令をなし日本勢の去れる後すみやかに江中大小の船どもを失ふこと無ふしてともに漢江に會せよと云これ時江船の到り集ること八十艘と聞えたり早く使を李提督が方につかはして江のほとりに出來れり軍士半も渡らんとおもふとき日は既に暮に向ふところ如伯は忽ち足の疾ありと稱し城中に歸りて療治せずんば叶ふべからずとて轎に乘じて回りければ漢南の兵もまた同じく軍をかへしけるみな〻王城に入るを見て柳成龍も今は如何ともせんかたなく獨りこれを憂とせしが成龍もまたそれよりは疾ふ臥て引込けり是ミに李如松が日本勢のかへるを追んとするに元より意はなけれども朝鮮人とあざむひて謾りに言に詫けたりとは見へにけりかくて日本の人々はじめ王城に入し時とはちがひ諸將の心におそれといだき若明人の後より喰とめ追討ることもやあらんかとかりにも民家に入て宿なんども取ことをおく野陣をとつて營陣を備ひ用心深く見へければ後をふむべきやうもなく朝鮮の諸將のその道すがらに當りて陣を取る輩も日本の大將の油斷せざるの勢に憚れば還て左右に退きかくれ敢て止んとする者もなし日本の軍勢これに依て思のほか途中の憂もあらずして東海までは意やすく引取けるかくて日本勢海邊に去りぞき所をわけて陣營を結びたるは蔚山西生浦をはじめ東萊金海熊川巨濟に至るまでろの首尾相連なつて凡そ十六營の屯

なり山より海よりよがひ城を築き塹を堀器械を修理し兵粮をとゝのひ久しく留る計をぞおした
りける兵部侍郎宋應昌ハ漸く五月の末よなつて李如松よ倭軍を追討べき牌文を出したり日本諸軍
勢王城を去事すでよ數十日過たるよ何ともつて如此の延引の擧動となすと尋ねければ宋侍郎ハ人
々已が日本の兵をゆるして追ざることを議せられんゝと其評判をはゝかるゆゑかりよ人數を出さ
しむといへどもろの實ハ日本の武備をおそるゝがゆゑよより遂よ兵を進ずして路よりぞかへりけ
る明の朝廷よてハ李如松より書翰を以て日本の軍勢二十萬諸將曉勇且戰利に馴て其勢あたるべか
らずと報あれバ重て四川總兵衛劉廷を大將とし福建西蜀南蠻等のところ〳〵の兵士を召集めその
勢五千をもつて繼て出て星州の八景といふところよ屯をおす南將吳維忠善山鳳山溪よ屯し李寧祖
承訓葛逢夏ハ居昌よ屯をなし洛尙志王必適等ハ慶州よ屯をとゞめて四面の方角を環らし營を備ひ
て互よ陣と相待して兵をバ更よ進めずなりぬ李如松ハまた沈維敬を使とし往向て日本の諸將よ諭
して海を渡らせまた徐一貫謝用梓をして名護屋よ遣し大閤へ參會せしめんとなしたりける

両使日本へ來る事

日本の諸將すでよ師を善山府よかへそも有またハ釜山浦の地よかへして大明國の使者と待ところ
よすでよして沉惟敬徐一貫謝用梓等ともよ名護屋よ打渡りて大閤へろれ品々の贈りものを奉りけ
ればよろこび給ひ乃ち羽柴下總守勝雅を德川公あらびよ利家の方よ遣し大明の両使と饗應し給ふ
べき旨を下さるこれよつて謝用梓(龍岩と號す)ハ德川公の陣へ入來りて徐一貫ハ(唯吾と號
す)利家の陣營に入來る日々の饗應美を盡して五月廿二日より七月のハじめまで諸大名に仰付ら
れ日をかへ月をあらためてさま〳〵のハ馳走たりその役付よ出たりし人〳〵ハ淺野彈正少弼太田和
泉守建部壽德小西如清近江の國觀音寺某等をして替り〳〵よ大明両使のもてなしを勤めさせられ
たりければ各時れもてなし他よ劣ら玄ところ意ど盡させぬ人もおし同廿三日秀吉公大明の両使
よハ對面ありてハ饗應のことあり獻酬のハ儀式もおりけれハ太刀一腰白銀千枚衣服二十襲夏衣
三十領を両使よ賜ひ白銀三千枚金作りの長刀一柄を沈惟敬よ賜ひ白銀五百枚裘衣百領羽織百枚を
その步從よ賜りける名護屋ハ元より其地形景氣よろしき所よして山聳へ巖石さかしく嵯曲たる海
水の入江あり其周りおよそ百町よあまりたる勝境なりければ両使ハ風興の常ならざると愛しお
の〳〵詩を作りて其こゝろを抒たりければ秀吉公も大ゐ悅び玉ひていでさらば我ハまた明人の興
を促ふして其詠吟を助けんとて數百艘の船どもと海上に漕つらねて諸家の船幕旗印を南風よ颯
せバ黃頭三老漁を動し欸乃をうたへけるハ廣々としたる海上よて數百よ餘る船子どもの高聲なる
その響き雲よ入波浪聲よ和しておびたゝしく秀吉公もともよ船中よ入玉ふ其行粧もつとも今日の

時をつくして美をかざり虎の尾の鞘の鎗二百本金造の長刀數十柄舟れ頭よ森然たり兵卒三百余人一やうよ茜染の羽織を着して相從ふ秀吉公ハ舟中よりかめて酒宴と促がしまた猿樂を催し觀世金春れ太夫等を召れて一日の遊覽を翫び玉ふよハ両使もまた興よ乘ゑてその感すくなからざりけり翌日よ至れば秀吉公両使を召れ茶を玉ふ重て丁寧の情を盡し玉ひけるかくて両使ハ歸朝の暇をつげヤよ秀吉公書を大明よ投じ玉ふ其趣ハ和親もし僞なくば我もまた何ぞ盟と渝ふべきやゑかれハ大明皇帝の女を邀ひて本朝の后妃の位よ備ふべし両國年來相敵す故よ久年拗合船とおくゝす今若和平の儀事成就せバかなゝず是を遣とへし和親終るの後両國れ權臣相互よ揖辞を通じ我去年より饒將數輩とつかハし朝鮮を征伐し其都邑を平げその人民と殺戮を而も今貴國こと〳〵く我盲を取るなゝば朝鮮國の罪科を顯ずその八道を割て四道をもつて李昭よ授けその余の四道ハ我これを領すべし若四道を彼よ授けあば朝鮮の王子ならびよ大臣一二人をして本朝よ質たらしめんのみ貴國是を訝る事なかるべし去歳我將加藤主計頭清正朝鮮の王子瑯瑰二人を活あがら擒よせりされども沈惟敬懇々よこれを請もとむ是故よ今二子を朝鮮よかへしつかハそところなり我朝鮮の權柄をとり貴國よある臣等數人と世々我朝ゟ叛くべからずとの盟誓をもつてその丹誠を顯す時ハ是可あらんと認めてつかハしけれバ謝用梓徐一貫この書翰を受とりて歸國をこそハ去たりけれ

朝鮮の王子詩をつくる事

同月秀吉公ハ内藤飛彈守藤原如安を使として小西行長増田長盛石田三成大谷吉隆が方へ書を馳て朝鮮二王子ならびよ從臣黃廷或黃赫等と歸國せしめぬべき由を仰せ渡されけるとなりまた福原右馬助熊谷内藏允を朝鮮國よつかハされ諸將よ告げゝゝ大友義統が今度朝鮮國平壤城よあて小西が急難を救ハずして怯弱の働きの在しと曾より武門の汚として両國の會戰よ日本國の辱と殘せる等れ箇條をもつてこれを責給ふまた嶋津又七郎が同名兵庫頭よ屬しながら義弘が下知よ從ハざりしことを尤め給ひ其外波多野三河守が鍋島直茂が下知よ去たかハざるを怒り給ひて遂よ黑田長政が幕下の士となし僅よ其命を全ふする身とハなりよける斯て朝鮮王の二王子ハ加藤清正が手に擒となり給ひ憂が中よも年波の去バらくも止まらで三年あまりの夢の世とバ千年をふるが如くよて過ぎ送りけるされども加藤清正が猛威ある男よして鬼神をもおそれぬ勇將なれども情ふかき者ありけれバ平生にこゝろをつけて衣食ハいふよおよバす四季をりふしの慰ミまで陣中の騷しき中とハ云ど此の如くよ取まかなふハ奇特なりける事ども多り一歳清正が橘中の後詰ありし時二王子をバ直茂よ預置たるよ直茂も亦是と憐み朝夕よこゝろを付られけるある時陣中よ召具したる是琢といへる禪僧よ一絶句の詩と作らせ王子よ是を贈りける

可レ憐天上鳳凰兒　飛入鷄群失二德儀一
咸鏡蒙塵何似處　蝕非二月耻一是斯時

王子ハ是を意わる愚ぞと感ありて即ち和韵をおし給ふ

包レ羞忍耻是男兒　不レ恨君山鍼羽儀
玉帛明朝西塞曲　泗城香火共歸時

その夜ハ王子もこゝろとけ詩文贈答の事なんどよて哀しき月日を送られける玄かるよ今度大閤の命よりより朝鮮よかへされけるが多年の恩意を清正が方へ謝せんとやおもいれけん一封の書と加藤右馬允清正が家臣也が方へつかハしその意を清正よぞ達し給ひけるその趣ハ両王子臨海順和ならびよ倍臣長溪上洛護軍大將南兵使某等の人々壬辰年より日本大將軍主計頭清正よ擒へられそでよ城よ入し時恩遇ようとにすくなからず一行の下人まで幷せて衣粮を給ふ撫恤まるゝこと至情おるかなまた釜山浦よ至るの後關白殿下の命をして京城よ放ちかへさるゝの慈惠佛れ如し眞箇れ日本中の好人あり況や素聞關白殿下雄傑たぐひなきゆゑなるうな四隣みなこれをおろれ隣國の薛子廢官を待よ舊意をそんじて渡海を哀ミ京よかへらしめけるその恩惠深きこと此海ふなんぞ異あらん其敢て忘るゝ期あらんやと書たりける清正ハ書を納て長家の寶とぞなしたりける

日本の軍兵重て渡海の事

此時秀吉公より重て浄下知あり釜山浦近隣の城〳〵へ人數くばりの多少まて是を仰出されたり先釜山浦の本城よハ羽柴安藝れ宰相秀元椎木の端城二箇所其兵一万七千六十人と聞へたり熊川よハ小早川隆景六千百人同城の端城よハ久留目の待從四百人柳川待從千百餘人筑紫上野介三百餘人高橋主膳二百九十餘人右の二箇所よ籠るところ八千二百五十余人と聞へけり唐島よハ蜂須賀阿波守四千五百人生駒雅樂頭二千四百人合て此手よ六千百九人た餘り同島の内一箇所よ羽柴土佐の侍從二千五百九十人福島左衛門大夫正則二千五百人戸田民部少輔二千三百餘人合て七千四百餘人あり加德島よハ九鬼大隅守八百三十余人加藤左馬助三百十餘人嘗平右衛門百餘人得居兄弟五百七十人脇坂中務少輔九百人合て二千七百三十餘人是一番を相勤れハ藤堂佐渡守千四百七十餘人堀内安房守五百七十餘人杉若傳三郎百八十五人桑山小藤太同小傳次五百余人なり是を合て二千七百餘人二番手のかハりさり毛利壹岐守千六百七十八高橋九郎七百餘人秋月三郎三百八十餘人嶋津又七郎四百七十餘人伊藤民部が七百人此手合て三千九百八十餘人なり加藤主計頭六千七百九十餘人本陣一所を相守り同く端城をハ相良宮内少輔と合て是を守る島津薩摩侍從二千百二十八人黑田甲斐守五千八十餘人鍋島加賀守七千六百四十餘人よしておのゝ本城一所と守り鍋嶋ハ外よ端城一所を

搆ふ宗對馬侍從端城一所と小西行長七千四百五十余人よて本城一所松浦形部卿法印宇久大和守大村新八郎端城以上三ヶ所あり總數合て十八ヶ所其内本城十一箇所端城と稱するハ小城よしてその數七箇所と聞えたりこれと守るれ總人數合て七万八千七百人とゑるせるハ文祿二年の着到なり右の城地所付れなき分ハ鳥川より西よつゐてよろしき要害の地を見はからへとれ命令なりかくてまた秀吉公ハ黑田如水淺野彈正二人をして朝鮮國在陣の諸將よ遣るゝの命を承け急ぎ出船を促さる其おもきハ前年諸將晉州城と攻るといへども其城の堅固ゐるよ拒くこと張くして是を下すことあたわずとゐこの度ハ諸將ひとしく進んで晉州城と攻破るべし今や淺野彈正黑田如水とつかハそところなり二人よ對しておのゝ軍事と相談すべしとの事ともなり彈正如水ともよ朝鮮よ着岸あり增田石田大谷が方へ書を通じ秀吉公の令よ依て只今渡海の旨を傳ふれば增田等これと聞よりも先浮田秀家の陣屋よ往て是を告げたるよ彈正如水ともまた秀家の營よ來りて參會し秀吉公の令を傳へて旅館よかへると聞ゆるゆゑ增田石田大谷ハ秀吉の令をうけ玉ハちんろの爲よ淺野が旅館よ行たりける折ふし如水と彈正ハ碁をかこみて居たりしが征や功や點なんど碁の行を爭ふて餘念と忘るゝ時なれば三人の來りしを更よあらざる如くなり稍しばらく側よ座せりと雖も何の挨拶もなきゆゑよ石田ハ增田大谷よ目くばせしてろつとその座と立かへりける其後一番の碁れ黑白をこゝよ分ち始てこれよ心つきと三奉行の輩ハ何方へぞと尋ぬるよ尋ぬるよ近習れ者ども答て最早此かへりゐといふよ二人ハ先よりの怠りよ心づき早速よ使者と馳せて再三怠りを詫るといへども三奉行ハ怒りを含んで敢てかへるべきの心もなく其上使者を叱つて我々よ逢んより碁聲丁々たるの樂よハ過べからずと云すてゝ遂よ顧る意ハなし彈正如水の両人ハまた人口の笑ひ嘲らんことを恐るゝのみあらず秀吉公の怒りよあハんかとれもひめぐらすよより三人の者共よさま〳〵の謝をなして云わけゐすと雖とも三奉行つゐよ相會する者なければ秀吉公の令旨を諸將よ通じて二人ハそのまゝ歸朝なしけるが秀吉公これを聞玉ひて二人の怠慢を尤め玉ひける

朝鮮の軍兵晉州を救ハんと欲する事

去年壬辰年日本の諸將加藤淸正江守長谷川藤五郎森常陸介等兵を集めて晉州城と攻るところに牧使官金時敏といへる者これを防ぐことの緊しきよより日本勢もこゝろをつくして攻るといへども遂よ克つことと叶ハずして軍を退るところよ今度秀吉公より晉州と攻おとして後和議のことと調ふべしと下知あるよより兼てハ小西を始めとし三奉行等まで一同し和議を調ふよ定め置たれども重てこゝふ軍兵備の定めをばなしたりける殊よハ加藤淸正ハ行長と秀家三奉行と相談おして日本朝鮮両國の和睦のことを司どりさしも粉骨と盡して生捕たりし二人の王子を放ち回らしむるの遺恨

もあるゆゑ何とぞして此度の和議を破らんと思ふ折から晋州城と攻破りなばよきさまたげの第一なりとおもひつれば人よすぐれて勇みて居たりける加藤清正小西行長ハ前々の定めのとほり毛利秀元一方よ向ふ小早川隆景黑田長政淺野彈正伊達政宗等これよ屬す浮田秀家一方よ向ふ島津義弘鍋島直茂長曾我部元親蜂須賀家政立花宗茂等これよ屬せりおよそ軍兵六万餘人の着當なり夫晋州の城たるや大江前よ在り三方ハ嶮危よして石壁聳ねたるよ壁高ぬりあげ矢棚をつゝね搆ふ晋州今の牧使は徐元禮といへる者にして朝鮮の人數二万餘人此城よ籠髄たりしなり朝鮮の諸老臣も日本人南の方晋州城よ寄來るよし聞えければ去きりよ諸方よ旨を下し諸將と督して日本の兵を追討し都元帥金命元巡察使權慄以下の官義の兵士みな〳〵宜寧の地よ相集り軍評評定したりける權慄ハ幸州の捷るよ狂つて岐江を渡り前ゑ進んで討んと云けるを郭再佑高彦伯これを謀りて倭兵はさよ盛んなり我勢ハ多くハ烏合の兵よして戰ひよ堪たる者少なければ最もおぼつかあきことなるにましてや粮米は儲もなしかる〳〵しく進むべきことよあらずといふ爰よ李寅が從事成好善と云る者その意かろかよして事をさとらぬ男なるが臂をふるつて諸將は逗留するを責ていはく此のとく汕斷して何時その敵とゞ退くべき我ハ權慄の議よつかんと慢りよ進んで江を過るかくて馳行咸安の地よ至れども城ハゝな日本の兵に掠められ空しきあとゝありければ城内を搜りもとめても粮米の類においてハ一物も得るところなかりけりこれよよりて諸軍中よ食乏しくやう〳〵よ青柿の實を摘とつてこれを食せる体なれば誰か一人歸となさんと云れこゝろもなし明日よ至つて忍の者ども馳來り倭軍の到ること最も急よ金海より大軍を押來るといふふの〳〵おどろき立てまさよ咸安を守るべしといふ者もあれと或ハ退ひて要害よて守らんと云もありて更よ決定せさりけんかゝるところへ日本は兵士の大勢砲の聲おびたゞしくひゞくを聞て人〻洶懼は色をあし爭ふて城を出たるが余りよつよくおそるゝとて咸安の吊橋より押合て水よおちこゝよて死よおよゞる者甚もつて多かりけり

晋州城合戰の事

朝鮮の兵將やうやくよ鼎津よかへり日本勢を望ミ見れば陸よハ戈矛鐵馬を連ね旌旗は影雲よひるがへりて寄來れば水よハ艫舳と並べ楫梶去きりよ波濤を押切て我おとらじと漕ちかづくその大兵の有さまハ野を蔽ひ川を塞ひで攻寄る勢ひあり朝鮮の諸將共大よおどろきたる有さまよて爰ともまた散乱して逃れ行權慄金命元李濱崔遠等ハ先だつて全羅道よ向ひければ金千鎰崔尋黃慶進等晋州城よ引入ける日本は兵將もさきもあらせず攻立る牧使徐禮元判官成守景等此時よ明將と待うくゞきため久しく尙州よ居たりしが我本州の急急なりと聞より取ものも取あへず狼狽てかへりける徐

禮元此所の牧使となつて纔に二月の間なり州城のもとの古城に山上に有たりけり此ところの四面に山そびえ險岨の要害の最もすぐれたる處なり壬辰の年倭兵を防ぐ用心として所々の城を修理造作の有し時此城をも東西に移して平地に就くこゝにおゐて日本勢の寄手より城樓を八ヶ所に組上俯して城中の有さまをうかゞひ見又城外の近林に人歩を走竹の林を刈り取竹束に作りて是を城邊ふかしめぐらし其陰に身を蔽ひ敵より射出す矢先を防ぎその内より鳥銃を發しける玉飛で城中に落ることいさながら雨の如くなりこれによつて城中より敢て頭を出す者あしまた千鎰が率ひたる兵卒にみな〳〵京城の市店に集る町人ばら利をもつて募りに應ずるともがらなれば戰鬪のすべをもしらずまた千鎰も兵事をしらず謀とおし人を用ゆる謀計もなければ自ら一人にして事をなさんとする者なり殊更に牧使徐元禮と相惡んで中よからず主客互に相うたがひ號令もこゝに乘き違ふにより是が敗の本となる惟り黄進と云る將東城と守て居たりしが士卒を勵し意を盡して攻戰ふ是によりて數日の間敵より打出す鉄砲にあたりて死せる者此手に最も多かりければ軍人今に氣を奪れて防ぎ兼てぞ見えにける此手に向ふ寄手の大將に浮田秀家の人數と聞えたり秀元に西に向ひ加藤小西黒田淺野の諸將にみな城の南面に向ひたり寄手の方にも此城二度まで攻あぐんでに秀吉公の震怒つよかゝんと恐れけるゆゑかつにまた先度の耻辱をおもひば諸軍必死の心となつてさま〳〵の攻具とゝのへ或に梯管管堵或に連梱竹束熊手に類まで〳〵調ひ備すと云ことあく諸手一同に心を合せ攻立る城内もまた防きよろしく日本勢蟻の如くに壁に附て城中に入ゝんとする城内より石を投射を發し力を極めて是を防げば流石に小西黒田毛利がともがら少し攻あぐんで持口を退かんとしたりける此時に總兵官劉廷に晋州危しと聞より八莒より馳てすでに陜州の地に入ゝとんし吳維忠も鳳溪より草溪に至りもつて右道を守らんとす寄手の諸將も今に輙く此城また扱きがたからんかと思惟にわたり評議もすでに區々になりたりける

清正韓盤車を作る事

こゝに加藤清正に小西石田が和議のことを是非に破らんとおもふ意の強きよりいかにもして此城を攻おとしてと首を傾け思惟しけるがよき手だでこそ有なれと數百枚の牛の革をあつめ鎧の甲といふものを造り出せり是ぞ韓盤車といふものなり異朝に古より是ありて用ひ來れる軍器なれども本朝いまだ其制作をゑらざりけるを清正はじめて工みおしろの下に多くの足輕を入置四足に車をゑかけひし〳〵と敵城の檐下までおし付て金手子を入大槌ともつて石垣の角石をこぢはねて堀かへて生牛の皮をもつて丈夫に屋の甲と張り日に乾かためたることなれば石を投つけても少しも痛まず半弓の矢の根なんぞ射透るべきことにあらねど内に在つる足輕共何の恐れもあらずして自

由と働きて堀けれど暫時の間ゐ城の隅ある大石ぬけ八九間の其間ぐゝら〳〵と崩れける折ふし雨のつよかりければ城の内の者どもゝ雨のつよきゑ土濕ひ石ぬけたりとおもひけるゑや刺を束ねて缺路をふさぎ石を投じて敵を入じと防ぎけるすでゑ石垣くづると見るより加藤が軍より森本儀太夫晋州城の一番乘後日の證據ゑ立給ひと隣ゑ備へし黑田が陣ゑ言葉をかゝして城れ破れより壁壘を乘ゑんとすると内ゑひかへし成守景士卒ゑ下知して鉄砲を發し近々と寄來る森本儀太夫が向ふ髓を打ぬけば何かゝもつてたまるべき城より外ゑ打おとされ痛手を負てかゝり得ず最前ゑ森本が黑田が陣ゑ言葉をかけし時の士ゝ後藤又兵衛なりけるが森本ゑ言葉をかけられこゝ無念とつゝゐて乘ゑむ後ゑつゝくゝ本葉の堀久七と名乘て上る三番ゑつゝけるゝ清正が手の者飯田角兵衛といふ者なり角兵衛ゝ先へ乘こむ後藤が上帶とつて引すゑ逸一番乘とやとやきや先がけゝはや此方ゑ有もれをと云つゝ清正の相印妙法の旗をさし上げ清正が家の子飯田角兵衛一番乘と名乘ける後藤ゝこれと怒り一番乘ゝ黑田が手の者後藤又兵衛堀久七ぞと名乘てこれもつゝゐて駈登る飯田ゝはやく敵ゑ打てかゝり忽ちゑ首一ッを得たりけるこれを見るより加藤が手の者加藤清兵衛大脇次郎左衛門久保吉右衛門小代吉村柏原三宅赤星庄林をはじめとし我劣らじと乘込ける千餘軍兵北門より内を守りて居たるが此有さまとはるかゑ見るより城ゝはや陷りぬとこゝろ得て敵も又求だ

來らぬゑ我先ゑと破れける日本の諸勢山上ゑ打登りて城兵れ潰ると見るより總軍の兵士ども一度ゑ喊の聲を發しどつとゐめいて切入けり千餘ゝ蹈石樓れ上ゑ在て崔慶會ともゑ詠めて居たりしが此体を見より憤りれ涙袂を潤し今ゝ是までなりとおもひ定めけん崔慶會とゝもゑ手と携へて海ゑ望んで身を投ぜて底の水くづとありゑける牧使徐禮元成守景等餘りゑつよく働きてその身も多く手を負けれゞ林の藪みゑえばらく隱れて居たりしと秀家が家臣岡本權之亟これを搜してろれ首を切たりける此後加藤黑田の両人一番乘を論じけれども遂ゑ加藤が一番乘ゑゝ定りける秀吉公この時ゑ牧使が首と見せよと有けるゝ先の牧使金時敏が先年この城とよく防ぎ味方おくれと取しゆゑなり此度の牧使官ゝ徐元禮ゑて有けるゆゑ其人とゝ違ひけるされども此首を生捕の者共ゑ見せけれゞ牧使官に疑ひなしと云るゑよりこれゑよつて徐元禮が首と擣淹となし名護屋まで送りつかゝしけると秀吉公ゝ大ゑ是を悅氣ありけるなり朝鮮の大將の討死ゑたる者ども牧使官徐禮元判官成守景倡義使金千鎰本道慶尙道兵使崔慶會忠清道の兵使官黃進義兵復讎將高從厚等を始とし軍官民卒の死する者凡六万餘人牛馬雞犬といへどもこれを遺さずことゝ〳〵く殺しけりそれゑても猶飽たらずやゐもひけん城を夷け堀を塡め井をつぶし前度の憤りを發しける此時六月廿八日のことなりけり此度落城の時ゑ至てはじめて城ゑ入たるゝ加藤小西黑田その功何れも同じといへとも清

正城面の高櫓と破りたるより城中大に乱れ立てつゐに落城に及びけるこれによつて清正をもつて第一の功と定めらるまた伊達政宗小勢ともつて渡海をなし軍忠をつくしその條神妙の至りなりとて秀吉公大にこれを賞し感状と賜ひけるまた秀元も大兵を率て西門より急に攻て入ける故討取ところの首數い此手ともつて第一と定めらる日本勢朝鮮と討伐の戰ひはじめより朝鮮人の討るゝ事此度の戰ひをもつて第一とこそ云られける朝鮮王李昭もまた今度討死の諸將にこと〳〵く贈官をなしたりける

沈惟敬再ひ和睦をはかる事

朝鮮國王いまた義州の地に在けれどそでに王城へもかへり入らんかなんど〻旅裝の支度もあらんとする時に當り晉州の城をおとしいるゝときこえければ李昭れゝいかおどろきおそれ大明の諸大將へも急を告また大明の都へも此ことを告たりける此時明將の朝鮮に在もれい吳惟忠い善山府にあり劉廷い大丘府にあり洛尙志王必適い處州に在て要害と取かため李如松提督い王城にぞ在りける明將共晉州城のおちいると聞より陜川草溪等の所に馳せて右道を防で再び王城に入らせしとぞ防ぎけるされども日本の諸將もとより外の願にあらず晉州を破るの後い釜山おかへり大明和をなすの返事をまち日本へ軍をば引取べしと云觸しけり李如松い日本より晉州を陷れたると聞ければ惟敬が和儀の實ならざるを責とがめけるによつて惟敬い小西が館に往て約束の違たりと恨るに小西いかへつて惟敬を怒り汝和議を調ふといへども大明の兵日々に朝鮮に入る是何ぞ我と誘けるぞと責けるが事如此の次第にて小西飛驒守とも大明にいつかいすまじと申されける惟敬いこれを最もなりとおもひければ立ちへりて明將共に此おもむきを諭せども明の諸將いこれに答て君命あつて兵を出し倭兵を剿せとの命いあれども未だ軍をかへすべきの令を聞ねば私にかへし難しと答ふ惟敬今いなすべきやうなく飛脚をもつて石司馬に和儀の張本として惟敬と同じける志あるものゆえことと能やうにこしらへなして李如松等が軍をかへすべきよしと兵部右侍郎宋應昌が經畧使として朝鮮に有ける方へ云遣ける李如松いもとより歸國の望み深かりけるゆえ九月の内に引はらつて王城を守る兵士どもを段々に退かしむそれよりして沈惟敬いよ〳〵和睦のことを成就させんとて日本の將小西行長が一族なる小西飛驒守如安）あるひい内藤飛驒守太閤の使節なりといふ）を同道にて關白秀吉公の表狀を取持せ大明國へ行たりけるもとより太閤の命をなせるの狀にいあらず小西い元來倭智の多き者なるゆえ太閤の意を起し無益の征伐これありて危くも異國に長陣を張ことを是願いざるところなりさらば國の長臣としてこれを諫る志もおければ面前い佞言をもつて主をあざむき彼方此方とこしらへたるに折からまた同じ心の小人沈惟敬

がたま〳〵來り數多の賄賂を三奉行より行長等までこれと與へて偏に和議の全くならんとを締ひて己が功をたて名聞をあさんと欲するゑ小西等ハまた顧ふところの幸ひなりと是ゑ組して惡きことゞ甚なるやうゑ取かくし兎ゑも角ゑも和睦のことをぞ巧みける李如松が王城を出て明ゑかへりけるの議を定めてすでに軍を退るゑ日本の兵將なほ釜山浦ゑ充滿するを朝鮮の人心大ゑおそれ金侍郎といへる者一絶の詩を贈りて曰く

聞說將軍捲甲遲　定知和伐是非問
朝廷若有二班師命一　不獨唇亡齒又寒一

と作りてぞ贈りける此詩ハ意ハ將軍提督の今軍兵を引つれてはるゝ歸るの由と承る定めて日本と和睦とるの理とゝれ兵將を討退るの是非ゑおゐてハ申さずとても合点のまへらるべきが若只今朝廷の勅定とて謾りゑ軍を班して明國ゑかへらせ給ハん後をつけて日本の兵不意を討なゞ大明も安穩ゑハあるべかゝずこれを人の口ゑたとふれば唇と齒とい路もれ常ハ預らざるものゝやうなれど唇のあき時ハ齒ゑ風をみゝ寒きが如し朝鮮を唇ゑたとへ大明と齒ゑたとひて其難ののがれなからんことゑたとへたるなり沈惟敬ハ如松が明ゑかへるの時もろ〳〵の貨物ゑ花布四十疋を小西行長ゑ贈り其外日本人の求めゑ依つて書籍と多くこれを贈り其替として日本の旗五本をもらひたるゝ潛ゑ隱すといふことを告げゝらそる者ある故ゑ李如松大ゑ怒りゝ殺し彼者を助け置ならゞ遂ゑハ倭人のため反間をなすべき奴あり即ち因らへて殺さんとおもひども石星がとりもてる者なるゆゑあしく當らゞ後難もいかゝあらんと妄りゑ誅することもかなハずして先ハそれまゝゑ止たりける

大明の諸將西へかへる事

沈惟敬すでゑ小西行長の一族なる小西飛彈守藤原如安を同道ゑて明の朝廷ゑかへり至るといへとも明朝の諸臣評議して此度の降表ハ是太閤の意ゑあらずしてその臣のかまへこしらゆると云ことを察するゑその上また惟敬が歸り至ると未だ其間も遠からざるゑ早く晉州城を陷いるゝことあるハ最も中國を慕ふの志その誠より發するゑあらずとゝがめて小西飛彈守をゞ猶遼東ゑとゞめ置きゝろの返事をも久しくとゝめてこれを通せず此時ゝでゑ李如松提督ハ明朝ゑかへりたりける惟り劉廷吳惟忠王必由等一万餘人八莒の地ゑとゝまりたるが朝鮮大ゑ國荒人むなしく食する者ハ多くして運漕兵粮米ゑくるしミけることすくなからず老弱ハ溝ゑ轉び壯なる者ハ辱と忘れて盜賊の伴をなるゑまた重ぬるゑ疫癘をもつてすれゞこゝゝ於て里民こと〳〵く死亡となつて殆と盡るゑ至らんとす父子夫婦の愛もなく人々相食し野外ゑ暴せる骸骨の草莽ゑ亂れ臥たる有さまハ目もあて

られぬ有さまなり劉廷い八苫より南原ゑ移りまた南原より都城ゑかへり留ること十餘日ばりありけるが次第〳〵ゑ西ゑかへりて朝鮮を援ふの兵なきゑ所々の日本勢い猶未だ船を海上ゑ浮めて歸國せべきのやうも見へねバ朝鮮の人心上下ます〳〵れそれて日本勢不意ゑ襲ひ來らば如何なる憂目を見つらんかと歎かぬ者いなかりける

黑田淺野等異見の事

同八月秀吉公い書を淺田秀家毛利秀元等ゑ賜ひ朝鮮の地へ在陣の諸將を勞ひ且またその怠りのこゝろを勵し給ひける其おもむきゑい兵器粟米鹽醬等い增田右衛門尉小早川主馬頭ゑ問はからひてこれと倉庫ゑ藏むべし炭薪等い此ところ山多けれバ斬芟て城中ゑ積み其上を泥にてぬるべし寒到ゑば圍爐を步卒の類まで與ふべし寒疾を得せしむべからず篙人當ゑ舟中ゑ有あれバ其寒疾と得んことい必定せり若用あらば別に小屋と造りて此者ともをこれゑ居しむべし若無用の者をバ先本國ゑかへゑしめて來春をみやかゑこれを呼べし且また普請のこと終ふば山木と斬伐つて城内にたくいへ積んこともまた可かるべし大雪もし降來らバ山木を伐るゑおぬてそれ難からんかその爲なりと認めて飛脚をもつて通せしむまた同九月ゑもたりげるまで大明より和睦の返報いまだ來らざるまより秀吉公いまた朝鮮在陣の諸將ゑ申遣給ひ諸手の陣屋を修理し彌きびしくこれを守るべし

凡そ大明和睦のこといい我是を推量するゑ僞りの計策たゑんと思へり和議のことゑ欺むられてゐこたり倦こと有べかゑず我まさゑまた援兵を遣してこと〳〵く朝鮮を平げんとおもへり去かれども大明もし交和のことあゑバそれい時のよろしきゑ去たがふべきとなとりと命と加へ給ひけるまた或日名護屋ゑおゐて利家等の老臣大閤の御前ゑ集りて軍議をなす黑田如水い垣を隔てこれと聞即ち其座に入りて去年大軍を朝鮮ゑ遣し給ふとき利家等の諸大老の内師を督して渡海あらば諸法度軍令ゑ至るまで滯ることなかゑんものありし若しゑからずバ軍の道と知たらん我如きの者を遣たらバ朝鮮と征伐何れかたきことか有ん今清正行長等たゞ武勇のみを出せバ善とこゝろ得て諸の軍事と剛强ゑのみ取さバき殊ゑい彼等が年なをまだ壯んなるゑよつてその心ものことゑ練なゑいず其上ゑ清正行長その中善らずして清正法と出せば行長これを破り行長令と下せば清正これと用ずこのゆゑゑ朝鮮の人民何れ法を用ひて事を定んやうもなく遂ゑい山林ゑ遁れかくれて彼方此方とよるべをも定め兼たる土着の者我手に入し三道い家ゑ人なく田畠もあれ地とあつて靑草のたぐひまで繁けれバ在陣の諸將の困勞まとゑもつてやもべきやうなしと云ければ秀吉公默見給ひてまことゑ卿が言の如し師と外ゑつからして其勢ひ屈しなバ内れ亂れの有らんこと尤危きことなりこのゆゑに諸大老利家氏卿長政を招きて議論をなし所なり釜山浦の諸將土をおもゑの意あつて進むる

の氣なし我自ら師とひきひて朝鮮を征せんのみ水陸の軍兵はやくこれを驅催ふして軍列をとゝのふべし日本とば徳川公ゑ附けヤせバ我今こゝろと勞するの儀更ゑあし我ハ軍十一萬と督し利家をもつて左陣とあし氏郷を右陣となし各十萬づゝの兵を卒しすべて三十萬人の兵ならん軍馬の叫聲野ゑみたしめ旗のひるがへる影ハ天を蔽ひて三韓と過ぎ大明ゑ入るなゑば何ぞうたきことかあらんかくて盡く明兵と切つくし我つゐゑ大明皇帝と仰がれんこのこと最も意地よきことあちんとある徳川公大ゑ憤怒まし〳〵吾何ぞ日本ゑ留守たらんたとひ如何なる仰あるとも我もまた渡海せんのみとありける顏色のよかゑぬと窺ひ淺野長政すゝみ出云やうまとゑ狐れ妖をなし時ゑ應じて人とたぶらかすこと我久〳〵これを聞といへども見ることハ今姑て見たるかあ秀吉公のたこゝろゑハ怨くハ狐媚入かハりて只今のた辭を出ー玉ふならんかと云へバ秀吉公これと聞玉ひ怒れる髮忽ちさか立噫なんお彈正何ど言の不禮なるぞとて刀れ柄ゑ手をかけ玉ふを利家氏郷これを抱へ止めて曰く彈正ハ我ともがらこれを誅せん豈君の刄と汚さんやととゞむれば彈正少しもれそれず我等如きもの何人誅ゑ伏すといへども必ずしも愛とするゑ足ゑざるか抑近年大軍を朝鮮ゑつかハし玉ハんがため家ことゑ三人ある所よりハ一人の軍役ゑとつてこれを遣すゑより今日本の軍兵朝鮮ゑ渡れるもの半ゑ過たりまた轉漕の費幾くと思召す秀吉公今日た船を發し玉ハゝ明日ハはや

く郡盗の起れると蟻の如くに同まり亂を搆ふる者もまた次であらんことまとまに疑なきことありと理りを述るに秀吉公大に立腹わりといへども折ろ〻肥後の熊本にて薩摩人梅北と云ふ者一揆を起すことあるにより彈正の息左京大夫幸長を大將とし梅北と戰ハしめんとて彈正と召れて秀吉公の沙氣色よろしくなりけるによつて彈正もまた大に喜びけるとなり

朝鮮王王城に還る　并大明經畧使と改る事

同く十月朝鮮王李昭ハ日本勢もすでに釜山浦に引退き李如松等も王城と明け軍兵と引て朝鮮を立て明朝にかへりけるによりすなハち義州の地より王城へ歸府なしたりける同十二月に入大明國の使節として使番目付の者どもハ朝鮮に入來る此時に日本の兵將約束によつて釜山浦まで退くといへども猶朝鮮の地をはなれず船を海上につらねて晉州城をふとしいるゝのこと皆その和議の約束正しからざる故なり是等の事ハ皆宗應昌が經畧使として其政法直ならざるが至たすところありと宗應昌にとがめかゝりてこれが任をとゞめられ新に經畧使顧養謙といへる者これに代つて遼東まで來り其參將胡澤と王城につかハし朝鮮王をはじめとし諸臣までに告げ諭せるその畧に曰く倭人無端して爾が國をおかす勢ひまとに破竹の如く王京開城の三都會に據ふて爾が土地の人民をたもつまと十にしてその八九なり剩さへ爾が王子陪臣までを虜にそと聞し召によつて帝王大に怒せ給

ひ軍を起して一戰なし平壤の倭兵を破り地をとりかへし開城を得たり倭人つゐに王京を遁れ王子陪臣を送りかへす地をふくすること二千餘里なりこれよりて中國帑金を費とはかゝれず士馬の死することもまたすくなからず朝廷の附屬の國と待ことの恩義まとゝ此ゝ止る皇上極りなきの恩もまた己ゝ過たり今餉すでゝ再び運ずべからず兵士すでゝ再び用ゆべからず倭奴もまた威をおそれて降を請ふて且また封貢を乞なり天朝正ゝよろしくこれが封貢を容て外臣となし倭人と驅りて〻渡海せしめ爾が境を侵すことふたゝびなさしむべからず亂れを解き兵を息むるゝもつて爾が國久遠ゝすべきの計あり今爾が國食つき人民窮するゝ至れりまた何をたのんでか兵師を請ゝ至れるや既ゝ爾が國ゝ兵餉をもあたへず倭國ゝもまた封貢を絶ならゞ倭兵必ず怒りを爾が國ゝ發し汝が國必ず亡びんぞ早く自ゝのためゝ計となさゞるやむかし勾踐が會稽ゝくるしむとき身且吳國の臣となり妻又吳國の妾とある況や倭奴のためゝかれと中國ゝ乞て臣妾たらしめんことをなしもつて自らの憂をゆるふして去づかゝこれが圖をおさんゝ是勾踐か君臣の謀ゝいまさずやなゞゝ委曲千百の語言をつらねたるこれ沉惟敬等と僞りをこしらへ倭國中國ゝ入て臣たゝんことの取次と朝鮮國ゝ乞ひども朝鮮これを取もたず是を怒りて日本より朝鮮をゞ攻たるなり只今中國より日本の望みゝまかせて日本王の封號をゆるされ年々貢を獻ずることを仰せ付られなば此和睦ゝ事

あらんと大間の意を反復して云艦すゝより如此とゝ見えたりける朝鮮王城ゝ至つて旅館ゝあること三月餘りなれども朝鮮の評議さらゝ決せず李昭も最も難義ゝこれをおもゝるゝゝ柳成龍ゝ時ゝ病をもつて家居ゝたるが奏して曰く惟當ゝ詳ゝ近日倭人の事の情をそなひて奏聞し兎角ゝ中朝(大明をさしていふ)の仕方ゝまかせ給ふより外あるべからずとゆすゝより即ちこれ議ゝ一決して朝鮮王李昭より大明への返奏どゞなしたりけるこゝゝ顧養謙ゝ朝鮮の經略使となつて此ところに來り日本より降を乞と云議と和と朝鮮と和議をとり扱ふ議と大ゝ相違ある上ゝ胡澤が方より見せゝめたる行長玄蘇か前々より朝鮮へ通ずるのおもむきの不向なるゝ猶もつて降と和睦と黑白れ次第あれゞ顧養謙ゝ委曲ゝ此議を申上るゝ朝廷の聞ところ大ゝちがふの旨を下して評定あるゝ徐貫謝用梓等も惟敬等が賄ひを受るゝよつてことを曲げてこれを論じ石司馬ゝ荷擔するゆゑ遂ゝ顧養謙もまたその任ゝ叶ゝぬとて新經略使孫廣をもつて朝鮮ゝおもむかしめ顧養謙ゝ代らしめたり

秀頼誕生の事

此年文祿二年の冬秀吉公の愛妾淺井備前守が娘の腹ゝ男子出生ゝ玉ふを秀次の方より早乘を馳せて此おもむきを名護屋ゝ告申されたりけるを秀吉公ゝこれを聞玉ふより大ゝよろこび玉ひて朝鮮のことゝおぼめてゝ沉惟敬等がすでゝ和睦を調ふべければこの後急事もあるべからず其上軍中の下

知名護屋營中のことゝ萬事德川公利家これを決斷ス玉ふ上ゝ何のこゝろもとおきことあらずと取ものも取あへず輕舟ゝ棹を馳て大坂ゝ至り大ゝ旧祝のことあつてもでゝ秀次を退け秀頼ゝ國政を讓らんとするゆこゝろゝこゝゝ生じける明れば文祿三年ゝ歳かゝりて秀吉公いよ〳〵天下の事ともつて秀頼に讓らんと思召の心ゝ日々深く成行ども秀次ゝさらゝ此場をゆづり退き身を全ふするの謀慮とゞなし玉ゝず遂にゝ悪逆の増長するゝ身とまかせて亡びゝ至るゞ愚おる朝鮮國和蘭のことゝ双方やうやく定るのその樣疑ひなきゝ付て彼國ゝ在陣の諸大將も去年の秋のもゝより追々ゝ彼港を出船して大半ゝ歸朝したれども猶も行長等ゝ在陣と聞えたりかくて秀吉公大坂の城地をゞ秀頼卿ゝこれを讓り大和れ多門の城とゞ修治して隱居れ室となし給ゝんと思召けるが其地最も僻遠ゝゞ京都大坂の人馬の往來も不自由なりさらば伏見の亭をあらため茲ゝ城地を築くべしとて城州木幡山ゝ縄ばりとゞなし增田石田ゝ命あつて普請の奉行たるべき人を撰み給ひけるゝそなゝち書付をもつて十三人の姓名を志るして上るその中ゝも佐久間河内守政實瀧川豊前守佐藤駿河守水野鼈助石尾與兵衛竹中貞右衛門等なり郡々ゝ回らし文を傳へ歩役を集ること凡そ二十五萬人の役ゝゞ聞えけるさても朝鮮在陣の諸將軍旅れ久しきゝ困勞して異拭の亡魂とゝある輩ゝゝ丹波少將秀勝東郷の侍徒長谷川藤五郎秀一加藤遠江守等なり又中川右衛門太夫秀政ゝゝあれゞじく戰ゞとり

むそび敵のためゝ欺かれて戰死をなすその餘の戰死病死の者もつとも其數多かりけるを秀吉公ハはるかゝ是を聞給ひて哀憐の情を起して早く飛脚を馳せて釜山浦の諸城を守る將士ハ先歸ることあるべからずその餘の輩ハことゝ〳〵く歸朝をなして休息すべしとて名古屋在陣の諸大名釜山浦在陣の諸將達ハよろこびの眉をひらきはじめて笑の顏色をなし大艦と順風ゝはしらせ逸馬ゝ輕をくれて早速ゝ相伴ひ伏見の新城ゝこそ聚りける

大明の兩使朝鮮へいたる事

茲年大明の朝廷ゝハ朝鮮國新經畧使孫鏞もまた惟敬等の盲の疑ひあるゝつき釜山浦ゝ人をつかハし行長等ゝ對せしめて言の虛實を考へ糺むるゝ行長が口上もまた聊か相違なきゝ付て此旨を相達すこれゝ依て大明の朝廷兵部の省より奏し請て遼東ゝとゞめ置たる小西が族（或ハ秀吉公の使或ハ行長の使と云）小西飛彈守如安（或ハ內藤と有）を大明の京ゝ入れこれを朝廷兵部省ゝむかへて二ケ條の相違疑しきことどもを詰り問ハしむ一ッゝハ但ゝ封を求めて貢と求めざる二ゝハ倭人一人なりとも釜山浦ゝとゞむべからざること三ゝハ永々朝鮮を侵し侮るべからざることゝ右の約束惟ならば望むところの封號と與んといふゝ小西飛彈守天と指て誓をなし請らくハ約束ゝ和隨んといふゝより遂ゝ此こと相定る石屋ハ元より沈惟敬が徒黨なれば小西飛彈守と待接すること甚だ丁

寧の情を盡して如安が意となぐさめけるかくて此議も定れゞ更ゑ沈惟敬ゑ令して小西飛彈守と伴ハしめ釜山浦小西行長が陣ゑ行しめ右の有増を宣諭せば小西ハ喜悅の眉を伸べいよ〳〵此事のならんやうのみ巧みけるさて大明より日本への使として李宗誠揚方亨の二人を上使副使と相定めて秀吉を日本國王ゑ封ぜよとの命あり先朝鮮の王城ゑ來り逗り和の兵將ことゝ〳〵渡海するを相窺ひその後より兩使ハ日本へ到るべしと相定めて今年ハむなしく朝鮮ゑ歳をおくりける

吉野の花見の事

斯ゑ豊臣秀吉公去年出來させ玉ふ若君秀頼と寵愛の御情日々ゑ深くあり玉ふまつゐてハ彌御代をゞこの君ゑ讓らんとのみ思召そのゆ心がけの外ハ更に他事もなかりける偖また朝鮮和睦の取さゞき沈惟敬石星等が身を入てはかるといへども日本と大明その間數千里の行程を隔てたるのみならず兩國の會盟ハ假初ならぬ大事とし萬代の記錄ゑとゞめてその耻をのこすこと少なからずとて朝鮮大明往返幾回かその沙汰を經て後大明の評定諸臣の奏を奉ることなれゞまとに多くの日と經ずして何ぞその事調ふべきと日本の評論もこゝに止りその間ハ諸老臣ゑ至るまで數年戰鬪の苦勞と初めて休むることゝろぞしたりける斯てこの春もそでゑ花の盛も近きゑわつて東山の地主の櫻西山の西行が庵室の花をはゑめとし醍醐雲林嵐山の風興少なからざる洛陽の詠めありとハ云ながら

古より名を稱ずる芳野の翠れ雲霞とわけて枝折れ道蹈見ざらんハ殘り多かることならんとて太閤こゝゑおひて春遊れ興を思召つけられて文祿三年甲午三月廿五日ゑ大坂のゆ城をゆ發駕あるべきゑ定めさせ玉ひけるすでゑ其日ゑなりぬれゞゆ供の近從より諸家の下々ゑ至るまで美とつくしたる衣服の飾りゑハ花よりさきに目を奪ハれこゝろときめく見物なりとて大坂の取沙汰すでゑ京洛ゑ聞ゆればその日限より二三日もまへより手引ともとめて通らせ玉ふべき道筋なる人の家居を借なぞするゆゑさしもゑひろき大坂堺の人家ゑ居餘り路邊街道の芝生まで在〻所々の田舍者ハ野宿をなして見物なとも實ゑ理なる行列なり秀吉公ハ例の付鬚ゑ眉つくらせ鉄醬黑なるハ似合ざる大臣の行裝と見へたりける急ぐとしもなけれども人跡馬蹄とゞまらねゞ同廿七日ゑハ紀州六田の橋とも過ぎ市の坂といへるところゑ至ってゆ駕の向ひを見給ふゑ少しく小高き岡野邊ゑあたって奇麗ゑ結構ゑたる新亭あり大閤これをゆ覽あり何者の造作ならんとゆ尋ありければ近從の人〻ハこれハ大和大納言秀俊のゆ待儲けの亭なりと答るゑ秀吉公ことゑゆ機嫌よろしくゆ駕をとゝめさせ給へゞ時の櫻膳のゆ儲けなんぞ美をつくしたるを意よく召されそれよりほどなく山中ゑ歩行をなされ千本の櫻花園櫻田ぬたの山おどゆ覽あり隱家れ松の絲ハ君が萬代のかハらぬ春ゑおらべてなんぞゝ左右の蜚ゆ機嫌のよろしかるべきやうに取つくろふゑ大閤ゆ當座をゆこゝろよく遊されけ

る

よしの山こずへの花のいろ〳〵よおぞろかれぬる雪の曙

と遊ばされけるを細川三位法印玄旨かぎりなくめて奉り

ぬ吉野やはなの深雪と降ぞげに老もなつまぬ木〻の下草

と洟挨拶をヤすゝろれよりの秀次公をはじめとし紹巴昌叱のともがらまで各〻詠歌をすゝめたりける當座題詠およろ數百首よ餘りてゞ聞えける秀吉公のそれより高野へ登山あり有馬れ温湯よ入らせ給ひその後大坂への歸城なされけるかくて今年も事おく年暮文祿四年よもなりよける

大明使釜山浦よ到る事

こゝよ大明宣宗皇帝萬曆廿三年の日本文祿四年よ相當つて同年四月よの去年より朝鮮よとゞまり居るところの日本正使李宗誠等の日本の兵將陣を解て朝鮮より已が本國よかへり去るやと見るところ今よ至りて猶釜山浦よ軍兵をとゞめて番手をきびしく相つとむるのよし聞えければ李宗誠等自ら漢城よ至りをきりよ使をつかはして日本の兵將のことゝく兵と捲き渡海せんことを催促して小西行長の方へ使をつかはすこと往來をきりよ引もきらす是よふゐて和の兵士をこめおきたる熊川の城の兵を引取り巨濟場門蘇津等の諸所の屯をも引拂うてもつて信を示すべきのことなりを

かしながら又彼平壤の時の如くよ欺かれんことの忍得がたしをかれば大明の使者たること僞りあきよふゐての早く日本の陣中よ入來つてその欺かざるのれもむきを示せをからば早速約の如くよして日本の諸勢の釜山浦よ在城の輩盡く渡海せしむべしといふよつき同八月よ揚方亨の大明へ此旨と述つかはせば乃ち兵部省より和軍の望みよまかせて先釜山よ入はやく其兵を朝鮮よとゝめしむべかゝずとあるよより揚方亨一人その意よをたがひ上使よ先立て釜山浦なる日本の陣營まで入來れりされども猶和兵の渡海の体あく延引して日を送り更よ上使の來らんとき同じく兵を撤て渡海せんと請により大明朝鮮の者共も同じく是を疑ひ異み多くのその變をも生ずへきかと恐れをなして再三大明の朝廷へこの議を窺ひたりければ兵部尚書の官石星もとより沈惟敬が言を信仰しおもふよ倭人の異情あきよ極り惟よ彼が意趣の却て此方を疑にあるなれば兎角朝鮮の騷動ををづめ日本の兵をも退け此方の兵戈とも撤去らしむるよすゞべからずそれよよつての李宗誠もまた速よ釜山よ至つて和將の意を安するのの及べからずと宗誠が方へをれば〳〵去〻んことを催促せり大明の朝議その論さま〳〵よして人〻の奏するところ其異議多しと雖も石星大よ憤り我これとゝ誤るよ於ての此身をもつて如何なふん罪科とも受くべしをかる上の他の論の無益たるべしと云へるよぞ朝論一に定つて同九月李宗成もまた釜山よの至りける

豊臣秀次生害の事

偖も關白豊臣秀次公いまさゝ秀吉公の甥として重ねてこれを養子となし關白職まで讓ふせ給ひ遂ゝ天下の政道をも去りぬへきその人たれど平生の行跡曾て人君の表議たるべき任ゝわちず畫ゝ山野ゝ人夫と騙り立鹿と遐應を放つて從臣の困勞をかゝしむ意なく或ゝ寺社神佛の冥感をおそれ憚るべき禮義とゝだり禁制ある法度れ地と雖ども自ら是を破りて川ゝ魚をとつて寺門僧房の庫やと汚し林ゝ鳥を殺して佛神急愛の殺生を破り夜ゝ酒宴ゝ曉を嫌ゝず淫亂不道の有さま朝ゝ渉る鄙を斬の惡行ゝならつてゝ盲目の腕を絶てゝ殺生關白の惡名と喚れあるひゝ賢臣の胸と割るの類あゝねど妊身女を殺してその孕兒の血まびれあると出してよろこび笑が如きの狂惡至極のことゝ至れば人〻これを畏れ惡んで此人若天下の政道を去るゝ至らば日本の人種ゝあるべからずなんど、私言あへるを何となく大閤の耳ゝも入たりけるゝ秀吉公の心こゝろゝも前々とゝことかゝりて秀頼公の出來させ給へる後ゝ兼て彼代をば此若君ゝこそ讓り給ゝんと思召折からゝ此惡行の耳ゝ入しより日ゝ增て秀次を疎きものゝ思召すその下こゝろ自ら秀次公の心意ゝも折ふしの事業ゝ通じければ是もまた大閤へ不足れ恨みと含ませらるゝを誰言出るとなけれども文祿四年秋七月三日秀次謀反の事あるゝ付て此旨急度ゝ詮鑒あるべきとて增田右衛門石田治部少輔富田左近玄以法印を使節とし事の子細と尋ね問せらる秀次公ゝこれゝ答へとろきてさま〻〻ゝ陳去玉ふといへども諸大將ゝ仰せて誓紙とかゝせ太閤百歳の後ゝ何ごとゝつけても秀次の下知ゝ相そむくべからずとの趣を認めて取玉ふまた近習の士ゝゝ大小ゝよらずこれまた誓紙を書せらる惣して秀次の命ゝおゐてゝ湯火をさけず下知ゝきたがひ働くべきの趣きたり是等と不審のはじめとして去なゝれ異議あれば今ゝ陳するゝ辞あきゝ極り自ら伏見ゝ往玉へてさりとても謀反の意ゝゝなけれども事の跡似たるとの心紀明是非ゝ及ざる事ながら天地ゝ哲つていさゝかもかゝるおもびゝこれなきなんど嗟歎し給ふといへども太閤もとより心承引なくしてゝ憤り深けれゝ此上ゝ是非ゝ及ゝずとて近從扈從幾ゝ十人ばかりを召具して高野山へ登り玉へける同月十五日福島左衛門太夫福原右馬助池田伊豫守三人を檢使として秀次へ生害の事と仰せ出さるまとゝ秀次その行正からず其上に秀頼公誕生のある後ゝ自〻我位を退き秀頼と世ゝ立て却てこれが後見たらんとあるならば生涯安樂ゝ地とも得玉ふべきを其意の付ざるゝ最もその身の行ひよからぬこゝろざしより起れる愚痴の至りかなとこゝろある輩ゝまたしき中の物がたり其ころの取沙汰ゝとこの外ゝなりける木村常陸介熊谷大膳亮がともがら秀次ゝ惡事をそゝめたる者どもまでこと〻〻切腹と仰付られ其跡と亡し玉ひしとなり

李宗誠逃亡する事

李宗誠ハすでヨ釜山ヨ至りて行長が方へ早々人數ヒ渡海せしむべし云からバ我々もまた日本ヨ趣くべしと云おくれども小西ハこれヨ出合ずかへりて言を演て曰く我等早速ヨ參會して大明の正使ヨ相見ゆべきことなれども云かしながゝ先立て日本ヨ馳せかへり關白へ今一度事のやうを窺ひ關白の與奪を歴てさてそは使をば迎へやとべけれとてその年内ゐ行長ハ日本へ渡海して何の委曲も辨ぜざれバ大明の両使ハ今年もまた釜山海ヨて年の内をバ暮しける明れば丙申の年日本の天子ハ後陽成院のは字文祿五年ヨ改元あり慶長元年と稱しける(今年閏七月大地震あり依之十月改元)正月の末ヨ至れバ行長はじめて朝鮮ヨかへり來るといへども兵を撤るの儀ヨおゐてハ明白ヨこれを語らず此時ヨ惟敬大明の二使をば朝鮮ヨとめ置自已一人行長ヨ和伴ひ先だつて日本に渡海し僞りて云やう我日本ふ渡りて大明の使者を迎るヨつゐヨ萬事盲合せの爲なりと稱そといへどもその實ハ嘗てこれをはかり知るの人ハあし是より先立て二百七十疋の良馬を買とゝのへ日本近き島の内ヨつかハして密ヨこれを飼やしあふ是と秀吉公ヨ獻じてひそかヨ賄賂を入んがためなりと云られたりとでヨ惟敬ハ船ヨ登るヨ至つて錦の衣を飾り一ッれ大旗をたて調二哉両國一をの四字ともつて書記しこれを船の頂ヨ懸らせて行たりける其後何の沙汰なく打過けるが今又行長が還るヨ伴なつて釜山浦に歸參せり両人ハすでヨ三浪江といへるところまで至つて行長ヨ和見し日本の兵卒をすてさせろの後二使とともヨ日本ヨ渡海せんといへども行長來つて相見へずまた顯ヨ兵を撤んとも云ずされバこの旨云さりヨ石星が方へ訴るヨより石星ハこれを憂として惟敬が方へ使をつかハし直ヨ對して問云むるヨ封事の議相違あき旨を云通ずるをもつて石司馬ハ安堵しゝりける今度大明國より日本使をして來れるところの李宗誠といへる者ハ彼が先祖ハ明の大祖の國を草創し給へるとき第一の功臣たる李文忠といへる者の子孫なれば先祖の功の高きヨより今ヨ到りて封と受爵を襲る富貴の家の生あればその意常ヨ安樂ヨなれ優美ヨして意ヨ勇のなき物えこの度李宗誠が日本への使者ヨ撰ばれて出る時その行粧もつとも美麗を盡し奴僕車馬ハいたるまで花やかなりし出立なり宗誠がすぐるところの道筋明より朝鮮ヨ至るまで路頭ゐ棧輔をかまへ野外ヨ幔幕をうちつらねて見物の群集市となせるを惟敬ハこれを羨み且また大ヨ恨みておもひけるハそれ日本と和親をなすのはじめより意を勞して議をなす者我ならずして誰かなすべきやまことヨ他人の能そべきことおもひもよらざることなり云うるに今副使の命だヨ蒙らず唯ヨ日本への導引のためとて行こと我豈これが本意ならんやとて大ヨ憤りける宗誠ハもとより貴人のことなれば年いまだわかく壯なり常に惟敬を侮り惟啓ハ又宗敬がいまだ世間のことヨなれず他國への使者として應對の禮法

も熟せざる少年あるをもつて却てこれを輕んずれど互よその中惡かりけり惟敬ひろかよ一ッの謀をかまへて或人をもつて餘所のやうよ宗誠よ云しめて彼がこゝろと恐れしむ我傳あつて承るよ日本の關白實よ大明の封爵を受るよこゝろになけれとも正よ卿の族と日本へあざむき呼むかひて各〻彼國よ拘囚おき長く困しめ辱をめんれ意なりと憤懣らしう告玄むれば宗誠これを聞くより大いよ恐懼のこゝろを生じ斯ていもはやろないじとやおもひけんある夜ひそかよ衣服をかへ身しき者の容となり已が取たる陣營をば家の奴僕よも深く隱し荷物のことに云よ及ばずまとよ第一の大切ある天子より玉にうたる使節れしるしの旗までをも打捨て逃はしる翌朝よ至つて日本の陣營よ此事とゑらする者ありければ偖に大明朝鮮の異議あればこそ約をろむき正使れこゝに逃て我々を欺きたらんよにゆるすべき者よあらずと跡をしたふて追かけれども遂よこれとば取失ふされども副使揚方亨少しもおぞろく氣色あく元の如くに自分の陣營とり守つて倭人の中よとゞまり行長が方へ言を通玄少しも上朝廷の異變ある事よあらず唯宗誠か懦弱なる意より懼れて如此の形勢なりとこれを撫てしづめまた朝鮮へも移文と廻しすこしも驚動すべからずと觸たるよりさてぞ騷ぎになかりける

大明使日本よ渡海の事

宗誠に其よりも敢て大路よ出ずしてかくれて山谷よ入り多くの艱難一身の身とくるしめその間食を絶こと數日あるが慶州の地を玄のびやうやくよ朝鮮の都城よ逃來り李昭の方へもその沙汰なく直よ西よ往去りて大明の地よ入りけり此時よ當つて日本勢の道路用心よかまへ置たる西生浦竹島等の屯ども捨て今唯殘したるところに釜山浦よあるところに四營のみあり維敬にすでよ宗誠とばおもふまゝの圖よ陷れたれば一人笑の顏色をばなし人しれず悅びけるよ揚方亨にまた我一人よして戰鬪なかばなる兩國の間よ指はさまつて如何でか此和議を首尾よく相調ふべき安からざるの事かおと晝夜よこれを憂ひ思ひける一日惟敬よ參會し此ことを如何あるべきやと一向よ詫なげく惟敬にこれよ大言して夫人の臣となり君よ此身を任する者ことの危難よのぞむとて憂ひおげくことあるんや事叶なにざる期よ至りて身をすつるの外よ於て何のためよか大丈夫の身をとろすがかなしきとて涕をながすよ至らんやと大よ是を辱しむれば方亨涕を拭ひおがら我もまた備の言と思にざるよにあらねども七十よ餘れる母あり十歳よ足ざるの子あるゆよつてなりとてまた泣にまとよ一命の惜さのまゝこれを母子にかこつけれども幼子にもとより自己の私よして是を公よあぐるよたらす母にまた人倫の疎かあらぬところあれど孝と忠との二ッおがふ全く立ざる理をゑらずんば士といふべからずさしも大國の使として敵國よおもむく身の已をすてゝ君命を辱しめざる理り

を云らざることの可笑やとこゝろある輩ハ聞人これを笑ひけり時ニ惟敬ハ方亭ニむかひまことニ
倆か言如く恩愛の道のあハれなり誰かハ是と云らざらん故郷ニかへ〻んことを欲せバ其もまた難
きニあらずと點頭てこゝろやすげゐ語りけるを揚方亭ハ大ニ妄堵し思ふやう惟敬ハ常ニ日本ゐ因
み日本の手よりよき者なれハ兎ニ角ニ此度の一議ニおゐてハ彼ニよろむきて悪かりあんとそれより
ハ心身を彼ニまかせて惟敬が志ニ打云たがひ懇ニならんことを欲するニ惟敬ある時打笑ひ卿達古
卿にかへらんことと實ニ欲せば只何ごとも已が挨拶するニまかせて異變することあるべからずと
口かたむるニ方亭ハ何事かあると云議ハ云〻ねども兎角ニ惟敬ニ背きてハ悪かりなんとゐもふゆ
ゑ尤と承合てそれよりハ万端ハ惟敬が意ニ任せけり方亭ハ猶も惟敬が機嫌をとらんと今度宗誠
逃れ走るとて殘置たる金銀錢米酒器寶帛ミな〳〵惟敬ニこれをまかせ其入用ニゑたがつて心次第
ニ費すべしと打わたし其上ニ石司馬が方へ使者ヶ立て曾より日本の和する情對爵を望むゐ相
違ゐし偏ニ宗誠が未練の体國の辱を殘すニ似たり沈惟敬が器量有此度れ任ニあたるニ覺策なき働
きゐしさま〳〵ニ嘆たりければ石司馬もとより荷擔ある男なれバ大ニ悅び奏疏を云たゝめ揚方亭
を證據ニ立て沈惟敬と推舉し宗誠が逃げうせたる其跡のかハりとして揚方亭ニ日本正使のことを
兼しめ沈惟敬をバ重ねて神機三營添註遊擊將軍ニ任じ日本副使の職を兼しめて日本の使ヶつとめ

さするニ維啓ハすでニ大明皇帝の命ヶ拜し副使とあつてハその望ミ足りぬとハ見えながら猶いま
だ海邊ニ遲滯りて渡海を延引するニよりて石司馬これニ意をはこび維敬がもとむる望みニまかせ
項汝變といへる者を使ヶし白銀二萬両ハ維敬が東行の用ニ備へ且また惟敬が家の賄ひゆたかニ是
ヶ調へ辨じ石司馬が夫人の方より維敬が妻の飲食時々ニ遣りもてなし維敬がはやく海渡をなして
和議の成就せんことを催促するニ今年丙申の六月十五日揚方亭沈維敬なゝびニ從者四百餘人の人
數ニて日本國へ渡海なしたりける行長等もつゞめて出船を促がして歸帆を順風ニまかせけるが同
八月十八日ゐハ大明國の両使ハすでニ和泉の國境まで着ニけり此時朝鮮ニハはじめより此度の和
議れことハ成就すべからざる端を察したりける故使者を日本ニ來らしむべからざるの量見なれど
も沈惟敬が是非ともこれを責め求めて自已が姪の沈懋時を王城までつかハし此ことヶ強ると雖
も李昭かへつてこれゝを肯ひ給ハず沈懋時更ニ請て云若此事の故ヶもつて大明の封事まで首尾ニ
うらざる議ニ及バゝ如何とかなし給ふべきなんどゝ朝鮮使の辭退をすると叶ハぬやうゐ言をかまへ
て望める故朝鮮王もせんかたなく卽ち武臣李逢春等をもつて是ニ云たがつて跟隨の陪臣ヶ稱ぜし
む時ニ諸臣の評議ゐおもひらく武人をもつて彼中ニあらしめバ若過ちて失そることの多ゝうんか
文人の事の道理ニなれたらんものゝよろしかるべきうと奏するニ依り折ふし黄愼が沈惟敬の爲れ

れ馳走人として倭の陣營に在けるを指添てこそ遣しける

大明の両使日本に到着の事

今歳文祿五年丙申に改元して慶長元年と號しける同年七月十二日洛陽大に地震ひ日を經て猶やまず大厦高堂を傾け覆し處々の城壘石垣等と崩すことおびたゞし其外諸國に土風吹き田畠を荒せこと其數幾計といふ數をしらず或い天より毛をふらし雨をふらすなんどさま〳〵の怪異多かりしが故により改元あると云ふれたり同く九月二日い大明國よりの冊使等同く朝鮮の両使ともに既に攝津國境の濱に着船するよしを聞召て大によろこび速に大坂堺其外の近郷の在々所々に觸を回し牛猪鷄魚の類を集めこれを明使の厨やに納てさま〳〵に馳走なさしめ五六日の其間い使節の旅懐をおぐさましめ偖ろの後に伏見の城に參るべき旨あれど斯て同月廿九日伏見に來る兼て道〳〵れ警固辻がための儀仰出されければ一手〳〵の足輕ども一樣に相印をつけて大坂より伏見の道中その莊と繕ふ近國の僧俗士民に至るまで今度大明より來つて大閤へ官位をすゝめ申す使者を見物せよと其わけ知るも云ふざるも路の両邊に列をなして並居たる其人數何万といへる數云れず日本國のかくまでに人おふゝして豊なる大明朝鮮もろともに使者いこれに目をおどろかす両國の使人どもゝ今日を晴と威儀を調ひさらびやかなる事どもなり大明の冊使を初めとし各〳〵輅に乘つゞけ道〳〵樂を奏して吹ものを吹あぐれば太鼓や鉦をなゝして清廉節鞠を取る馬上の士い先と拂つてすゝみ行すでに伏見の旅館に着ば役にあたれる諸大名その奔走れ儀式を盡して取賄ふ其翌日い大閤よりも使者あつゝ遠路の長途なる海陸ろの功あることを稱し給ひ且また朝鮮國の使にい王子自ら來り到つて其擒獲を許されたる二禮とも謝すべきことなるに倍臣をもつて中すこと此等無禮の第一たりこれによつて大明の使とい同く相見いかなふまじと怒り最も甚しきのおもむきを急度こゝに演傳ふるに朝鮮の両使大に恐怖し沈維啓小西行長等に賴みさま〳〵と詫言し其過りを陳ずれども大閤つゐに對面をば許し給いず九月二日にい方亭維啓の両使れみ伏見の城に登りたりそれ時の儀式にい方亭前にすゝめば維敬金印と捧げて階下に立ぢらくあつて殿上の黄なる帷と開きかゝくれば秀吉い近從の臣二人清げなる若士に麗しき裝束云たるに太刀かたなと取持てその左右に並み居たり大老五奉行其外並居る諸大名御出座の体を望み見るより各々頭を地に下して謦顙そるに維啓深く懼れをなし金印を持ながら個匐して見苦しき卑禮をなす方亭もまた兎角に維啓がするところの異似をして懼れ慓くばかりなり大閤い言葉をかけて勞困なりとのたまへど已を叱り給ふぞとこゝろ得て冊使い彌身体やすらず見へたるに行長時にすゝみ出て天朝正に禮を行ふの時なれば謹で事をなし給ふべしと警め惟敬いときに金印とすゝめ王に封ずるの冕冠袞龍の衣を捧げ

奉る其外日本の諸將よ與ふるところの衣冠五十餘具と授けて是と服せらるべしと申せよ大明よて裁め來る服飾ハ纔よ三十余具なると今や日本よ至り來りて見れば諸侯大夫の數多きよおどろき俄よ相とゝなふべきやうの無まゝよ冊使の着用のため持る衣服までを調ひそろひて進めけるとハ聞えけり斯て冊使の對面こと畢りて今日ハ一先旅館よ立ちへれりそれより押付秀吉公の命として珍肴美酒の數々盡し両使の旅館よおくられてゆ馳走の体大方あらず聞へけり

大明使纓應の事

明くれば同月三日秀吉公ハ今日大明の冊使を纓應あるべきよし兼て早曉より各々大小國の守護人ハ云よおよばず上下れ諸士役人の輩まで庭上よ列り立つ上壇の中央よ秀吉公の座と飾る時よ秀吉公ハ日本の威儀を明人よかゝやかさんと思召すがためとし赤裝束を着し唐冠をいたゝきて大座玄給へば大明の冊使い中壇の右の方よ座したり德川公利家等れ七人其左の方よ座列あるみな大明より贈れるところの冠服たり其余の大名南の縁よ座を玄むれば諸大名以下ハみあ〳〵廊下ゟ充滿せり膳部の玄たていみな大明の禮法よ從つて膳の高さ三尺廣さい五尺四方なり盛るに牛羊雞魚と用ひ金銀を鏤めたる飾りをあしその上よハ花草をもつて粧へり參議以下侍從以上の少年なる諸侯達華麗の出立かいつくろふて羹をすゝめ酒を酌む秀吉公い九献れ禮盃冊使よ是をすゝめ給へば冊使ハ拜して酒を酬ひ御盃もすでよ畢りぬれど乃ち猿樂の能を促す笛の音寥亮よひゝき鼓の聲また嘈雜と起るよ両人ハ是を驚き見る時よ太鼓を打てるもれ指先より血を流し聲を揚て喚び叫ふと見るより両使ハ色と變して驚き潜よ語るよ是猿樂と云ものなりと聞て大笑をなしたりける已よ猿樂も終りければ冊使もまた今日のかたじけなきことを拜して旅宅よとそハかへりけれ

太閤大明の冊使を怒り給ふ事

秀吉公ハ花島の山莊よおゐて禪僧承兌靈三永哲を召れて大明の詔書と讀しめらる時よ行長ひそかよ承兌よ告て曰く秀吉公もし大明よりの勅命を問ひ尋ね給ふならば大よ怒り給ハんこと最もこれ疑ひなき所なり然れば却て國家の騒動となり萬民の歎きとなれば兎よも角よも事靜謐よ治らんとと旨をして各文辞れ悪きところハ能やうよ是と變じて讀給へと亭寧よこれを告れども承兌聊も敢ハず両國の會盟よ臨んで文を變じ禮を曲るの儀よおゐてハ文章の上よ於て少しおりともこれを訣ふなんぞと云こと曾てもつておきとなりとて秀吉公の前よおゐて遂よこれをとり有のまゝよ是を讀よ秀吉公是を聞給ひ行長が案ゐたがハず目を怒らし大音よ呼ハつて明主何ぞ我を封じて日本國王とする事と得へけんや誠よもつて推參なる云ごとや我自らの武畧と以て日本の主となる何ぞ彼等が力よよらん前日行長が大明より我を封じて大明國王となすと云りこのゆゑよとそ我これ

と信じて朝鮮の軍をなうへしたり行長が我を欺けること惡き奴の仕方かなゝかのゝあらず行長本朝より有なかゝ大明より志を通ずること其罪恭て云べからず速より行長を呼來れ我自ら手討よして其首を切て我腹をやすんぜんぞとて即ち大明よりおくれるところの冠服どこと〳〵く解すて大明よりの書翰をも引ささて捨させ給ひ其怒氣甚だ盛んなり行長大より懼戰々恐々手の舞足の踏ところと云らず如何なる目にかあはんとおもへとも召といふよ參らでゝ叶ゝぬ事ゆゑ急ぎ登城し秀吉公の御前より出たりける大閤ゝ行長と見るより両眼を大より見ひらきます〳〵怒りて責給ふその御聲居問天井よひゞきてさあがら雷のおちかゝるが如し行長つゝゝんで對て曰く我これを私より謀るよあらず三奉行の旨をうけこと〳〵くこれを決したるところありとて數通の書狀を取出しもつてその證據となしたりける是よりて秀吉公憤りを少しくおさへ給ひける行長ゝわづかよ虎口れ難を遁れて秀吉公の御前と退出し溜息ゐつとつきたればさても危き事かなと聞者胴をひやしける

大明の使者を追立る事

秀吉公ゝ大明の封書の相違ある事を憤り其怒り靜まゝねゞ早速より清正石田大谷の輩を召れて曰く大明より使をさし越て我を封ずるの仕方よおゐて甚だこゝろよ滿ずといへども云かれども先云ゞらくこれを堪忍せり云かしながゝ朝鮮の和を求る者ゝ決してこれと許さず冊使も久しくこれを留むべかゝず明朝早朝より追立て和泉の堺まで追ずべし我まさよ再び兵を起して朝鮮の奴原一人ものこらず切殺そべしと仰せあれゞ三奉行の者ども大閤の命を畏りまかり立て早々より下知となし翌日より至つて楊方亭沉惟敬等を追立て和泉の堺へつかいしける秀吉公の憤怒かくても猶やまざりけれゞ朝鮮の両使をとらへて是を殺さんとなし給ふと時より承兌靈三永哲の三人云きりより諫めてこれをとゞむがゆゑをもつてやう〳〵より怒りを押へて靜り給ひけるその後ゝ加藤清正を始めとしその外西國筋の諸將をあつめ重ねて朝鮮を攻撃べきの期日と定めて屢軍事を論じ給ひける方亭惟敬の両人ゝ取ものも取あへず堺の津まで追やられ二人相討りて云やう我ともがら使を万里の外より奉じ來りその回翰とも取らずして無本意國よかへらんこと何の面目あつてか人ゐ面を向ふべしと泉の堺より滯ることと數日より及んで相談すれども何の益なきことなれゞ朝鮮の両使黄愼朴弘長とともより打つれ泉の堺の濱まで出たりける時より両國の使者どもゝ一所より集り議して云ふ我ともがら大明朝鮮よかへるの後此事を明かよこれを告べきなり若このとゝ押かくして奏せずんゝ我國と過るゞし若またこれと早速よあらゝしあゞ惟敬が罪をはじめとー其難つゐより遁れざる所なりと千万こゝろを碎きても克き分別ゝ出ざりけり

秀吉公再び朝鮮を伐んと欲せる事

秀吉公早く諸國の大將ゝ命令を下し加藤清正小西行長ハさきの如くゝ朝鮮國重ねての先陣を相勸むべし偖また中國九州の諸軍ハこと〳〵く渡海して今度ハ三韓の城地ゝて日本ゝ歐する程の者あらバ一人も免さず殺戮そべし東國北國幾内の士卒ハ人歩を引連伏見の城を改め築くべしとのぼ下知ある是ぞ先だつての大地震ゝ所々多く破壞ゝ及べる故なり一方ゝハ軍旅の勞を愁ひとし一方ゝハ土木の工みと起して諸國の困窮ゝ至ゝん事と苦めりまとゝ一時兩道日本の國民の大なる恨となるハよしなかりける事どもあり秀吉公つく〳〵とおもひ付ゝるゝに大明國の冊使の徒ゝかへゝんとを憐み給ひ柳川豊前守ゝ仰付られ金銀雜物等冊使ゝ賜りたりけるゝ調信ハひそかゝ黃信に語て曰く來年朝鮮征伐の事すでゝ定りぬ汝等國ゝかへるの後かゝらず王子をして來り謝禮と伸ずんばあるべからずと敎へたるを黃愼大ゝおそれて二人の冊使ゝこれを告れバ楊方亭ハこれと大ゝおどろくといへども維敬ハなをもこれと信とせずして大膽ゝかまへけりすでゝ兩使ハ肥前の國まで至りて順風を待けるほど數日と歷るゝ加藤清正ハ肥後に來り黑田長政ハ豊前ゝかへりて軍兵をあつめ軍粮を調へて渡海の資を催促するゆゑ在々所々湊泊りゝ至るまで只此沙汰ゝて騷動するを方亭等ハ聞くよりも大ゝ色を失ひて維敬ゝこれを語りて歎くを維敬ハ少しも騷げる氣色なく我若死ずバ和親もまた成べく何ぞおどろくことゝあらんと云けるこそ不敵ものとハ見へたりけり

大明使歸國の事

ろゝりしところへ寺澤志摩守正成ハ秀吉公の書を持參して大明の兩使ゝこれと示せり二人の者ハおもひらく定めてこれハ大閤の怒りの情と改めて大明皇帝へ恩を謝そるの表なるべきかとひらきて諦見れバ思の外ゝ相違して朝鮮王と責るところの三ッの罪を擧げたりその文はなはだ倨りたるが其趣むきゝ曰く先年朝鮮の使者來つて悉くその情を述ぶといへども大明のことに於てハかたく是を秘して云ハず其罪一ッなり我すでゝ沈維敬が乞ところをもつての故ゝ兩王子以下の擒ども をも盡くこれとかへしたり去かれども未だそゝやかゝ來り謝そることをもせず漸く大明の冊使の渡海そるを待て延引ゝ及ぶが上ゝ王子をバ猶來らしめず唯ゝ黃朴等の賤人をのゝ遣せる其罪二ッなり大明と日本の和交なして大明使の渡海までゝあ朝鮮の反覆ゝよつてその事最も遲々ゝおよべるその罪三ッなり此事曾より免許すべからざるの第一なりと書ふくるゝ朝鮮王李昭ハ是を得て大ゝおどろき少しも此趣を隱さず別ゝ一通を書寫してこれを大明ゝ遣し急ゝ援兵を賜ハんことを乞たりける揚方亭沈惟敬朝鮮へかへる時朝鮮京幾道の都体察使李元翼ハ大閤の再び大兵を促しけるよしを聞より兵を聚めて防戰の術をなすところゝ方亭惟敬がかへり來るに逢ふて重ねて委曲のことを問審かゝし其樣子を察し元翼ハすみやかゝ釜山の城ゝ留りて居けるところの日本勢いま

だ後勢の多く集らぬ内よ急ぎこれを攻落して釜山の地と清くして堅固の防守の便をなすべしといへば惟啓ハこれを制しとゞめ事なゝバ固よ善なるべけれと云かれとも日本人ハ武勇最もすぐれたれバそれ混りよハ勝がたからんか若其初めよ於て味方ハ戰ひ利を失ふときハ後の禍ひます〳〵起らん卿ぢ深く計畧とおもひ回らせといふよ元翼これよ心迷ふて軍と出せることをなさず大明の冊使釜山よ着せるハ同年十二月十七日なり同廿五日釜山を立て浹川よ至り元翼よ參會しそれより途をとつて明の萬歴廿五年酉二月十六日よ關中に入たりける惟敬ハ他人の已と笑ひ毀らんことと愁ひて僞りて云けるハ大閤ハ天恩れかたじけなきことを拜して晩冠を戴き磬首して天恩を謝せしあと丶さま〳〵事をよきやうよこしらへて云たりけるがまた大閤より大明へ送り物のあきを疾んでまいなひを潛よ小西が方へ施し小西を頼みてしあ〳〵の者を調へたり猩々毡天鵞絨ならびよ金作りの器血三十余臺と得ろの箱の上よ云るして日本國王豊臣秀吉餽りおくれるところれ什物ありといふに明人どもこれと見るよ大よ笑ひ猩々毡天鵞絨ハ南蠻の土産よして日本より出せる物よあらず尤も腹とかゝへて笑ふべきことと第一なるかなと口々よ毀れとも明主ハこれを罪し給ハず左あらぬ体よて内府よこそ受納を給ひけれ石星一人ハこれを信とそれとも秀吉公の方より大使へ辱さよしを謝そるの一封肅のなきをもつての故よ人〳〵疑ひ彌ましける惟啓ハ是を如何とも今更すべきやう無りしかバ心をなやまし眉をあつめて是を憂ふる外ハなし

朝鮮渡海の人數揃の事

偖も文祿元年壬辰より慶長元年丙申よ至るまで年月既よ五年の間日本と大使朝鮮の三國の會盟を正そべきの約束一且よして事遂ざれバ大閤再び大兵を起し朝鮮國の王子日本よ入て謝せざるの罪と正し直よ大明まで押入るべきの支度として九州中國四國の勢と〻伏見の城の普請のための人歩とも當られず〻な〳〵本國へ免し回されひとへよ軍事れ用意のみなりけるまた伏見よハさしもの大勢あつまりて結搆をたる城郭を地震のためよ擊崩されたると今度山上の高きところよ引上明る正月より一日も人歩の休息をも免さず責促し晝夜の隔もなく是と急げハ人民れ困窮國家の費これさへ大方ならざるよ再び朝鮮よ兵を出し異域よ武事を勞するハ抑何事の量見ぞこれをおもふよ唐日本の魔生どもが兩國の地と騷動させ一朝のなぐさミよせんとおもふあるべしそも何處の杉原が寄集りて工夫ところぞや何れ天狗が神通よて今こゝ〻に秀吉公と變じたるも云るべからずとつふやき恐れぬ者もなし明れバ同く二年丁酉二月のはじめゟ至りて秀吉公ハ諸大將よ令を下して云やう朝鮮征伐の前陣ハ前々の通り清正行長圖ととりて隔日よこれを勤むべし其前鋒たらざる非番の日ハ二陣よ備を押すべきあり三陣ハ黑田長政毛利壹岐守高橋九郎秋月三郎相良宮内大輔伊東民

部大輔四陣ハ鍋島加賀守同息信濃守勝茂五陣ハ津島薩摩守六陣ハ長曾我部元親池田伊豫守藤堂佐渡守高虎中川修理太夫加藤左馬助嘉明菅平右衛門七陣ハ蜂須賀阿波守家政生駒讃岐守脇坂中務少輔安治八陣ハ備前中納言浮田秀家安藝宰相秀元これを勤むべし偖又釜山浦城ハ筑前中納言豊臣秀秋之を守て太田小源五城中れ事をバ掌り治むべし安骨浦の城ハ立花左近將監宗茂これを守るべし加德城よハ高橋主膳正筑紫上野介これを守るべし竹島城ハ久留米秀包これを守るべし西生浦の城ハ淺野左京太夫幸長これを守るべし我今毛利豊後守竹中源助垣見和泉守毛利民部大輔早川主馬頭熊谷内藏允と朝鮮よ遣して目付とす諸將の戰功の善惡强弱よりすべて何事をも見ること聞ことよおゐてこれを隱さず親族朋友といへども聊か贔負すべからず是非ともよ其事實を糺して告報ずべし舟師ハ藤堂高虎加藤嘉明脇坂安治これを目付として四國の兵をもつて其援となすべし凡その物軍書紙をもつて互よ志を和睦し功を爭ひ我慢と起し相惡むの意あるおとなかれ大明若大軍を出し來つて朝鮮れ王城をさること五六日程よして屯をなすならバ速よ告け達すべし我必ず一騎よて驅け出し渡海をはやめてこと〳〵くまれと平け直よ馬と大明國よ進めんこと我掌を運らすの間よあらんとぞ下知せられける

朝鮮再び騒動の事

こゝよ加藤主計頭清正ハ船と發して朝鮮よ渡海せんとて一部の組手の大將豊臣茂守等を相伴あつて兵船二百餘艘と揃へ正月中旬よ順風なれバ帆を走らせ數日を經ずして朝鮮よ當着す竹島の古城よ去年より殘し置たる兵士を一所に合せ機張よ到りて陣を取それより梁山と攻め守將兵士と追出しまた西生浦よ至り城れ邊村を周り見て所々よ高札と立させて朝鮮の人民よ示して曰く日本國の加藤主計頭清正大閤殿下の命を受け今再び朝鮮よ渡海せり此地の人民かならず正札のおもむきを見て少しも疑がハず恐怖することなかるべし故よ先よ我臣金太夫を遣してもつて此旨を告げ示すとぞ書たりける程なく加藤小西が兵船釜山浦よつきしかバ行長ハ釜山浦外より船をすゝめて豆毛浦よ着船すれば先釜山の舊營を改め築てこゝよハ筑前中納言秀秋をもつて城主となし置それより また諸所よ城郭と搆ひ朝鮮よ久しく留るの計をなし四方よ人を馳賚と多く朝鮮の人步よあたへて材木を取集め城地の普請何れも丈夫れ支度なりまた粮米ハたへずこれを運漕せしめて城ごとよこれを分ちて後軍の到着をころ待たりけれ朝鮮の人民日本の大軍ふたゝび至ると聞よりすでよ和議の調ひたると云よつゐて稍くよ安堵のおもひをゐし山谷よ逃かくれて居たる男女どもハこの頃元れ家よかへり住して少しく人居となさんとするよ再び日本れ大軍至り來るやとれどろき立て荷物をはこび老若を引つれて我身の用心計をなして隱れ家ともとめて騒動せり釜山より王城までの道

筋に數年の大亂よ逢亂防せられしところなれば今よおゐて全く人の住する所なし全羅の地方に兵火をばまぬかれたれども城々もおほかたに明退て數年の間明城よなり修理を加ふる事もなく青田變じて岡となり坊舍店市も兵火のためよ燒失して空しく草莽狐狸の栖となり凄雨瀟々燐火飄然として腥風を誘ふ哀を告る遠寺の鐘も幽よ山中よびゝく浩る折から又々日本の大軍至ると聞て驚き慌て戰々競々として手の舞足の踏ところを知らず王城よても文武れ官人と評議をなすと云ども區々よして一決せず元より臆病神の付たる者れ多くして李昭もまた先年の戰ひよ懲はて丶早く后妃や王子達を透引して急よ海州へ落行給んとそるの支度のみあり從ふところの大臣もまたみな遽てさに丶き王城を去て遠き田舍の山奥へ勝手〳〵の傳と求めて妻子眷屬と引連て隱れんとするよ自らの私を營む者のみ多くして國家のため身を忘るゝの族に少あかりける朝鮮再び大よ乱れたれば頻りに飛馬を大明よ馳て日本の軍兵百万よて押來り人數を分ち凡て十三烈となし大明と直よ打破り大閤もまた名護屋よあり自ら諸軍の成敗を掌りて押付て渡海の沙汰ありと承る早速追討の大將を給るゝしと人と馳て急よ告るよ村々里々朝鮮より大明の都までその道筋よあたるの人馬村長一時も安座する隙になりける

元均李舜臣を譏そる事

こゝよ朝鮮水軍の大將元均に同水軍統制使李舜臣が來り救へるともつて先年日本の兵船と戰ふて大よ利と得るゆゑその志大いよこれとよろこびしが何ぞのほどよ互よ功を爭そつて次第よその中あしくあり行ける元均がその心甚ださかしく巧みの多き者なりけれゞ朝鮮の朝廷内外の臣よ賂ひて黨を結びて贔負をこしらへ何卒して舜臣が身よおゐばへなきこと迄もこしらひ惡さまよ云なし讒をかまへて殺さんとおもひ立こそうたてけれゝる折節今度小西行長に慶尙右兵使金應瑞が陣中よ間者と入て云せけるに今度の和事の成らざることに清正と行長との中よかゝざる故よよりて大閤へさま〳〵惡事を進めしゆゑよさてぞかくに破れしなりこれよよつて我行長最もこれを惡みおもふてその恨みふかきところたりそれよつゐて當月幾許の日よ當つて清正渡海し朝鮮よ着岸すゝきなりされゞ朝鮮の兵士と見るよ其業船軍になれたり若朝鮮の軍船どそゝめて戰ひたらんよに勝ずといふことあるべからずといに云めたり應瑞早速その聞ける通りの言のまゝよ朝鮮の臣下共これを議し行長が告るところ最も僞りあるゝからず是に定めて實事ならんと信ずるが中よも海平君尹根壽に踊り躍つて笑ひを含みかくのとくの議會とば何をもつてか失ひん早く軍船と促して遲回よ渡るべからずと奏聞そされども舜臣に謀慮ありし者なるゆゑ中々是を敢ず上よりにそみやかよ船を進めて討取れとの下知あれども猶も遲徊よおゐよぶこと十日餘りよなりよける行長か間者應

瑞が方に再び到り清正今すでゝ陸ゝ下りたり先ゝハ何ぞ兵を出して要へ戴ざる朝鮮の軍議兎ゝも角ゝも油斷なるハ殘り多き事共なりと伴りて時を失ふことを愛惜るのこゝろをかたる應昔ハまた此度も聞けるがまゝゝ朝鮮の王廷へ訴へけれゞこゝゝまゝ朝廷の臣下共元均が黨なるも黨ならざるも一ゝみな舜臣がおこたりより事の機を失ふことの殘念なりと云へる者のみ多きゝより舜臣をば召とりて其穿鑿あるべき由を命せられ元均をもつて舜臣が代りとし水軍れ統制使といなしたりけるされども李昭ハ猶その吟味の覺束なきところありとて重ねて南以信といへる者ゝ命ぜられ閑山の地ゝ行向つて急度此議と正さしむ以信ハ即ち全羅道ゝ行向ひて舜臣がことを問尋ぬれゞ軍民ども道を遮り南以信が馬の口と扣へて舜臣が罪ゝあらずみなこれ讒臣と敵間の計るところなり可惜大將を過ちおくして罪科に陷れ給ふべからずと詔るともがらハ爰かしこゝあげてかぞふべくもなかりけりされども以信もとより元均を贔負するこゝろなりけれゞかゝる事をゞみおかくし實をもつてハ論せずして則ち返りて奏するやう清正が海島ゝ逗留すること七日なりしと聞此時ゝあたりて我軍もしこゝゝ往き向つて聾ならば清正ハ易く味方の擒となるべきものなるを舜臣が遲滯ゆゑことの機を失したりと云るゝぞ其罪一ゝ定りて舜臣ハ獄ゝ下されけるとかしまぬ者こそ無りける既ゝ大臣ゝ命じて其罪を議する時獨り判中樞府使の官鄭琢といふ者舜臣ハ名將なり一事ともつて棄べからず殊ゝ軍機の利害ゝおゐて遙ゝ他より議しかたし彼が今回軍をすゝめざると何ぞ護りゝこゝろなしとハ論ずべき請らくハその科を寛ふして後の效しと責給へといふゝより死罪一等と減じその職を削りて軍人ゝ充たりける此後閑山の船戰ゝ元均が打負てその身も遂ゝ死したるハ舜臣が其職を奪ハれたりし故ぞとハ後ゝぞおもひ出ぶれけるこゝゝ哀れを止めしハ舜臣が老母なり此とき牙山といへる地ゝ有けるが舜臣すでゝ罪あつて獄ゝ下ると聞しより大ゝ愛ひおそれをなしつゐゝ亡しく成ゝける舜臣ハ途中ゝして此由を聞よりも大ゝ歎きゝ為づんで食事を斷絶するゞかりなりけるが王事怠るべきの議ゝあらずと我と意ゝ力をろへ母の服衣を着しながらゝ櫛慓が帳中ゝぞ出たがひける

黑田長政等日本勢渡海ハ事

既ゝ今年も三月下旬ゝ成ける日本の諸將三番手黑田長政等をはじめとして凡そ十三万の兵士ことゝ〳〵朝鮮の陸地ゝ打上り人々の持城その分配の定めれ如く五路を分ちて築きたり或ハ登萊機張西生浦或ハ豆毛浦安骨浦或ハ竹島蔚山加德鳥粱山の地ゝ續きみゐ日本の兵城ゝ取り固む其外熊川金海昌原咸安晋州固城泗川昆湯までも日本人の横行の地とあれゞ明人朝鮮の人ども此中ゝ往來するのことを得ず既ゝ目中ゝ朝鮮一州を打平げ大明までも聾入ぶんゝ何のかたきことかあらんと若

き諸將ハ勇みをなして大明の兵軍の寄せ來るをぞ待居たるされども〻ゝは時よとりての難儀あり朝鮮の國中連年の兵革ゑバらく止ざりしゆゑをもつて一國の中困窮すれバ米穀最も多からずこれよつて日本の諸將も以の外の難儀とハありたるなり殊よハ此ごろ風惡うして兵粮船もいまだ來らず三月はじめより渡海すれども千里人望たへて馬芻樵薪の類さへ不自由なれバ慢りよ動搖して ハ行先々まで勞困よ至るべけれゑバらく其用意の全きを待てこそ深く敵地よハ入るべきありと諸將の相談一よ定りろれより堅く籠城の計とおしまた前々の如くよ恣よ朝鮮人を殺戮ずることなかるべしと各々相談をきハむるとハ云ども軍中の雜人その掟の正かゝざる大將幕下ハ猶その法を守らずしてみだりよ殺害するも多かりけるこゝよ浮田秀家の重臣よ戸川肥後守といふ人あり其人がら武勇よしてまた文事を解せる意ありけるが是より先文祿元年朝鮮征伐の時よのぞんで肥後守も一陣營の部將たれバ陣屋をかけて兵士と屯す朝鮮の土民ども右往左往よ逃れかくるゝと肥後守逃げゆく民と諭して云やう汝等を殺すよあらず少しも恐れをなすべからずとこれと靜めてその商賣の具をもつて來たれる者よハ木札を六百枚ほどこしらへ置望みよまかせその出所のゑれたる者よこれを與へ又ろの中よ智惠のありげなる長らしき者をゑらんでろの頭と定めて外よりの間者を防がせける其長これを吟味して在所の外ある無緣の者ハ一人もろの内よ入ざれバ居住の民人大よ悅び肥後守が與へたる木標を胸よかけて晝夜よ用事を弁ずれば此事と聞傳へて四方ハ雜商自由よく肥後守が陣邊よ賣買するゆゑをもつて米豆ゆたかよ材木滿炭薪まで事をかゝず魚肉監藥よ至るまで足ゝざるといふことなし大將一人の其法の正しきゆゑと聞へけりその後よ肥後守ハ他營よ移り別將また此所よ在陣するを土民ハ先の大標をかけて何もの如くよ集り來りて肥後〻〻と云けるを其辭を通ぜぬゆゑこれハ何を云なるゞと盡く生捕て殺しけるハ不便なること共あり朝鮮人この事を聞傳え大よおそれをなしてみな〻〻山中よ逃れ入て商賣の道とゞまりけれバ大わ難儀ゑけるなりと肥後守歸朝の後このことを親しき人よ語り大閤自ら朝鮮よ向ひ給ふゆゑならバかゝる事ハあるべからず諸將の人を殺せること實よ暴虐のことなんどゝ云けるを秀吉公ハ自ら聞召もよより此度の征伐よむかへる處の諸大將へ此事を警らるゝより各々これと第一の法度よハ出しける

大明援兵朝鮮よ向ふ事

大明の朝廷よハ此度日本の大軍再ば朝鮮よ押渡るよ付て朝鮮王より援兵ハ事を乞申すよよつて大臣奏して曰くひとへよこれハ兵部尚書石星が我意よまかせて他人の奏と押とゞめけるよよつてとのこゝよおよべり早くこれを詮義なさるべきなりとヤよより石星をとがめ給ふことゑきりなりけれバ石星これを大よおろれて沈惟敬を呼てこれを責詰ることもまたきびしかりけるよ沈惟敬今更

すべきやうおくして言辞みだれてさま〳〵に陳じて日本人の兵を催すハ朝鮮の王子の禮節相違のことをせむる故なり大明れい下知とろむくにあらずと云と徐成楚と云るもの是をくじひてそれより軍を起すこと十余萬海に浮ぶこと千里一ッの禮節れ足らざることと爭ふのみの擧動ならんや由おき長詮議あふんよりハ速にその不意に乘じ虛を問ひて兵と出して日本兵を撃除ふまハ去かずといふ諸臣一同にその罪をもつて石星に歸し遂にこれを獄にとそハ下しける朝鮮の使者來つて大明の援兵を請ひ求むること甚だもつて急なりけるされども大明近年兵戈ゑバ〳〵起るをもつて兵士と召集むといへども募りに應する者のあかりし故大明大に騷動に及びける同く四月に明帝兵部尚書刑介をもつて總督軍門の官とおし遼東布政司楊鎬を總理朝鮮軍務の官となし麻貴をもつて大將とし楊元列廷董一元等相つゞあて朝鮮を援來る其附屬の兵士ハ制東浙江四川廣東れ軍勢と聞えける丁酉五月に楊元が先手の兵士三千を引卒して先至つて京都に留ること五日なりろれより全羅道と下つて南原の地にとゞまり守れり南原の地ハ湖嶺より敵兵の衝來るべきその道路たるによりて殊にハろの城堅固にして要害のよろしき上に往時洛尙志が籠りし時新に築きたれバ最も守るに力ふありまた城外に蛟龍山城の有ける衆將議して山城を守りてよからんと云けるを楊元聞てゑばふく思案にかよびけるが兎に角本城をもつて守りをなすがよかるべしとてそれより壘をつくろひ

濠を深ふし濠の内より羊馬墻なんどいへる攻具と設けて晝夜より普請を急ぎけるゆゑ一月餘りよりその城全く出來たりける朝鮮王李昭ハ大明の命を受け新惣督の官となりその臣左兵使成允門防禦使權應誅をして慶州より陣と備ひて鳥嶺の敵と防がしむ右兵使金應瑞をもつて宜寧よりあらしめ釜山の敵の防ぎとおし統制使元均をして舟師をまとつて竹島加德の日本勢をさゝへけるこゝより朝鮮の斥候の兵かへり來つて云やう日本の大將の中より清正ハ兵粮米一年ばかりの支度あらば兵を分て進むべしと日本積の兵粮の來るを待て居たりけるまた行長ハ兵粮のつゞかて來らざる上ハとても急より敵地より入ことかなふまじと竹島等の處々の大將より示して云七八月の新穀熟せると待て後敵地れ食よつゐて働くべしと相談するゆゑ九淵の龍の如くよ深く地の堅固より依てひそみ隱るたとへば其居城の外十里二十里ばかりよて薪と取の人足あんどと朝鮮の兵ども搦へて殺すこと有といへども更よこれを見ぬ体よて月日をそごそのやうすなりと告報ずるよより朝鮮の人心少し安まるふもひとなり城ごとの要害をかため日本勢の防ぎをなしまた方々へ矢風よおびへて逃散たる者ども

な〳〵本の如くよ立かへり己々が本城をこそ持こたへける

沈惟敬使を清正が方へつかハす事

こゝよ秀吉公わざと惟敬が方へ使とつかハし速よ朝鮮の三道と割て我よ授くべしとこれを責玉へ

ば明帝いまた惟敬なんぞ日本の兵を徹しめざると相互まこれを一人の罪科まに歸して怒らるゝまより沈惟敬も今い詮方あく一人恐懼するゝかりなり餘りのことまに斯ても事もや調ふべきと朝鮮の僧惟政松雲といへる者をやとひて使とし清正が方へ一封の書を贈りけるその辭まに大明の大將邪介と云る者即今七十萬の兵を引て既まに朝鮮ゐ來れり公等の小勢中々もつて敵しがたし速く諸將とともに兵を徹てゝ退れんこと是可なり清正時まに西生浦まに在しが即ち返書を與へて云松雲來つて我まに告るまに明兵の來り進むといふを以ても是我日頃より願ふところあり夫いかんとなれば朝鮮の兵使い懦弱まして弓を變て我兵士と楯をならぶること叶わず故まに我心常に鬱し塞りて固まこれを憐むばかりなり去かるに今明兵を待承てこれと相逢て快よく戰ひを決し急まに攻擊ば更まに朝鮮い置てこれと論ずるまに足らず旗と明京まに進めてこと〳〵く焚燒て擊やぶらんこの言聊も僞るべからずまとまもつて我身の幸まに怡ぶところ何をもつてかこれまに加えんや唯恨らくい明兵の來ることのおそきまを我兵を聚めて竢のみなり惟敬をはじめ朝鮮人明兵ども此返翰を見るより大まにおとろき騷ぎた事り惟敬いよ〳〵其心暫時も安からねばまた密まに僧を清正が家臣金太夫が方へ遣してひとへまに和談の事ととり持たまへと云やるまに渡邊もとより其意まに從わず返書もまた清正と相同じかりける故今い惟敬その術盡ちから窮りてあすべき道こそあかりけれ

刑介沈惟敬を囚ふ事

刑介もとより惟敬を惡むこと其心深かりける今更惟敬が術の窮り極ると見るよりはやく獲へて殺そべしおそらくい事遲々まおよびなば彼日本へ走り大明の情實と告ゑらせなばことを誅るの邪魔とおるべきとおもひければ先ひそかまに書と贈りてことを懇まに取あつかひゑばらく惟敬がこゝろと安んじけりゑかれども惟敬い元來邪智多き者なれば日頃中のよからぬ者の今まに至りて丁寧の仕方こそ心得ぬとかなと疑ひのこゝろと起し身の害とのがれんにい今更他の計策あるべからず偏に釜山浦まに走りて以て日本へ反り忠をなすより外なしとおもひながら彼所まで至らん路々朝鮮大明の軍兵多く遮りとゞめんまいなか〳〵もつて到り着んまに難義なるべしと思惟まわたるゐどはや刑介が謀とまうけ楊元を三千餘騎の大將として南原まに趣かしめ吳惟忠麻貴等ならびまに朝鮮船手の大將元均あんどまに示し合せて惟敬が釜山浦まで逃れ行べき水陸の道筋を遮りおさへしむ惟敬い猶いまだ兵を去たかふこと二百人まあまりければ刑介これをつゝしんで未だ易くも擒へかたくまた其夜まに乘じて遁れさらんことと恐るゝゆゑ別まに兵士二人の我まに去たしき者共を撰んで惟敬が兵の二百人と無理まに取かへてこれを奪ひ惟敬が黨の立ざるやうまに撫ひたり是非あく軍兵をば取かへたれども此ことを大まに憤りを含んで密まに其國安張龍といへる二人の者を釜山れ地まに行しめ行長まに對

し日本へ降參せんと云送りける行長是ゝ同心して翌日柳川調信をして五百れ人數を卒しめて人を先立て宜寧と云る處までつかわし惟敬が來るとむかひ呼ゑし心時ゝ朝鮮れ斥候これを見付て調信が人と擒とあして惟敬が方へこれを通せと惟敬が使の張龍ハ窃ゝ間道よりそゝみ惟敬ゝ見ては やく走りて日本營ゝ行べきことをすゝめける惟敬もこれゝ同心して既ゝ打立んとするゝし刑介が方より代りたる兵の中ゝて此由を楊元ゝ來り告ぐ楊元これを聞よりも事すでゝ急なりとぞ即ち自ら馬を馳て宜寧の地まで追かけ行途中ゝて惟敬が運のきわめとて日本の土產のため狐貂を多く馬の荷ゝ付すゝめ行ゝ出合ける楊元ハ惟敬ゝ向ひ日本れ和親如何ぞや惟敬答て和親それなるべかゝずといふ楊元とがめて和親ならずんば吾子何ぞ眞直ゐ刑介ゝやさゞる惟敬重ねて我慶州ゝ行清正と交話となし相調んとおもふが一月ばかり其内ゝいかならずかへりはいんと云ける顏色はないだ變じその場をはやく拔けなんとすると楊元これと察しぬれば手の者どもゝ下知を加へ惟敬を中ゝおつとり圍んで丹城ゝ引かへす刑介すなわち明帝へ奏して惟敬をゞ籠獄ゝこそ下しける

沈惟敬獄ゝ下る事

慶長二年七月ゝハ沈惟敬すでゝ日本へ歸降せんと途中まで逃出しを楊元ゝおしとゞめられ路上ゝより引かへさるゝ刑介ハまた元より恨あるものゝことあれゞとても此度安穩ゝして指置べからざることを語りて密ゝ己がおもふところの議と隻國安といへる親信の者ゝ云含め行長が方へ內通をあしたりける其おもきゝ南原城とゝ大明の兵將楊元と幷ゝ全羅道の兵馬節度使李福男が守れるところなり城中れ兵士多からず幸ひゝ足下諸將と意を合せて攻取給へ城ハらならず陷りあんぞ南原の東ゝ雲峯島嶺有其南ゝ三浪の大江あり路筋金海竹島ゝ續てこれぞ朝鮮れ要害のところたり足下まさゝ騎兵をこゝゝ於きてこれと攻よその右の方ゝ閑山島有こゝハ刑介が遊東の兵の三千を遣してこれを守らす陳愚衷二千の兵を率て全州の守りたりまた朝鮮の將金應瑞李元翼ハ雲峰ゝ有權慓元均ハ閑山島の邊に備となせるがまあ〳〵南原の援ひの兵なす足下若兵を分ちこれゝ當つてその後ゝ南原を攻るならば暫時ゝその大功をば立べきありと云ハせけるゝ行長もとより南原を取おさめて秀吉公の心感ゝ預ゝんことを欲する折からこの說を聞より大によろこび即刻諸將と相議して南原城を攻とらんとぞ議したりけるまたこゝゝ惟敬すでゝ籠獄の身となりたりけるゝしをきゝける大明人ハ評判して今より後日本の軍勢の鄉導絕て大明の禍の根を拔たりと人みなよろこびたりけるとかや同八月十四日ゝハ大明れ御史の官人ハ沈惟敬が妻たる陳澹如が家ゝ入りて闕所するゝ日本の旗一流長短の刀共ゝ三百六十口同國の衣服器財細絹犀の帶日本の圖畫三百六十三種その外さま〳〵れ和物を貯へ置けるをこと〳〵く是を沒入して陳澹如をも官婢となしたりける沈惟

敬大明の万暦二十五年獄に入てその後同く廿七年九月廿四日ゑ殺されたゝと聞えけり

元均が船軍閑山ゑ向ふ事

元均すでゑ閑山ゑ至つてこと〳〵く李舜臣が約束を變じおよそ褊裨將とはじめその下れ士卒ゑ至るまで稍く舜臣がためゑ任ぜらるゝもの共をゝ功あるとも功なきとも總て去りぞけ去らずといふことなしまた李英男が先日元均が敗れ走りたる狀を克去りたるをもつてもつともこれを嫌ひ惡めるがゆゑゑ軍人の怨み憤ることすくなからず上下のこゝろ和せざりけるさてまた舜臣が閑山ゑ有し時堂を作りこれを名づけて運籌と云ひ日夜ゑその中ゑ處し諸將と共ゑ兵事を論じける折からゝ士卒といへども軍事を云ゝんとする者ある時ゝ來り告ることを許しもつて軍情を通じそのよきをゝとつて是を用ずといふことなく毎ゑ戰ゝんとする時ゝ悉く褊裨れ軍將と招き計を問て後その謀計を定め正して戰ひを合せけるゆゑゑ破れと取しことなかりける元均ゝ今この法をこと〳〵く變じ已が愛せる女をすへ置外ゑゝ重なる雛をかまへ内外のへだてときびしくかこふまた諸將のことありてろの面を見んと欲する者ありても晝夜ゑ酒をのみ亂れをなし遊樂の際なければ彼ゑ對談すべきの時まれなり强てこれゑ對面して事を辨ぜんとする時そゝ醉狂に亂れ怒りゑふるゝこと斯の如くなりければ刑罰もとより度ゑあらず機嫌ゑまかせて斷案けゝ軍將ともひろかゑ語つて如此

の大將ハ日本の兵來らば戰ハずして走りん事の笑止さよと云ひ譏るこれよりて諸人彼とおそるゝ意なけれバその號令も行ハれず時ゝ小西行長ハ李舜臣が先だつて戰ひのことをとゞめたる其科ゆゑゝ退けらるゝと聞よりも能き反間の遣す時とおもひけれバ間の者要時羅といへる者を語ひ金應瑞が方へつかハし是を紹て云せける和船の軍兵近日渡海をなして人數を添ふる由を聞く朝鮮元より船軍ゝなれたり要害のよきところゝ待受てこれをむゝひて討ならば勝ずといふこと有べからずと語るゝ都元帥權慄もその說を信仰そ要時羅ハ其機を受て李舜臣先立て加藤清正が渡海を押へとゞむべきのところゝ延引して其機をぬかせるゆゑゝよりその任と退けられて罪を得たるを見給ハずやなんどゝ敵將どもの實ゝ得心すべき品を盡ーてこれを談するゝ元帥權慄第一ゝ肯ふ上ハたとへばよかゝぬ計あんどおもふ者の有とても誰かハ强てこれと論せん中ゝも元均ハ舟手の大將たるの上權慄これゝ命じて早く兵船をすゝめて日本船とおさへとゞめよと催促す元均さきゝ舜臣を譏せんとてこれを僞り倭船を討べき時と過りて舜臣が軍をそゝめずおこたりて勝を失せるあらんどゝ幾回か云まハり陷入れたるゝ今その任ゝかハりてハ是ゝその勢のかたきことを知り日本勢を擊べからざるの理りをゝるといへども前ゝ盲たる言辭の相違とおつてハ人を談する科のがれがたきゝ付て進むゝあしきといふことハ口の外ゝハまた辭退すべき品もなけれバ是非ゝおよばず權慄

が催促に任せて舟艫を率ひて軍せんとぞ支度をこそなしたりける

小西行長元均が舟軍を破る事

元均すでゝ水軍を押出し釜山へ新ゝ渡海の兵ある日本人をさへぎり止めんとなをよし行長が方へ斥候の者告ぐらすれば兼て覺悟の前なる上襲つて戰いんぞと議したりける元均すでゝ絶影島といふところゝ至れる時ゝ舟を漂いして止り泊るべきをあろもなしまた倭の軍船を望見みるゝ海上ゝこれも乘浮めて風波のためゝ出沒して見えたるいこれぞ小西宇喜田を大將として島津兵庫頭加藤左馬助蜂須賀阿波守長曾我部土佐守生駒讃岐守等が五万餘騎を一手とし慶尙を右ゝ見れぞみ雲霞すじへはたらき南原を攻んためゝ押來る兵あれば日本新渡の船ゝあらずしてこゝゝ來るい小西行長が先手の兵共元均と兼てあざむきて襲ひ討んとすゝみ來れるの軍なると元均もとより謀慮つたなき軍將なればかゝる事ありといざゝ浪ゝ敵船れ出沒するとはかり見るよりも諸軍ゝ下知して舟艫をはやめて進み擊元均が兵卒い閑山より遙の道を押渡れば艫を搖動して休むことなく息ともつかずゝ馳しゆゑ兵士こと〳〵く飢渴困勞一時ゝ極り船を逆ゝそゝ法度亂れ縱横進退さだまらず忽ちすゝむ船あればはや退く船もありて法令亂れて見へければ行長が兵船これと見るよりわざと元均が船どもを勞らかさんとおもひければそでゝ元均が船どもその間近く來りて戈矛をまじへ

んとするばかりゝなれば行長が船どもい忽ち艫をかへし梶を動じ倘佯て引退くともゝ兵を交しへべしと既ゝこの夜も深更ゝおよびぬれば波風ゝきりゝはげしく元均が船ども四方ゝ散じわかれて漂流れ行方ゝゝずなりゝける元均こゝゝ餘船どだゝもおさめ集ることを得ず元均が船どもい遂ながれて加德島に到り着く船中の軍士渴することを强くして前後の量見ゝもおよばず爭ふて船ゝより下りて水をとる兼てより行長左馬助等が兵此ところゝかまへ置たる兵陣あれば頓てすかさず擊て出掩ひ擊つ朝鮮の軍兵どもこの有さまを見るよりすいや日本人こそ起り來れりはやく船と押出して命を助れと騷ぎ立て誰か一人戰ひを合せんといふ者なく我先ゝと逃げ行をこゝゝ押つめかしこゝ漕つき切殺しけるゆゑ朝鮮の將士どもこゝゝて討て取るゝ者暫時の間ゝ四百餘人と聞えける

元均逃れ走る事

元均い此度の戰ひゝおもひの外ゝ負軍を引出し稍くゝ打もらされの兵船をおさめ集めて引退き巨濟の黎川島まで到り着權慄い此時ゝ固城の地ゝ有けるが元均が此度一事の得たるところもなく却て大なる味方の弱きとおしぬることを怒り早速ゝ回文とつたえて元均を召びこれと杖うち督責し更に船軍をすゝめて功を建よとせめはたる元均い權慄がためゝ耻辱を蒙ることを憤り還りて兵をすゝむるの意もなく恐門の餘りゝ酒を呑でい醉を促し晝夜ゝ匪臥の外いあしたま〳〵諸將の用

事ある者これと事を談ぜんため元均が幕より來るといへども醉臥ゐ事を談ずる事不叶幾回もたゞ空しくかへるのミなりける日本諸將の兵候共この有さまをよく〳〵見定め急ぎかへりて小西が軍より告ぐらそれば小西大よろこびある夜密わ船を促し元均が油斷れところを襲ひかゝつて殺入ば元均が軍兵大より乱れて逃ちりて遂より一戰をも交へざりしゐれなりける有さまなり元均もやうやく走りて海邊まで到り着船と棄てきしより上りて走らんと云たれども元均が生れつき以ての外より肥ふとり馳走ること鈍ふして歩をそゝむる事あたゐず傍なる松の樹の下より潜りかへつて息をころして隠れ居る左右の兵士猶こゝまでも三十餘人ゐつき從ひしが此有さまと見るよりもとてもたのむ甲斐なき男とおもひけんミな打すてゝ散〳〵になり行ける其後元均和兵のためより擒とありて殺されたりとも云傳へまたあるひい命ばかりゐ辛く遁れ出たりと語れども實を知る人なりける李億祺い戰ひすでより極まれば是までとやおもひけん船と沖中へ乘出し海波の中へ飛こんで空しくこそゐ成たりける實なるかな大將ゐ三軍の司命よして克戰ひば國をなし惡く戰ひば人を亡しその身と破ると元均かその器よあらざる一人のゆゑをもつて舜臣が部下よしてさしも勇功ありし將士なれど元均が下知よ付て一戰の功をも終らず破れぬるこそ憂てけれ元均がいまだ破れざる以前よ裴楔といへる手下れ將元均がかならず破れんことと知りぬる故屢々其機をつげて諫れども元均少しも用ずして此日もでより戰ゐんとそるよおよんでまたこれより謀をそゝめて云忝川島水淺くして船と行るよゐ利あらざるれ所たれば早く他のところより陣を移すべし元均みな敢て用ひざるより裴楔いまゐせんかたなく自已の一手の人數を分つて軍船と一所より集めいましめを嚴しくしてその變あるを窺つて日本の兵軍おそひ來り港を奪ふと見ば速より走らんと待居たりけるが既より小西が兵の襲ひかゝると見るより手下の船より下知をなし先達て走りし故裴決が全軍獨り全ふして殘りけり裴楔ゐそれよりも閑山島の中より至りて陣屋より火を放つて廬舍を焚はらひ粮穀軍器より至るまでことく〳〵く燒そて閑山島の餘民のいまだ走らぬ民まで日本勢の寄せ來らざる以前より隧去れども下知を加へて盡く去らしめたり

朝鮮所々城の守り甲乙の事

日本勢すでより元均が船手の軍を奪ひ破りて閑山島を乘取ければ船手の通路も自由よろしく往來その勝手を得たりけるさらば南原を乘取べしと評定をなし同じく七月廿八日より先手を操出して南原へ攻入らんとす兼て定むる約束より全羅慶尚忠淸の三道ゐ宇喜田秀家と大將とし小西行長の先鋒たり島津蜂須賀長曾我部加藤左馬助生駒が組手五万の人數これより從ふ一手ゐまた毛利秀元大將より加藤淸正先鋒たり黑田長政淺野幸長吻兵五万これより隨ふ此手ゐまた慶州を發し蜜陽大丘の

地を過ぎ先義館より出王城の明兵出來らばともよこれと相戰わんと議したりける中納言秀秋わ釜山城より在りけるが家臣山口玄蕃允伊藤雅樂助南部無右衛門等ゑ八千人の兵士をさし添清正秀元等と相ともゑ兵を忠清道に働かんと擬したりける是よりさき体察使李元翼朗元樞慓其道筋の山城とも修理を加へて日本勢を防がんとし公山金烏龍紀富山等の城を築きけり公山金烏の城わ民の力を用ゆること尤も中ゑも多し且傍なる郡縣れ器械糧餉を取納めて其中ゑ滿しめ守令の官吏と置てこれが奉行となし民間の老若男女とこと〳〵く城中の内ぐるわへ入てこれと守らしむる故遠近ともゑ騷ぎ立しが今度再び日本勢の動搖するゑおよんで清正わそでゑ西生浦より西の方全羅ゑむかひまさゑ行長が水路の兵と一所ゑ會して南原の地を攻取らんとゑたるゐ元帥樞慓と始めその餘の諸將も風を望んで引去のみあらずまた所々の山城ゑ入て守る者どもをも令を傳えて早〳〵ゑ城を明てみな〳〵散じ去り日本勢の鋒先を避たるゑ唯義兵の將郭再佑一人のみ昌寧 火王 山城ゑ入り死を期りゑ是を守らんと覺悟ゑたりける清正が一手の兵城下まで既ゑ押寄たれども城の有さまと見るゑ山岳壁を立たる如くゑしてその要害の堅城なるのミおろず城内もまた靜りかへつて敵兵大勢寄來るゑゑられども少しも動ずるやうそもなきを察するゑなか〳〵たやすく落城すべき体ゑもあらねば愁ひゑ小城一ッをおとしかね由なき所ゑひま入して日と費さんより速かゑ此城をば責すして人數を引舉げ前途をさして急ぎけり

郭俊 義のためゑ死をる事

とゝゑ安陰縣の監官 郭俊 前咸陽郡主 趙宗道 といへる者所〻の山 城を守りし大 將どもわこと〳〵く明け退く中ゑ黃石山城ゑ閉ぢ籠り歐來らば一さゝへ防ぐべき覺悟してぞ居たりける前の金海府使白士霖もまた同じく城中ゑ入ゑけり士霖わ元より勇義の人ゑ越たりし英武の武將なりければ衆人これをこゝろをよせて重じ賴みゐけたるなり斯て加藤清正が一手の將兵程あく黃石の山下ゑおし寄て相戰ふに日本勢れ勇威を見るより俄ゑ心おくれやゑたりけん士霖わおもひの外ゑ武者ぶり惡く人より先ゑ逃行たりこれゑよつて城中の守兵大ゑやぶれて守りと失ひ逃れ散ずれば郭俊今わ防ぐゑ力つき其子の履祥履厚二人もろともに敵兵の中ゑ駈入ともゑ討れて死たりける俊が娘わ柳文虎が妻たりしが此度文虎戰て日本勢の爲ゑ擄となる郭氏すでゑ城と出たりしか此由を聞ゑり其婢女ゑ告て云父すでゑ死たるゑも死せずして存命なすわ夫ありとするゆゑのみゑかるゑ今まゑ夫もすでゑ敵ゑ執わるとや吾何ぞ生たりとも甲斐あらんとおもひ切り自らくひれて死たりける趙宗道といへる部將わ同じく城ゑ籠りしが味方の勢の日本の兵士とおそれはゞかり我先ゑとのがれ行と見るより獨り言して我豈走りかくるゝの徒とともゑ死することを草間ゑなすべき幸ひゑ此

城の防ぎ有こそ本望なれ今い死すとも何の恨らあるべきと則ち妻子を率て城中ゑ入りけるが時を作りて曰く

空同山外生猶喜○巡遠城中死亦榮

とついゑ郭俊とともゑ討死して忠義をこの世よとゞめける

陽元援兵をあつむる事

閑山の水戰元均が破れの報げ來りけれゞ朝廷野外ふるひおどろきこゝゑ大ゑ畏れて朝鮮王の行在所ゑい諸大臣を召て此議を評議せらるゝに郡臣大に惶惑しけれゞ誰あつて答る所を知るものなし慶林君金命元兵曹判書李恒福等これゑ答て奏するやう今度の破れゑおゐで空がちゑ日本勢の強なるゑあらずこれ元均か罪なるかな當ゑ李舜臣と起して統制使となして是と防がしむべしと議するゑ朝鮮王もまた此奏ゑ去たがひ李舜臣をもつて三道水軍統制使となし給ふ此時權慄元均が敗れを聞より折ふし李舜臣が幕下ゑありしを促し閑山島ゑ往しめて元均が殘兵を收めしむ此時清正黑田も毛利が人數是彼ゑあゝゐれて衝き亂せゞこゝろよく打通るべきやうなきを李舜臣ゐ一人と召具し慶尙道より全羅道ゑうち入て晝夜となく潛りゆきやう〳〵ゑ珍島までゑ到りつき殘兵を集めて日本勢の通路を遮りとゝめんと去たりけるこゝゑ大明の大將楊元ゐ南原ゑ到りし始め城壘を增しきつくこと既ゑその高さ一丈ばかりにして城外ゑ羊馬墻をかまへ所々ゑ砲を發すべき爲の穴を多く穿ちて鉄砲とすへならべまた城門の外ゑ大砲數ケ所ゑ構ひたり濠塹と堀ることその深さ一二丈ばかりゑそその外品々要害のひまあるべき事ゑ意付て油斷あらせず防たり爰ゑ閑山の軍船すでゑ元均が敗れをなせしより日本水陸の大兵謀を合せて攻寄て來るの告去きりなりしかゞ城中大ゑ亂れみだれて人民こと〳〵く逃れ散じて兵卒すでゑ殘り少くなり今ゐ纔ゑ楊元が領するところの遼東の兵馬三千餘騎のみ城中にのこりける揚總兵これを見て斯てゐ日本の大軍ゑ小勢を以て敵しがたきの理りを察し羽檄を馳て全羅の兵使李福男をまねひて同く城を守らしむ福男もとより無勢ゑして大軍に相敵しがたきことを悟りて急ゑ到らんことを憚りて遲參ゑおよぶを揚元去きりゑ使者をつかわしきびしく催促なしけるゆゑゐ是非ゑおよばず福男ゐ引卒去たるわづゝ二百人計の人數をもつて押來るかゝりけるところへ光陽縣李春元 助防將金敬老 もつゞひて爰ゑ出來れり

日本勢南原を攻る事

同く八月はじめつかた日本の兵軍陸地の兵將毛利加藤の両手の兵士その外の諸大將すべて十万ゑ餘れる人數ゑて南原の城下ゑ寄せ來るすでゑ忠清道に打入りければ其兵威れさかんあるゑおそれを生じ雲峰ゑ陣とりたる權慄と李元翼がともがゝも爰ゑ出むろひ戰ふべきの意もなくみな〳〵の

かれて東境より引退く秀家行長義弘嘉明が輩も軍列をとゝのへてまさに南原城に向かんとせし時陳愚衷が全州に備へて南原ことあらば彼ところを援ひたすけんとかまひたるよし聞ゐければ全州より向ひ彼が兵軍のおさへをなすべし誰か彼に向かんずるぞさらば閣取にてこそ向かめとおの〳〵閣を取たりしに義弘嘉明の両將全州に到るべきの閣にあれば島津兵庫頭加藤左馬助の両人か全州の手當にさだまり秀家行長か四万餘人の人數をもつて南原に押行ける同く十三日先百餘騎の人數をもつて物見ながらに城下に出し城兵を誘ひ出せ鳥銃を放つて頃刻にして引返す其外の人數をわかつて皆々田畝の間に散じ伏して或か三人或か五人組をなし既にさつてかまた來らしむることを凡そ數度におよびけるこれ小物見の使武者敵のやうをうかゝかんと城の兵卒小筒をもつてこれに應じて計出せどもその間遠くしてあたることすくなし小西浮田が軍兵まづ遊兵をもつて戰ひとまじへさつとかゝつて颯と引きたがひに出てすでに馬を馳ちかふる故ともつて城中より砲を發してもこれに中ること少なかりしか朝鮮いまだ砲の術ことゝく日本に及ばすと聞へたり守城の諸卒かまた倭の丸に中られて斃るゝ者かへつてこれに多かりけるかゝるところに小西が陣より兵騎を出し城下に至らせ城下の人を呼で案内を通ずれば城中より楊元が家の騎一人通事を召具し出向ふに則ち一書を相渡せるかこれ其戰ひを求むるところの日限れ約束と聞へけり同じく十四日になりければ日本の諸將一手〳〵の攻場を定めて卷よせ來りすへて城をめぐらすこと稻麻竹葦の如くに三方より卷つめ一方をかの明たりけるか古よりれ法わして城中の士卒の心を一におもひきらせずして逃れん者と逃さんためと聞たり是より前此城の南門外れ民家きびしく立つゝきたるを敵兵の寄來ると聞よりも楊元か兵士に下知して自焚なさしめこと〳〵く燒除へるその跡に石塁や土塀の多くのこりたるを日本勢かこれに便つて城より擊出す火砲弓矢の小楯にとつてそのかげより城の上なる兵士ともとねらひ定めて打例す本よりも鳥銃の上手をえらみ出せることあれば空矢か少しもなかりける

南原落城の事

日本の大將小西浮田の人々南原城を攻ることと既に三日におよぶといへども楊元も逆東の大將わして北狄の辭と防ぐになれたりし者ともなれば城を守ると堅固にして射立打出すこときびしきゆえ今か寄手も攻あぐんでさらば此陣すこしくゆるめてそれより小西等か城邊の水田に人を走らせ稻をからせて大束にかゝとげて幾餘ともなく刈あつめて石垣土塀れ間につんでその日の暮るを待居たり城中の者ともか敵の方に如此の計ありとも聊かえらず日本勢の引退くとひとへにこの城を攻あぐんで退きけるよとのみこゝろ得て人々のこゝろ油斷仕ながらもされと兼て急あらば來り援

べきの約束ある遊擊將軍陣愚夷三千の兵騎と領して全州よ有ながら未だ來りて相援ふことをもなさゝれバ南原の軍人まそ〳〵意よ憤りを生じ全州もはや敵のためよ圍れしやいかよ援兵の遲かるちん若も敵のためよ圍みとゝめゟれ兵を出すことの能ざるかをからば此處孤城となつて援の道の絶るゟらバ敵は大勢いかんしてかゝ防ぎとゞへきと堞と守れる軍士共已がまじゝり深き者共ゝ頭をまじへ耳を寄て相計りしが此日もすでよ晩よおよんでゝ馬よ鞍擔遁れんとする氣色あり其夜も早く一更よ過ぎゟんゟとかもふ時日本の兵陣中忽ちよかまびすく騷き立ち大よ人の起り動ずるの聲するを城中の金孝義といへる軍官ゝ南門の外ある羊馬墻を守りて居たりしが此聲を聞より耳をすまして何事の呼聲なゟんと覘ひ相互よ應答し物を運ぶの狀ゝ晝程より刈集たる稻束どもを城壘より高く積をあげて一面よ聲と揃ひてその上よ立ならんで多く鉄砲の筒先をならべて放ちけれバさながゟ雨雹の如くなり城上の防ぎの兵敵の方より打出す鉄砲よ打すくめゟれ頭をちぢめ形を隱して外よ向つてうかゝひ見る者一人もなかりけるそれより二時バかりを過ぎその聲程なく止みけるが草束すでよ濛に充陸よおなをくなりたりけるをかれみならず羊馬墻の内外まで堆く積たるがこれも數刻の間よゝ城と同しき高さとなるこれよよつて倭軍ゝ兵士我先よと城よ馳登り攻入らんとなしたりけるを城中の兵これを見て大よ亂れ日本勢すでよ城よ入るをと喚り叫び逃れ走りて城中よ止る者ゝなかりける金孝義ゝこれをもをちず南門の外なる羊馬墻の番將となつて居たりしが慌てさわぎて城中よ入て見てあれバ城上よゝ已よはや人一人もなかりけり唯よ城内のところ〳〵より火烟をこりて燒あがれバ斯てゝ如何よ防ぐべきと奉聖李榮芳劉之鶚といへる者三人打つれ門外へ逃んとすれども門關かたく閉たるゆをを容易よゝ開きがたくして門内よ並び立たるゆを騎馬の足どもゝさゝがら束ねたる如くよして街道よ滿々て足の蹈所もなかりける既よして門も漸々よ開けたれば軍馬ゝ門を爭つて逃れ出る北の方ゝ加藤清正が兵よてかためたれば其士卒もでよ城外よ滿々て城をかこゝけることきびしく何かゝなつてよめろふべき各々要路よ立向ひ鉞長刀を押取のべ菜肉なんどをきる如く大明勢を取ひしき當るを幸ひなぎ立れど明の大兵一人といへども是よ敵する者もなく首を俛頭とゝゝへて偏よ和兵ハ斬るにまかす適天月の明朗なる夜なりけれバ漸々よかくれをもとめて脫れ出たる者共幾くもなかりける揚總兵ゝ家の騎馬僕從人ともよ馬を馳せて突出て僅よ身をもつてまぬかれたり或ひゝまた倭人ども此者を總兵とをりたりけるゆををちぬ体にもてなしわざと是を遁れりといへる說も有とかや金孝義ゝ李榮芳劉之鶚と打つれてこれも同じく門外よ出たれど榮芳之鶚ゝ日本勢よ出合既よ二人ともよ切殺さる此時金孝義ゝこれと見るより足ばやよ水田の中よ身とおゞらせ草中にかくれ臥てける日本勢またこれをもをちずその儘よ行過た

るゝ危うかりけるよどもありそのゝち朝鮮王の行在所より至りける既より南原陷りたるゆゑ金州以北ゝ瓦のごとくは破れ解け日本勢れ陣營とぞおりたりける大明へも此こと遠より聞えければ揚元が逃れたる國威をはづかしむるの罪をもつて誅せられ首と傳えて朝鮮在陣の明將どもゝ玄めしけり朝鮮れ諸將どもゝ倭兵のすでゝ城と乘取と見るより今ゝまれまでとおもひけん李福男を始とし南原府使任鉉助防將金敬老光防縣監李春元その外明將接伴使鄭期遠等ゝ一寸も戰場を退かず日本勢ゝ敵對して殘らず討死なしたりける小西宇喜田その餘の諸將何れも此度の働き自ら手と碎きたる戰ひゆゑろの働きすゝやかゝ成就するのみならず分捕の首數三千餘生捕少々相添て釜山城へ注進あつて急ぎ日本へこれを訴へ大閤の御感ゝこそゝ預りけれ

喜明等南原の援兵と止る事

南原れ城兵援のためとて兼てより朝鮮の案内者あれゞとて陣愚衷を全州ゝさし置て此ところの守となさしむ麻貴ゝまた公州の地ゝ居住玄たりける南原急あらゞ速かゝ援兵を出すべしとなしけるところ日本の兵將共此こと察しはかり島津義弘加藤左馬助喜明れ両將はやく此ところに行向つて城とかこみて一人といへども内よりれ通路をさへきり留めたりける故中々もつて兵を出して援ふべきこと叶ゝざるの謀をなしたりける陳愚衷初めこの城ゝ入來りし時ゝ城中ゝ兵粮のあかりけれゞ手勢二千ゝ餘る人數ゝて籠城を養ふこと叶ふべかゝずと此城領りの朝鮮人この趣と云げると愚衷聞てつく〳〵と思案し地勢を考ふるゝ如何ゝもこれより十里計外なる地ゝ米豆甲冑等まで隱せる所あるべし其ふぢつかなき所々をさがさせるゝ案の如く山深くたくゝへ置る米豆弓箭まで多くもとめして城内ゝ取入れんとせし時朝鮮よりの留守居の者この事と迷惑ゝおもひけれゞ万一日本急なるゝ城を明退くときゝ粮米器械等みな〳〵城ゝ取入なゞこれ冠ゝ兵と借せるが如き禍ひの種ならん時ゝ當りて諸用あるべき粮米を運び取玉へといへども愚衷これを得心せず晝夜をかぎらず兵粮武具れ類まで取はこゞせて籠城の支度をなすかゝるところへ揚元が方より梳の齒を引が如くゝ使者を通じて援兵を求むこの時領するところの兵士大明人わづかゝ二千ゞかりなるゝ朝鮮の兵とさし加へて千餘騎ゝいすぎずゑかしながら南原の圍をうくるの急なるを聞て行て救ゝんとするところへはやく義弘嘉明が來り進むと云より全州の士民等まで大ゝおどろき迷ひて騷動するを愚衷きわめてこれを制すれど却て士民大ゝおこり剩え全州の城と攻倉禀の米穀をやきすて四方ゝ逃散じて跡方なし愚衷大ゝ驚き先この乱れを治め制せんとして諸官人はしりかへりて暫くの暇もおき折から日本人すでゝ任實まで到り着ぬと告來れゞ愚衷も今ゝこの城持こたゆることと叶ふべからずとやかもひけん遽ゝあゝて騷ひで城を弃て逃逃る義弘等即時ゝ全州を取かさめ米穀鉄砲

弓矢等まで取あつめ敵よりもしや襲れてゝ悪かりなんとぞ用心きびしく定めおきて去ぬらく人馬を休めけり

李舜臣船軍の事

統制使李舜臣ゝ元均が閑山島の破れの後再び水軍統制の官よすゝめられ閑山島の討もらされの人數をあつめ珍嶋よ至り兵船を収め拾ふとわづかよ十艘餘と得たりけるそれより海よ去たがつて東よ下りけるこゝよ此ころの亂を避船よ乗じて海よ浮びたる者その數を去らず尤も多かりけるが舜臣再び到ると聞より人々これを喜悦せずといふ者なしこゝよ於て舜臣道を分つて人とつかゝし此者どもを招ぎ呼しむるよ乗船してのがれたる輩この事を聞よりも遠近を論せず雲の起るが如くよ集りて李舜臣か軍の後よ去たがつて其軍勢をたすけしむ爰よまた波多野三河守ゝ先度朝鮮征伐の砌り其軍功のあきよより太閤の怒責よあひ肥前名護屋の領地とも沒入せられ今ゝ纔よ懸命ともつて黒田長政の手わ属して居たりしが如何よも一戰の功をもつて先度の耻を洗ともよゝ運命こゝよきゝまらバ潔よく討死せんよゝ如べかゝずとおもひ定めて居たりける爰よ日本諸將行長一手の二百餘艘西海を討んと押逆ふ李舜臣と碧波亭の下にして日本船と出合たり舜臣か船わづかよ數十餘艘をもつて日本れ二百餘艘よ對して相戰ふまとよ多少れ分剌あたるべきようざるの勢ひあれども舜臣元より智謀れ將おれバ十二艘よ大砲をのせて是を眞先よすゝめ潮よ乗じて流れよ去たがひて攻戰ふ李舜臣が兵をすゝむること餘りよ急よして日本勢ゝこれよおどろき進みかねて見へたるところを李舜臣これを見るより急よ砲船よ下知し入かへもみたて攻たるゆゑこと〳〵く打みだされて多くの人數を失ふべかりしを波多野が舟うへし合せて一船七十五人の者殘らずこゝよて撃れしゆゑ小西が兵ゝ危きところを遁れけりこゝよおゐて李舜臣が軍聲大にふるひ其兵すでよ八千餘人よ餘りけるそれより船と古今島までおしすゝめこゝよ去バらく軍船をとゞめたりされども粗れずくなきことと愛るゆゑ一ッの謀計を廻らし海路通行帖を作りて令を下しける忠清慶尙全羅三道の海上を往來するの公儀船私家の買船よ至るまで一よ帖なきの船ともゝこれを敵よりの奸船とさだめて委細に論じ通行することなかるべしと艦狀を廻し高く札榜とかゞけ立て此ことを去ゝしめたりこゝよおゐておよそ亂と避て船よ乗生涯をなせる者どもゝみな〳〵來つて帖を受く舜臣その船の大小ともつて差を定め米を入て帖を受しむその法大船ゝ三石と出し中船ゝ二石を納め小船ゝ一石よ涯りの定めとして亂を避るのともがら其在所住所をはゐるゝとて財穀をのせて海よ入たるゆゑ此米を入るをもつて大よかたきことゝせずかへつて纔の財と出し通行の禁めおきことと喜となすよより十日割りの内よ軍粮一万餘石をぞ得たりけるまた民間れ壯者を募りもとめて銅鉄と運

び集め大砲と鑄立させ木を伐りて船を造り立夫より遠近を限らず兵士を集むるゝ兵難と避る者どもゝみな行て舜臣ゝ依り頼み壯なるゝ兵とあり老弱ゝ食を販ぎ器財を賣て生涯と立て廬を作り陣營と結んで人々集り村里とおせゞ島中ゝ今人多くして居所なき程に成りゝけるかゝる所へ大明の氷兵都督陳隣が出來りて南の方古今島ゝ下つて舜臣と兵と合す陣隣か生れつき暴ふして勇猛なるゝよつて他の人多くゝ彼が心ゝ忤ふこと多くして相容されゞおそれぬ者ゝなかりけり朝鮮王李昭ゝ陳隣を相おくりて青波野ゝして餞と陳隣が軍兵共大ゝ傲り驕つて朝鮮國の打入てところ〳〵の守令と歐ち辱めて更ゝ忌憚ることゝ嘗てなく繩をもつて察方李尙規か頭を繫ひてこれを曳き血を流れて面ゝ滿しむ譯官をして其理を云ひ延れどもこれと承引することなし是等の事を見るゝつけ李舜臣と一手ゝおりなゞ陳隣が暴厲なるをもつて舜臣と侵し侮る時ゝ舜臣が功作ふたゝび虛しくなつて陳隣と矛盾せんことうたてけれと朝鮮の諸大臣ともゝ寄合ひてこの事を愛ひなげくのみありけり

李舜臣功を陳隣ゝゆづる事

舜臣ゝそでゝ陳隣が至ると聞より軍人を令して大ゝ仙し漁どりとなさしめ多くの鹿豕海鱗を取りあつめ盛ゝ酒醪をとゝのへ備ひてこれと待ゝ陳隣が船海ゝ入り近く來ると告たりけれゞ舜臣はやく軍の行列をとゝのへ遠くむかひて相接し大ゝ軍人を饗應するゝ諸將以下諸卒の輩ゝ至るまで醉砲せずと云ことなし陳隣が士卒ども大ゝこれを喜んで語ゝりける兼てより手柄法度のおろそかならぬ人体と聞つるが果して疑もなき名將かなと云ふらす陳隣もまた心ゝこれを喜びけるかくて日本水主れ兵船近嶋の邊と侵さんとて出て來るゝし斥候の者來り告るゝ舜臣やがて兵船を遣してこれを敗り首を取こと四十餘級ゝおよべるを舜臣是をもつていさゝか已の功とせず陳隣ゝゆづりけれゞ陳隣が喜悅のそみの外ゝ出て舜臣か志を感じける是よりしておよその事ひとへゝ舜臣とともゝ計り出る時ゝゝ舜臣と轎と双べ已が威をふるふことなく舜臣つゐに大明の軍勢と已が軍とと一ッゝ合し少しも間なからしむ軍兵の中ゝおゐて民人の物として一縷を奪ふ者ありとても則ちこれを吟味し糺明をなしければ少しもその令ゝ違ふことなく島中こゝゝ肅然としてつゝしみ恐れぬ者もなし陳隣こゝゝ上書して統制李舜臣が天地ゝ經緯せる才能の良將たることを進め賞して自ゝも大ゝ心服またりけるゝ實ゝ舜臣が良將の能あつて國ゝ忠あるゝより私心のなきが去るしなり

黑田勢解生等と鬪ふ事

刑介こゝゝ南原全州の陷ると聞より陳愚衷が罪あるところを明帝に奏聞しまた王李昭を責て云それ日本より來つて朝鮮と攻伐ことゝは是大明の耻ならずや故ゝ天兵數十萬野外ゝ暴露風雨を侵し寒

暴ゑ困むことすでゑ年久し去かるゑ朝鮮王李昭と始としその餘の大臣いさゝかも戰ふ心なしそれ主辱めらるゝときゝ臣死すといへるの義ゑおゐて何ゑあるや此度南原の敗れ全州も陥ることみな是李昭が過のあるところなりと云李昭も此督責最ものがれざる處なるにおどろき恐るれば乃ち八道の兵士と催促し刑介が命ようけ從しむ同九月ゑもなりぬれば秀元長政等ゝ全義館ゑ到着すこの全義館といへるゝ王城を參こと遠からねば大明の副總兵解生ゝ日本の兵士の直ゑ王城へ入らんことをおそれ其兵を稷山水原の両所ゑ分ちて備をおさしめ日本勢を防ぐべき手當とゝあしたりける黑田長政ゝ此手の先鋒となつて寄來る朝鮮の兵軍もとより日本の兵威を恐るゝより日本の諸軍の押し過て前わたりをおぜども城ゑ籠れる者どもゝ城を守りて敢て打出て遮ぎり止めんとする者もなし故ゑ秀元等が向ふところ敵なく路道縱横ゑ往來あしたりける長政が先手の兵ゝはからずも解生が軍と相逢たり長政の家臣栗山備後後藤又兵衛五十騎ばかりの兵隊とそゝめ急ゑ解生を擊たりける解生が擊將楊登山遊擊牛伯英等來り救て黑田が兵を眞中ゑ追取かこんで攻擊たりされども後藤栗山ゝ日頃きこゆる勇者あれば敢て少しも是をおろれず大明の三將と相接し東西ゑ突南北ゑ旋り右ゑ轉じて二重三重ゑ圍みたる敵兵をものゝ數ともせず打なびけ遂ゑゝ安く圍みを破りて出たりける長政ゝ先陣すでゑ敵を受たると見るよりも左右の隊ゑ下知をなし自ら采幣を取て二千の人數を督し進めて擊てかゝるゑ秀元の先隊も先手勢戰ひを交ゆると見るより諸鐙を合せ馬を蹴立てさつと駈入大明勢の備の眞中を見すまし横鎚ゑ突入は解生等が兵軍一度ゑどつと亂れ立てくづれける李益喬劉通節兵を進めて應援をなせゝ解生これゑ力を得てまた戰ふ長政重てふるひ擊て先を驅れゝ秀元を始めとし其餘の諸將を壓へて跡よりして進みかゝるゝ偏ゑ大海ゑ蒼波れ起るが如くなり解生この勢ひを見るより事の不祥ありとおもひけん速ゑ引鐘をならして早々ゑ陣と退けける日すでゑ西山の雲ゑ落返照もわづか旗指物の旒ゑのこれる影薄き時なれば日本の諸將も今日の戰ひこれまでなりとてそれより敵とゝ追ざりける

朝鮮王再王城を開く事

九月九日ゝ重陽の節とゝ云ども朝鮮の王城ゑゝ只殺罰秋氣の物ゑなしき色のみ天地ゑ滿菊花延年の壽盃も行ゝれず日々ゑ日本勢三道を蹂躙すゞるところの村里と燒拂て擊通りすでゑ再ひ王城へも深く入らんとするより聞えけれゝ早く兵を避けて西の方へも臨幸あらんこそよかるべしと奏聞そるゑ朝廷紛紜と此ことの詮議の外今ゝ他れ論ゝなかりけり日本の兵士狂暴ゑして適々我國れ民百姓を獲えぬれば悉く其鼻を切て武勇を去めすゑよつて人々これと鬼畜の如くゑおそれけるすでゑ日本勢稷山ゑ至る時ゝ都城の人みな〳〵奔り散じたりこれに依りて王城の騷動すくなからず

上下あいて忙しく今ゐも敵の寄來るが如くよ逃げまどふよ付てゝ内殿宮殿の類ひをば兵を避て西よ下しやせといふよ決定して先これ等をバ落しけりこの時に經理楊鎬提督麻貴將軍ゝ京城よ屯をなす平安道の軍五千餘人黃海京斤の軍數千人王城の守りのため至り來るとバ分けて江灘を守らしめ倉庫の米穀を警固ゑたりける日本勢京幾のさかいまで入來りけれ共打つゞゐて王城よも至らずそれより引かへして退きたりそれより滿正ゝ蔚山よ屯をなし行長ゝ順天に屯をとゞむそれより泗川の地よ到り首尾七八里が間よつゞきたり是時王城の守り堅固ならず朝廷の臣あらそつて都城を開き敵を避るの計のみたてまつる知事申碓といへる者進み出云けるやう車駕今度蠻邊よ幸あるあゝんよつき臣此所へ共むかし兵使とし參るゆゑつぶさよ蠻邊の道筋諸事の案内まで是を存じたりゑかしながら遠田舍の事なるゆゑ萬事不自由なることゝ何れ疎のなき中よ第一憂とすべきこと醬のなきこと氣の毒ゐれ若これゝの物よおゐて預め辨ぜずんバ何をもつてかは用よつゞかんと眉とゑゝめ一分別なし顏よ逃たるを聞人つたえて是を笑ゝぬ者こそなかりけるかゝるところへ元帥權慄も走りて京都へ逃れかへるを王李昭これと引見して帝都を一先ひらくべきの議よおゐて如何あらんと問給へば權慄答て當初車駕の西よ幸ゐりし時遂よ都城よかへらせ給ふべきことなりし今度再び臨幸あるならバ當よ西方よ暫く止り住して賊勢如何と見給ふべしと云ふを諸の大臣の中こゝろあるが輩ゝ權慄か憶病なる奏を聞かれが元帥の任よあらざる事を嘲りけるかくて又權慄ゝ日本勢の退くよしを聞てまた慶尙道よ下らんとすると大臣の内よ氣概ある輩ゝこれが奏を奉り權慄が器量ある武臣元帥の任よあたらざる事と諫むれども朝鮮王此奏と聞用給ゝさるゆゑ是非なけれ

大明の兵星州谷城を乘取る事

同年十月麻貴將軍ゝ李如梅を大將として數千の人數を引卒し星州谷城よ入てこれと襲ゝしむ星州よ備へたる日本の大將ゝ筑紫上野介久留米秀包こゝを守れるところよ何れも小勢なりしが時をでゐ寒ゑおよべバ各打廻りれ諸大將達もその道筋の城々を明ゑりぞき釜山ちかくへつぼむといへども久留米筑紫の兩將のみ城を明けて立退んよ若や敵のためよあとをつけられて叶ふべからずと考ばらく思維よわたれるところへ山口玄蕃允が一手の内南部無右衛門等が兵士を合て二千餘騎谷城より星州までその道の程一日路ばかりのところをむかひのためとて出ける途中よして李如梅が星州を襲ゝんとするの軍よ相遇て無右衛門等ゝ得たりかしこしと戟をまじへ且つ戰つてゝ進み行けるが如梅等が後より近く追付喰とめんとする時ゝ返し合せて矢軍し凡そ三十里計のところを過來るよ星州城も程ちかくなりけるまゝ筑紫久留米の兩將も城關と啓て打て新手をもつて手痛くはげめどその力敵しがたくやゐもひけん暫時陣を退けて後陣の至るを待て同く城と圍で攻撃んとこそ

計りける斯て築紫久留米より南部山口の人々相集りて評定す敵の一端退くことゝ後陣の大勢を待よあらざるや重て大軍を促して此小城を取り圍んとそる体なり敵すでゝ圍の後ゝ明退んとおもへどもなか〳〵もつて叶ふべからず今夜のまぎれゝ人數をまとひそかゝ引退くゝゝ過べからずとて戰ひ勝の勢ひゝ乘じ敵の退く後ゝつゞひて星州城と引拂ひ谷城へとこゝろがけて引かへるゝ谷城ゝすでゝ大明勢ゝ攻落さるゝと相見へ日本れ旗指物ゝあらずしてみな明人れ旌旗なれゞ今ゝ此城ゝ入るゝも叶ゝず求禮の方へ退きける此間ゝ大河あり渡りの所を尋ぬるゝ船一艘もあらざれば如何ともなしべきやうこそ無りけりされども南部山口等の者どもの量見ゝて大軍の押通るゝゝ元ゝり絶處なしと云ゝずや我家ゝ川を渡すの法ありとて先馬武者れ達者なるをゑらんで五騎三騎づゝ組合せ互ゝ鎚を取合すまた弓持たる騎兵ゝ是また弓を取而して面々の鞍の前輪ゝ糸繩の類にて玄つかとこれをくゝりつけたるゝ波水のためゝ押切りて流されじとの支度なりまた歩武者ゝ歩武者と是も一所ゝ組合せ鎚長刀ゝ云ゝ及ゞず手頃れ得ものを持はどあれゞみあ〳〵これと取ちがへ具足の上帶ゝ玄つかとくゝりしめ付て惣もちゝ押ながしの爲なりけるもでゝ其支度とゝのへゞ騎馬ゝ水上ゝ至り歩士ゝ川下三千人の惣人數拍子をろろへて一度ゝさつと乘こんで水を渡すゝそさしも大なる川水とゝゆせども湍を乱ち淵をふし切て何の仔細もなくやす〳〵とこそ渡しけり斯て大明の兵士ゝ両所の城を一戰の功ゝ取収めたりけれゞ其勢ひゝ乘じて青山の地ゝ出張して居たりける日本勢ゝ時すでゝ十月ゝおよんでゝ朝鮮もとより寒氣の强き國ゆゑゝ霜さびしくして膚ゝせまり風はげしくして人馬の働き手足自由にならざれば兎ゝ角舊年の其内次第ゝ寒氣彌増すゝし大雪れふらぬ内ゝ打て出て所々ゝ働く人數共を退くゝしと約をなし大半ゝつゞひたれども未だ毛利秀元一手の人數の引入ぬを相待て居る時節なるゆゑ青山ゝ出張の大明人と合戰あるべきこゝろなく徒ゝとゝごしける此時ゝ毛利秀元が一手ゝ彦陽蔚山へかゝりしも漸くゝ引入けり後殿のためとして宍戸備前守(毛利家れ將なり)一万餘人淺野左京大夫三千人太田飛彈守八百餘人を殘し惣軍と拂つてその後ゝかへりぬべきの約束を定めける

大明の惣帥刑介朝鮮に到る事

十一月中旬ゝゝ大明の惣大將刑介ゝ鳴綠江を打渡り朝鮮の王城ゝ入らんとなしたりける時すでゝ嚴冬の折ゝあひ雨雪毎日降つゞけゞ途中の遲滯意の外ゝおりけるゆゑゝ漸く十一月廿九日ゝ至り初めて王城ゝ到着す揚經理麻貴將軍と評議をなし兵と催促し戰功と計んとす日本の諸將ゝまた明兵れ大ゝ至ると聞よりも偵卒をさしつかゝし其動靜と覘つて逆よせゝ寄られじとこそ計りけれ此時ゝ行長ゝ松島ゝ有清正ゝ蔚山ゝ在り此ところゝ要害の地なれば蔚山ゝ城をきづくがため清正自

身此ところに逗留なして造作の指圖となしそのいち清正ハ水路の諸城を攜へんとて先西生浦に往て機張に在り加藤清兵衛蔚山に留り秀元が兵これに加るこの故に明兵ハ清正の蔚山にありとれみ意得たり秀秋ハ釜山に在り此時日本れ兵士の朝鮮國に在るところの者凡て十三万餘人とぞ聞けるまた大明の大將刑介ハその兵と三協となす左協ハ副總兵李如梅馬步一万三千六百人盧得功董正誼茅國器陣寅陣大綱これに屬せり中協ハ副總兵高策馬步一万一千六百九十人祖承訓頗貴李寧李花龍柴登科苑進忠吳惟忠これに屬せり右協ハ副總兵李芳春解生馬步一万一千六百二十八牛伯英方時新鄭印王戡盧繼忠楊万金陣愚聞これに屬せり彭友德登山擺賽張維等ハ三協を救ハんため別に遊兵となつて居たりけり監察御史陳效ハ又軍中れ目付たり朝鮮の軍士ども亦これに附屬をなす鉄砲一千二百四十四挺火箭十一万八千支鉄砲の火藥六万九千七百四十五斤大小鉛玉百七十九万六千九百六十七斤ハ遼東の分守張登雲といへる者これをはこべり其外三眼銃鉄鬚長銃悶棍火炮火筒圓牌佛郎機等の兵器までみな〳〵是を取あつめ用ゆるに聊か欠なき軍法もつとも嚴密なる大軍の備へと聞えけり

淺野幸長蔚山に入事

かくて十二月になりしかば嚴寒ことにはなはだしく士卒困窮の時たがらも今こゝに大軍の兵と

起し來り多く國家の費をなし只に空しく止べき事ならず一時もはやく賊徒と退け朝鮮大明の民生を安ずるハにしくことあらじとて大將軍總督刑介ハ壇に登つて天地を祭り諸將をねぎらひ行列隊伍手配りれ諸陣を定め二三段前後の備へ遊軍等も至るまで其警戒も調ひければ諸手の備ひ一同に數万れ鉄砲と放ちたるハ恰も震雷れ山岳と崩ばかりに響き亘りて其儀式嚴肅なるハ如何ある天魔疫神も膽を失ひその形を潛むべうこそ見えしけれ斯て刑介ハ經理官楊高麻貴提督三協れ兵を師て慶州におもむき蔚山の城を攻めんとす蔚山の南東海邊に一ツの島山あり屈竟の要害なればとて清正が兵これを守る麻貴また高策吳惟忠の両將と彦陽梁山の地につかハしてこれが備ひをなし蔚山釜山の往來を遮りとゞめんためなりけり此時に完戸備前守淺野左京大夫幸長大田飛彈守ハ蔚山に入らんがため彦陽に陣を取さきたつて斥候の者を出して段々に敵の動靜と見るところ高策吳惟忠が兵共この由を見るよりも大勢の兵と出して日本勢より出したる問者と一人も生てかへすべからずとてこと〳〵く是を獲へて殺しける幸長これを大に怒り今このまゝにて蔚山に入らんとおもへど如此我手下の斥候の者を殺しける其敵兵を待そして城に入あらば後人の嘲り當時の面目何をもつてかこれを清めん一先敵を追拂つて此鬱忿を散ずべきとて則ち兵勢を進めんとするに完戸太田さて其餘の人々まで同くこれを止めて曰く幸長の云ところまことに武夫の素より勇むへき志ぞと

云なが〻然れども謀計の劣きの武將の恥るところなり今や明兵大勢なり我小勢をもつてこれを打んとせゝ偏おこゝろの剛なるばかりよてゝ何を以て利あらんや曲て只蔚山よ入らんことこそよからんと頻りよこれを異見すれ共幸長この時年いまだ廿二歳なれば勇氣さかんよしてはやり雄の若大將なれば中々もつて宍戸太田が言をも用ずたとへ謀計よゝ叶ゝずとも武勇よおゐてゝ何ぞ劣らん本朝諸神の冷力をも借奉り毛唐人原と打ち〻しくれんとつぶやきつゝ備を下知して駈出さよろの手の兵士何かゝ少しも猶豫すべき我おくれじと馳たりける宍戸太田の人々もつゞひて備と操出して我先よと馳出たりおかるよ途中よて明兵の押來れるよ相逢ふ両陣互よ兵馬をとゞめて戰ひを交んとす明兵ども幸長の小勢なるとを侮り二重三重よ追取卷て斬り亂る宍戸太田も突戰して幸長に助けをなす幸長を始めとし太田宍戸の輩も力戰して敵の圍を突出るを明兵ゝこれを逐さじと後をおたふて追かゝる幸長等も且ッ戰ひ且ッ退きその間三里よおよんでやうやくよ圍みを解たりける餘りよ強く戰ふゆゑ幸長が創を蒙ること數ヶ所よおよびしが蔚山近くなる時よゝ既よ戰死よ到らんとし敵の攻ること急なるよ龜田大隅守(幸長の臣)が一手返し合せてきびしく戰ひ自ら馬上よ鑓をかつとりて大明人の勇み進める眞中へ衝かゝり命とかぎりよ戰ふたり麻貴提督が軍將安順仁栗得商といへるもの戈をなゝべて是をさゝへとゞめんと左右より兵士を進めて打てかゝるを龜田ゝもとより其聞えある勇士よして日本の戰場よ幾回か武功とあらゝと者なりければ是を少ーも事とせず家の子原田國原萩今井なんどゝ云る者と鐙の鼻をなゝべて乘切り遂よ二隊を追退けて順仁をやりつけ得商をば大隅自ら切て馬より落す大明の隊陣よゝ此ありさまを見るより餘りの長追無用なりとやおもひけん揚鏑麻貴の兩將鐘をおらし旌をおづめて進まねば幸長太田が兵ども事ゆゑなく蔚山城へ入よける

明兵蔚山城よ寄る事

こゝよ蔚山の城をかためたるゝ加藤清正が家子よて日本無雙と呼れたる加藤清兵衛小代下總佐々平左衛門齊藤立本等よ毛利家の者共また筑紫勢少々これよ加りてぞかためけるかゝる處へ幸長太田の家の旗馬印の城中より見ゆると同じく加藤清兵衛小代下總是を見付て爰よ見ゆるゝ淺野太田の旗よゝあゝずや如何さまにも敵と戰ひを合せたる体と志られたるぞ早く門を啓て助太刀せよとて十卒よ下知を加へ騎馬の兵を馳たりけりこの援兵よ力と得幸長飛彈の兩將ゝ心やすく蔚山の城よ入たりける宍戸備前守が一手の兵士ゝ明兵のためよ隔てゝれ城中よ入ゝんとすれども直よ入こと叶ゝずしてこれより備を引かへし間道よりこそ入たりけれ既よ蔚山ちかく明兵共の寄來るぞと聞えければ加藤清兵衛ゝ城中をかけ廻りて諸軍事を辨ずれば幸長ゝ城面を守りて敵を防ぐの用を

なをまた毛利秀元ハ人衆を分ちて島山を守らせ太田飛彈守ハ遊兵とおつて弱からん方と救ふべしと支配せり此城中もとより糧米多からざるゑ其上また近郷の商人民百姓どもの大明人大に至るとゝ聞ゑおどろき其妻子を携へてみな城中ゑ入來りこれをもつて穀粟最も乏しくして日本の諸將共憂ひれもふの第一なりかくて李如梅揚登山が兵共蔚山城ゑ攻寄たり寄手の大將遊擊擺袞ハ五百の鐵騎を引て城壁下ゑ到り相ともゑ競ひ進む城兵どもこれを見て鳥銃とつるべ打ゑ發すれば擺袞が備へ去どろゑなつて馬の足を立兼たり幸長等これを見るより城門を押ひらかせかゝれ〳〵と下知去ければ毛利淺野の両家の騎馬鬨の聲を擧ると一拍子ゑ駒の頭をあらべ鑓のほさきと揃へて突かゝる擺袞ハ五百の人數共ハ日本人の衝てかゝるを見るより一戰も合せずなびき立て引退く日本勢ハ勝ゑ乘じて進みゆき何の思維ゑも渡らず追かけゆく擺袞が兵ハ日本勢とパおびき出さんための餌の兵をもちひたれば去とへゑ敵をあざむくこそハ勝あれとて恥辰とそて丶逃行けり如梅登山の両將ハ擺袞が走ると見るゑ後ゑつゞける日本の兵將備を虎蹈鱗形ゑならべて直道に向ひ會釋もなく打てかゝるを時分ハよしとおもひけん明の両將相鬪の喊を一聲二聲合せたれば明兵共はやく心得て備と左右ゑ押開き日本人の勇みかゝるとくる〳〵と引包んで真中ゑ取こめて水火を出して攻たつる日本の兵共武備十分に兵勢をふるつて競ひかゝり圍を突破りて出んとするを明兵共ハまた日本勢をこゝまて一人も殘さず討取んと戰ふゆゑ双方の手負死人その數多く出來たりけり城兵遂ゑ圍みを破りて城中に引かへせバ李如梅が二手の兵去たるく是と去たひ來りて城の内へ追討ゑ附入らんとす毛利淺野の人〻攻口を破られじとつとめて是を防ぎとゞむるゑ明兵も外郭までハ乘込けれど戰ひつかれ日ハ暮るつゆゑハ叶ハず追出さる大明の兵將ども今日の戰ひゑ一たび克の功を貪り其こゝろゑ怠り出て進み攻るはげをあくしてつゆゑ敗軍ゑおよびけるこゝにおゐて明將共心をあハせて今一度力をつくして攻るものなゝバ城ハ忽ち落へきものをと朝鮮の軍士ども語りつたへて是をおしまぬ者ハなし日本の兵將共それよりハ門を閉ぢ堅固ゑこれを守りけり此ゆゑゑ大明人數日ゑ至つて力を盡し攻れども克を取ゑと聊も叶ハずまた城中の人々も先度の戰ひゑこりはてぬればたゞゑ守りをなすのみゑて戰ふことハせざりける

清正毛利が軍と救ふ事

こゝゑ蔚山と島山との間ゑあたりて一ッの大河ながれ最もはやきところ有此所ゑハ大明の大將李方春解生等船をこの河ゑ浮べて近きあたりの里々ゑ火を放ち煙のまぎれゑ城中ゑおそひ入らんと去たりける城中ゑおゐてもはやく此事を察しけれバ急ゑ鉄砲と揃ひて放ちかけ去きりゑ方春解生が船を打やぶるゑ二將の舟鉄砲ゑ打破られて水中ゑ溺るゝ者忽ちゑ四五艘ゑれよんで死亡するも

の甚だもつて多かりけるが方春解生辛き目に逢ひわづかに命をまぬかれて舟と元のところれ返しけりこゝに加藤清兵衛ハ此城の体と察し見るに大明の兵ども毎日來りて攻るといへども未だ全く克ことの能ハざるハ是我兵將共のその武勇の他にすぐれたるゆゑといひ一にハ此城の要害のよろしきところある故に遂に不覺と取らざるかされども大明の大軍共兎に角この城と攻ネさんと欲する者ハ清正のおハしませるとれもふゆゑあり去からば遂にハ味方の無勢にて大敵にあたりがたき理りなりとれもふゆより毛利太田を始めとして籠城の諸將達にむかひ寄手のやうすと見い得パ鄂郭の外をかこみ還らし諸備の陣營をたて手と分て此城をかこみ詰たるハ是一端に引退くべき体とも見えず候あり且城内の兵粮ながくつゝくべきやうあく既に乏しきこと近日にあらんかは謀計何れのことていぞと中ける諸將達も兼て此ことをおもふ折からなれば各々清兵衛が察する條尤も同じゑからば機張に早く使者を遣し清正を呼向ひともに力をあハせて敵と除ふの外有べからずと相談ハきハめあが〻城外をかこみつめたる敵ハさながら屏風を立たる如く取まきて敵兵の眼とくばる中あれパ空飛鳥の類ハとらず地を走る物ハおか〳〵に能此中を通ずることハ得へからずこれに依て誰か一人參らんとて是を肯ふ者もなしこゝに幸長が家臣本村頼母といへる者進み出て某參上仕らんとぞ承合たりろれより即刻に馬を馳せ難なく敵中を走りさつて二日目に機張に當着すかくて清正の幕前に至り見へて委細に城中のやうすを演たりかくて事の急なるおもむきを報ずれパ清正ハ木村がかたるを聞よりも早く近從の士に下知し早船を仕立させ一騎なりとも乘出し淺野が大事を見とゞけてハ我命生たる甲斐ハあるべからずと自らも速に六具をかためて馳せんとず抑清正がケ程まで左京太夫が前途を見んとせらるゝこと如何なる故ぞと尋ぬるに先年淺野彈正が秀吉公と諫めし時大閤大に怒りと起して勘當し給ひしが其後これが科を赦免あらんとおもひ給へる折から肥後の國れ梅北と云る者一揆を起し黨を立て熊本の城を收め取てその威望を振ひし時秀吉公ハ彈正がこゝろと安んぜんと思召し彈正が子息左京太夫幸長と梅北が討手にさし向られしにその功勳を扳んでたりしを初陣の手柄とし重て朝鮮征伐の人數の内にも加へたりこの時に彈正ハ清正宿老の大將として殊にハ武勇れ人なれパひそうに私宅へ招き請じて幸長を清正にたのみ幸長ハ我子ながら甲斐〳〵しき生れ付きとや申すべき併ながら未だ無功の若輩なり貴公ハまとに日本双無の功將たれパ萬事軍中のほこゝろ付偏に幸長が身に於てハ辱き事なるべきとありしかパ清正も其志を感じてこゝろ安かれと請合て相助くべき儀を約束せり此ゆゑに今幸長が若し過てこゝに死する者ならパ我何ぞ彈正に再び面を合そべきとハ云けるなりまとにもつて一言の約を違へじと危きことを顧ずそれ憤りを發しける雄士の道こそ頼もしけれ

加藤清正蔚山城を救ふ事

加藤主計頭清正ハすでよ蔚山城と救ハんため鎧の上帶を玄めながら幕の中を躍り出れバ後よつゝく扈從とも太刀とかゝへて走るも有采幣もつて追付もあり冑や刀調度なんぞ手々よ是等と取持て廣間をさして駈出れバ物よなれたる武士共早いつの間よ支度玄たりけん遠侍よひつしとなゝぶ中よも飯田森本相田吉村近藤古橋なんぞゝいへるハ清正が家の子よて一騎當千と日頃沙汰してその名を呼れし者共なれば一度もおくれを取らざりける清正ハ何よりも快く笑顔し左右を見廻し出らるゝ機張の留守居とし加藤美作片岡右馬允これ等二人よ千五百人を分つて止めらるまた釜山浦の諸大將へハ急ぎ蔚山の後詰あるべしと使者と云やりその身ハ船よ取乘ける此時よ清正の引卒するところの人數わづかよ五百餘騎よハ過ざりけり大明の揚高と呉惟忠が盡蔚山の城とりこみとゞむること緊しくして毎日數万の新手を入替〳〵是と急よ攻るといへども城内の守り堅固よして落城なすべき体ハなしされ共城中の人數を寄手の大勢よくらぶれバ曾よりも對揚すべきもなけれバまた討出て合戰すべき手段もおし唯よ守りを第一とするゆゑよすでよ爰よて十三日まで過よける

麻貴島山城を攻る事

大明の軍將麻貴茅國器の二人ハ蔚山の守り強きを見るより強城のもとよ日を盡してその兵と鈍らさんより陷れ易からん方を先せめよとて両人が兵士を一よして嶋山れ城に押寄せ鬨の聲を上るとひとしく此城を即時よせめ破れとて勢ひよ乘ずれども此城もとより要害よく屈曲たる山嶽たやすく登るべきやうもなき所なりしがゆゑも麻貴國器左右よ備とたて定め自ゝ抱と取て攻つゞみをあらして下知するゆゑ士卒ハ法をきびしくおそれ強て登りて城壁よ着んとそれバ防守の兵明兵どもをおもふ圖ハ引受鉄砲の筒先を揃ひてこれを發することハさながら雨の降が如くなり先よすゝめる大明勢一拍子よ七十餘人打仆さる麻貴ハこれを見て大よ怒りて士卒をはげまし備ゞ等が圓牌を取らざるゆゑ敵の的となつてあれるなりはやく小楯ともつて矢先と防げと下知すれバ先手よ進む士卒ども再び足をすゝませ持楯をろつぎつれて曳盤出して攀登れバ島山の守りの兵ども此度ハ鉄砲をバ打出さず兼て支度や玄たりけん大木大石を取集めかさよかゝつて轉しなくれバ是よ當りて仆るゝ者やよハよ數十百人よおよんで恰も魚の鮓とつけたる如くなり後陣よつゞける大明人此勢ほひに勇易して足立しどろよ成ところを城中よりねらひを定め數百挺の鉄砲を一度よどつと打て放せバ百千雷の落かゝるが如く敵の陣中よ亂れ散じ空矢ハ一ッもあかりけり両三度まで打仆さるゝの手負死人すべて大明の陣中よ四百余人と記されけり麻貴茅國器ハ此有さまと見るよりともに詈りけるやう此城の強きことかくの如きの体よてハ味方の全軍ハ殺し盡すともなか〳〵ハ陷るべ

さやうなし暫く攻口を退けて再び火炮を発し〻してこゝを攻むべけれとて両手の人衆と退け近邊の岡山より陣取りて居たりけり

清正蔚山城より入る事

加藤肥後守清正ハ五百餘騎の兵を引卒して船十艘を乗切て西生海より來りける其速うおること恰も鳥雁の水より浮ぶが如くなり時より清正の裝束よハ銀の帽子の兜鍪を戴き長刀右の小脇よかいこみ舟の頭よつゝ立て棹子どもより下知をなし兵士をさしまねぎて両眼を見ひらきて大音をあげて舟を走らせたるハさながら金剛四天の如くあり明兵どもハ妙法蓮華經の馬印を見るより兼て清正の勇敢なるよ懲りおそるゝ事なれを誰か進んで防ぎとゝめんずる者なくして清正ハこゝろ安く城中よハ入よける既ふ城中より入けるよ城中の諸將幸長を始めとして百倍の力を得れば大よよろこび勇みける暫時の間もやすみなくはや明兵の城よつき屏よ登りて入らんとするの形勢ハ恰も蟻の如くおり上よりハまた城壁よつかせじと木石と投ち矢砲を飛せて是を防ぐよ明兵共のこれよ中るハ或ハ兜鍪を摧れ或ハ頭顱と斷れ肱股骸腸胴中の嫌ひおくこと〻く打くだかるゝされども明兵かたたりなく毎日屢戰ふといへども遂よ一度も利を得るとなし今ハ明の諸將ども怠り倦んで見へよける爰よ揚高か部將鄭景岡といへる者ひそかふ揚高が幕中より來りて察するよ此城を力ちをもつて攻ん

とせば味方を損ずるのミよして遂よその功成かたからんかおもふよ城中水の手正に便なゝず且また粮米も多からじろれよつねてい今より味方の諸軍戰ふことと全く止め偏よ圍むのみよして遠ぜめよこれとおしなば勝ずといふこと有べからずと云さりけり揚高聞て大よよろこびそれより諸手の大將共よ示し合せて攻口をくつろげ城を圍んで陣營を連ね水の手を吟味して城中へ汲んずる溪口をとゝめてきびしく番手をすへ置て油斷なくこれを守らせける

蔚山城飢渇の事

こゝよ蔚山城曾より水の手乏しふして夜よ入て人歩と出して溪水を汲とらせけるところよ寄手の方よりこれを察しきびしく番手を置げるゆゑ出て汲べきやうもあけれバ城中の難義大かたあらず日々渇よおよびけるゆゑ士卒の愛ひ甚だしきよ去かのみならず兵粮もまたつくるよ至つて一方ならず艱難よ至り此城の危きこと旦夕よ逼りける城中れ士卒共水よ渇して堪へざれば密よ城の外よ出て濕を屍よてうめ臭水の半ば血よて混れるを汲取て暫時の渇を去のぎ飢ていまた粮あさの初よい紙を嚙んで氣を助け或い鼠をふとべ或い壁土の中ある草蘇を煎て食よ充れどあか〳〵よ堪て生べき伎倆もあけれバ牛を殺し馬と屠りて口腹と養ひさり斯ても叶いぬ時よ至れバ城兵共ひそかよ城をさのび出て明兵の討死したる死體をさぐり求めて腰よ付たる燒米牛の炙りものなんどを見付

れば尋常ゑ万金の珠玉を得たるが如くゑおもひとなしてこれをさがせり揚高が陣中の夜廻りの者共これを知り揚經理ゑ訴れば揚高即ち朝鮮の軍將金應瑞ゑ命じ城兵の出るを待ゑひれば應瑞すなわち朝鮮國の軍兵の勇士とすぐつて三百人城外なる池濠の傍ゑ伏とあつて城兵の出るを今やと待居たり城中の武者共ハ斯とも知らず今夜も亦例の如くゑ城を出て濠中ゑつゐて水を呑尸死の腰を探り獲して晡も有やと尋ね行を待儲けたる朝鮮人ハつと出てこれを獲ふるゑもとよりも飢渇ゑたるつかれ武者敵すべきやうもなくて凡て百餘人まで擒となるハ口惜きことゞもあり城中の諸大將明て此事を聞玉ひ是等のこと畢竟國の名とれなり向後ゑおゐて兵士たる者ハ云ゑおよばずたとへば歩卒たりといふとも腰ゑ刀をさしはさまん者の大いなる耻辱たりその末々の人歩かたく禁じて出すべかゝずとてそれよりハ門關をきびしく戒めければ城中いよ〳〵飢勞れ夏暑ゑ聲なき林蟬の麗まつ風情ゑ異ならず

加藤清正揚高を誘く事

明れば慶長三年正月ゑありぬれど蔚山籠城の人々ハ新歳を祝すべき儀式もなく舊きゑ去たがつて飢餓勞困日々ゑ彌増のみゑして未だ四方の援兵も來り助けず樊籠の飢鳥屠所の羊豕ゑ異ならぬを清正ハ大ゑ怒りとても虚ゑ死する命をこゝゑ一ッの謀慮をめぐらし敵將揚高を欺き誘てさしちがへ死なんゑ何れかたきことかあゝんぞとおもひすませば獨りこゝろゑ一量見し諸大將ハ云ゑおよばず手の者常ゑへだてぬ輩までも此議とば全くしゝせずされども鰐平次古橋清介とて去さしく召仕ひける二人の近徒を使者として陣中密ゑ城外へ出し揚高が方へ通ゑて日本の大將加藤清正すでゑ貴方と相戰つて多年ゑれよふといへども我憐むハ衆多雙方の諸軍勢何の罪なふして孤獨ならしむることを寔ゑ人の主として憂べきことあゝずや是をもつて我自ら揚高へ面談なしその後ゑ相計りて両國の兵事を止んと云やりける揚高これと聞て大ゑよろこび幕下の軍人ゑ向つて清正が今籠城れ勢い盡き降參を乞こと如此なりされども我何ぞこれを赦さんたま〳〵清正がこゝゑ來れるものならばこれ生捕て朝廷ゑ獻ぜんとて膝を扣て笑談すれば聞者これをよろこんで皆々眉と開きけりすでゑ其期ゑなりぬれば急ぎ揚高先立て清正と約せし所へゆきて頻ゑ清正方へ人をつかハしてこれを招くゑ清正もすでゑ出て會ぜんとて銀の冑の緒をしめてその軍粧をかいつくろひ城を出るゑおよびで淺野幸長君を聞出し大ゑおどろき取ものも取あへず清正が方へ來りかたく止めて諫めけるハ公もし出給へて萬一事と過るの儀あらば自他の譏りを得るのみか第一ゑ我日本の長き耻辱となるべきなりその上また公れ意ゑ敵と計るが如くゑ揚高が量見も如何なるたくみをなすやらん其程も覺束なし若また公の意ゑおゐて彼と一端約をなし堅約そむくを憶したりぞもおもひあして

敵のあざけりと惡み給へゞ幸ひに揚高が公の形を見ちらざるこそ一段なれ我今公に代りて清正なりと名乘て往んと再三にこれを止むれゞ清正の勇肯常に我おもひ詰たる儀におゐてゝ聊も他の量見を用ゆべきの事ならねどさすが幸長のいまだ少壯のこゝろなるに賴母しくも道理とのべふかき異見により清正もこれに心服して其信切を感せらるこゝにおゐて清正へ重ねて人を楊高が陣に遣し我清正儞ぢ楊高と約して和談せんと云しへ儞を擒にせんの謀計なりされども儞もまた我と計るの志ぞと見へれば儞が走つて擒ゐもなしかたらんとおもふにより今日れ出會とゞさてぞ止たり重ねて互に鏃を取て馬上の對面すべし其折からへ大義ながらも其許の毛首を申受んずぞと高聲に喚へらするを楊高聞てさてへ清正めがこゝろ付て來らぬぞさらば軍兵をそゝめて此城を一端に攻おとし彼清正めを生捕くれんづものをと大に憤りを發しすでに軍兵をそゝめんとすといへどせ時甚だしくひへかへり軍兵の手足痺痛になやみうじけて戰鬪と育へざれば是非におよゞず止に けり

蔚山急を諸將に報ずる事

大明勢十萬餘の大軍にて加藤清正淺野幸長の籠りたる蔚山の城に取かけて交戰することきびしき上城中もつての外に兵粮乏しく大軍とぴき受たれゞ両將の急難瞬息の間に有りて逼りたる由と日本の諸大將の方々の城にたて籠りたるが方へその告報ずる事梳の齒を引が如くに使番を馳すれゞ秀元秀秋等の諸將蔚山れ後詰怠るべからずとおの〳〵一所に集りて僉議區々なりし時に蜂須賀家政諸將れ中より進み出てヤけるへ大閤すでに鍋島直茂ともつて軍中の目付たる由と仰せ出さるゝの旨趣を察するに彼人老功の勇將たるをもつての故なり去かれゞ此おもむきを早く通じて直茂の量見を受るに去かずとありけれゞ衆議ともに是に一決し直茂の方へ使者を立て其計策を問へるゝに直茂聞て明兵寇に大勢たりともよも五十万にへ過べからず日本勢のこゝにある者對楊するにへあらざれ共武備おんぞ我々の精兵におよばんや是を援ふこと速おるにへ過べからずと云に一定して各々諸手にしめし合せて正月上旬に蔚山の後詰をぞなしたりける先だつて小西行長へ三千の兵士を揃へ船と順天より發すれゞ秀元秀秋家政の諸將へ三万の兵騎を馳せそれ外四國の軍船二万餘人もまたこゝにおし寄來りて蔚山近邊おさしかゝつて後援の勢をさかんにしてこそ待らけける楊高へ蔚山の援兵の近日に到り來ると聞よりも大におそれて兵を分ち謀計を運すの量見にもれよばず軍中に觸さとして速に軍をかへすべきとぞ告たりける大明の諸陣營一度にさへぎ立逃げ支度をとゝれひて馬に鞍置陣を除つて去ぬんとする折ふし蔚山の後詰の兵共次第〳〵に近つきより數万の旌旗を前山の風にひるがへし萬馬の塵へ當路の煙とたゞびき海陸の貝鐘太鼓へ空臨に揚つて

おびたゝしく四方より唯一所へ卷よせ來るが如くゝ聞へて楊高今ハたより得ずおぞろき遽て前後と乱してのがれかへれど清正ハ城中ゝ在るゆゑゝ未だこれと知らずして追討ことハせざりけり

鍋島黑田李如梅を破る事

こゝゝ秀元秀秋等とはじめとして蔚山の援兵はどな〜近ついて見てあれバ大明の麻貴等が兵およそ五万餘の人數ゝして島山の此方なる岡山ゝ陣取たり直茂ハ是を見て我試ゝこの敵と討べきなり味方の其利ゝ乘ぜん時追つゞめて城内ゝ入給ふべしと云畢つて其場をたつ此時ゝ後藤家信（龍造寺隆信が三男也）直茂の側ゝ在けるが明兵百萬と稱ずること〜しげゝ聞けるがさのみの勢ハあるべからず是を破るハ安からんなどとつぶやけば黑田長政これを聞つけ家信〜何をもつてか斯いふぞ家信ハつゝしんでさんしハ敵の陣營ハ炊烟の立ところハ以の外ゝ幽おるはさのみ大勢ゝハ在べからずと見て偖こそ斯ハ申なれ長政聞て打うなづき偖ハ大明の者共味方の援ひ來るを聞矢風ゝ悚れて圍ミと解て退くゆやあふん兎ゝ角先づ此岳山の敵を除ハでハ敵の樣子ハしれまじきぞと直茂ゝ示し合せともゝ備をすゝめける直茂も勝茂も父子ともゝ兵をすゝめて三軍一同ゝかゝりける勝茂時ゝ十七才信濃守と申て直茂ハ嫡子なるが去年十月大閤の命あつて直茂ゝ命ずべきこと有れバ儞ぢ朝鮮國ゝ往向ひ父ゝかハりて軍議をなし兵事とつとめよとのゆ下知を蒙りさてころ只今も一所ゝハあられける此岡山ゝ引殘りたる明將ハ麻貴提督と李如梅が去ぬる頃島山の城ど攻あぐんで扣へたりける軍兵なり後藤家信ハ諸備より眞先ゝ進んで河流ゝ馬をさつと乘入波おし切て渡るを見て家信が家の子空閑中村河原成松木島末次あんどいふ者馬と河水ゝ乘浮め主ゝおくれじと泳せしが程なく向ふの岸ゝ打登り敵中ゝ駈け入れバ敵ハさしもの大勢ゝて両鉅を張り中ゝ包んで擊んとすれバ味方ハ敵ゝ包まれじと東西ゝ殺りめぐれどもれど敵ハ大勢ゝて遂に中に取こめ水火ゝなれと戰ふゆゑ成松中村の二人ハ深手と負ふて是非なくこゝゝ討れけり後ゝつゞくハ鍋島五平成富何某多久諫早須古藤津城原蓮池なんどゝいふ一騎當千の勇士を先として直茂の六千人瀬波を渡りて打上れバまた一方の瀬を隔て黑田の一手打わたりて無二無三ゝ斬くつそ李如梅麻貴が軍兵共こゝろハ猛く勇むといへどもつゝける味方のなきをさとりて戰ひなかばゝ軍をかへして退きける

蔚山城兵揚高を追かけ敗る事

蔚山の城兵翌日早朝ゝ至つて揚高が軍營ゝ多く野鳥の聚散するに心づき物見と出して窺ハそるゝ人一人もあかりけり偖ハ揚高が夜の間ゝや落行けん心得ぬことかな若また近日ゝ味方の諸將の此城を救援する沙汰あるゝと聞ふぢしてや走りけん兎ゝ角ゝ彼が軍を追擊て分捕せよといふまゝゝ清